みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

牧民の暮らしを変えた, 牧民のなかの牧民 : モンゴル国の労働英雄 レンチンギーン・ミンジュールは語る

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2009-04-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001894

小長谷有紀編『モンゴル国における20世紀』
国立民族学博物館調査報告 41: 7-108 (2003)

牧民の暮らしを変えた，牧民のなかの牧民

モンゴル国の労働英雄　レンチンギーン・ミンジュールは語る

解説
1 社会主義的集団化以前の暮らし
1.1 生まれ故郷
1.2 中国商人
1.3 放牧の方法
1.4 家畜の売買
1.5 木工・銀細工職人
1.6 著作紹介
1.7 胸いっぱいの勲章
2 社会主義的集団化の過程
2.1 軍隊生活
2.2 郵便配達の任務
2.3 結婚
2.4 1940年代のウランバートル
2.5 ネグデルの設立過程
2.6 ムルン郡のネグデル長
2.7 内務省時代の任務
3 ネグデルの発展過程
3.1 家畜の共有化
3.2 組合加入方法
3.3 ネグデルの仕事
3.4 ネグデル長の任命
3.5 ネグデル長の使命
3.6 学校寮の建設
3.7 宿泊施設の建設
3.8 野菜栽培
3.9 手工業の発展
3.10 イフ・タミル郡「輝ける道」ネグデル
3.11 牧畜の改善
3.12 医療・保健
3.13 乳製品工場の建設
3.14 発電所
3.15 労働英雄
3.16 定住化政策
4 暮らしの変化(ウランバートル市内にて収録)
4.1 牧民文化会館の建設(オド映画館にて)
4.2 野菜の食事(食品市場にて)
4.3 パンの導入
4.4 お茶の輸入
4.5 乳製品
4.6 古い町並み(第一10年制学校前にて)
4.7 ハルハ川戦勝記念の丘にて
4.8 駅伝制度
5 旧国営酪農場ガチョールトにて
5.1 酪農場の建設
5.2 酪農場の崩壊
5.3 ネグデルの可能性
5.4 環境破壊
5.5 流通の組織化
5.6 民主化革命
5.7 ネグデル時代のノルマ
5.8 流通組織としてのネグデル
5.9 人材の育成
5.10 イフ・タミルの駿馬
5.11 家族
5.12 酪農場の未来

解説

ミンジュール氏は，1914年すなわち辛亥革命後いまだ社会主義革命が始まるまでの間，現在のアルハンガイ県タリアト郡に私生児として生まれた。生活苦を強いられて育ち，21歳で入隊してはじめて乗馬や文字を学んだ，と言う。生まれ故郷を遠くはなれた東モンゴルで3年間の兵役を終えたのち，故郷にもどって郵便配達の仕事に就いた。約1年後の1938年，人民革命党の指令により，生まれ故郷に近いところで党細胞

長を務めることとなり，各地で党の組織化の仕事にあたった。やがて第二次世界大戦が始まるとともに，内務省の任務につき，中国内蒙古自治区へ出かけた経験をもつ。1955年，牧畜協同組合ネグデルの組織化が本格的になると，生まれ故郷のムルン郡のネグデル長を任命されて，ふたたび草原にもどる。その地で，彼はさまざまな新しいアイデアによって積極的な経営に挑戦し，全国的に有名になる。さらに，ネグデルの拡大整備期，1961年に赴任したイフ・タミル郡の「輝ける道」ネグデルは，模範的な牧畜協同組合としてつとに知られるようになった。こうした長年の功績をたたえられて1969年ミンジュール氏は「労働英雄」として表彰され，その名は全国にとどろいた。

このように，貧しい家庭に生まれた遊牧民が，刻苦勉励ののち，貧しい人びとをしあわせにするために，という理想をいだきながら，社会主義的集団化を推進したのである。その物語は，すでに自叙伝『人生の経緯より』として1983年に刊行されている。民主化を経て市場経済へ移行している現在では，もはや単純に過去を礼賛することもできない。新たな時点からの，過去に対する再照射として本インタビューは意味をもつだろう。

インタビューは，2001年８月，まずミンジュール氏の自宅で午前と午後に分けておこない，つぎに首都ウランバートルの市内を歩きながらおこない，さいごに首都から東へ50キロメートルほどのところにある，かつて全国最大規模の国営酪農場があった場所ガチョールトでおこなった。

そもそも，ミンジュール氏に初めてお会いしたのは本インタビューをさかのぼること１年前，遊牧の移動について聞き取りをしようとした時であった。そのとき彼は，冬営地と夏営地という言葉を使用するものの，春営地と秋営地という言葉を使わなかった。一般のモンゴル人が四季を均等に語るのに対して，彼の表現は明らかに偏りがあり，それゆえにこそ，社会主義化がすすむ以前の，かつての風景が脳裏に埋め込まれているように思われた。だからこそ，正確に記録をしておきたいと思われたのである。

ところが，今回あらためてカメラとマイクを指し向けると，その表現は変化し，全体として公式見解が表出されているようである。それでもなお，社会主義的集団化とは何であったかについて，遊牧民の立場から，その心のありようから，真実が映し出されていることに変わりはない。そこにこそ，このインタビューの大きな意味がある。

M：R. ミンジュール
L ：I. ルハグワスレン
K：小長谷有紀

1 社会主義的集団化以前の暮らし

1.1 生まれ故郷

L：我が国の新時代の歴史において特別に重要な地位を占めていたネグデル化運動に当初から直接参加し，功績を挙げた労働英雄 R. ミンジュールさんと私たちは会見しています。さて，ネグデル化運動に関するお話をうかがう前に，幼少期，青年期の思い出からうかがいたいと思います。

M：私は旧サイン・ノヨン・ハン盟のダライ・チョインホル王旗，現在のアルハンガイ県タリアト郡ムルン・バグ（最小の行政区画）のトーロイトという場所で生まれました。「トーロイ」(*Populus diversigolia shrenk*) という木があります。これは非常に稀な木です。私の故郷には若干生えています。その木が生えているところなのでトーロイトと名付けられました。そのような地に私は1914年，人民革命の７年前に生まれました。私が生まれたころ，当時のモンゴル人は個人生産者であり，王侯貴族，僧侶，寺院の支配下で生活をしていました。そのような時代だったのです。若者の大部分が僧侶で，少数が個人で牧畜を営んで生活する，このような生活しかない，そんな国だったのです。満州人たちはモンゴルに学校を設立せず，近代的な技術や科学に関して何もしていませんでした。ただ寺院，仏教の教えによってのみ生活させていました。今生で苦労をし，善行を積めば，来世は素晴らしくなるのだといって祈らせる，そんなふうに信じ込ませる，そんな時代に私は生まれました。当時の封建社会というのは，少数の人びとが裕福な生活をし，大多数の人びとが貧しく隷属的な生活を強いられていました。

私は極めて貧しく，富者たちの召使いとして働いていたノルジマーという独り身の母から生まれた子どもでした。私は父を知りません。父親のいない子を「ボタチ（私生児)」と言います。私の父がどのような人であったか，私は現在に至るまで知ることができていません。知らないのです。母は私が６歳の時亡くなりました。母と２人でよその家に仕えて生活していました。母は私が幼いころ，重病のためにある冬に亡くなってしまったのです。私は６歳で取り残されました。そして，その時から母の弟のレンチン家の一員として生活し，現在彼の名前を父姓としています。レンチンギーン・ミンジュールと名乗るようになったのはこういう次第です。そのレンチンという人は非常に貧しい暮らしをしており，家畜や財産といったものはなく，狩猟により生計を立て，家庭をかえりみない人でした。そして，火打ち石銃を担いでは野獣，タルバガ（*Marmota bobak sibilica*），ジリスを狩って売り，それで生計を立てている人でした。おじがこのように家庭的でない生活をし，草原で主に狩猟をしている人だったので，母が亡くなったそのころから私は母が召使いをしていた富者たちのところにいって仕事をし，仕えるようになり，ある意味で浮浪児となりました。自分を必要とする人た

ちの子ヒツジを放牧し，家畜を放牧しては空腹を満たして生活していました。そのような子どもは私だけではありませんでした。一般的に地方ではかなりたくさんいました。そのうちの１人が私だったのです。他の子どもたちと違うのは私が幼少のころに孤児になったことでたいへんな思いをしていたことです。私は21歳までそのような生活をしていました。学校で学ぼうにも学校がありませんでした。寺院で僧侶になろうにもこのような生活をして浮浪していた子どもを僧侶にしようという関心は誰にもありません。レンチンおじさんは自分が食べることだけを考えていました。家族に関してはいいかげんだったのです。このような生活をしている人でした。

K：あなたご自身も狩猟に行ってらっしゃったのですか？

M：私はおじについて行き，野獣を驚かせたり，山水を鳴り響かせたりして，山からさまざまな動物，キツネやオオカミをはじめとする動物を追い出して銃で撃たせるなどの役割に参加していました。その当時の状況，生活はそんな風だったのです。モンゴル人は牧畜のみを営み，散在して個人生産の牧畜をおこない，その乳や乳製品，肉を飲食し，その皮革をなめして自分たちの需要を充足することに慣れた，習得としたとでもいいましょうか，そのような生活をしていたのです。今でも私たちが身につけた職業はそれなのです。モンゴル人はそれ以外に学問を学ぶといったことはありませんでした。それは封建領主や貴族の子どものあいだにだけあったことでしょう。彼らに限ったことであり，すべてのモンゴルの子どもや人びとを対象とした活動ではありませんでした。そのような状況で私は暮らしていました。そのため，私が幼少のころ何を教わったかといえば，家畜のそばにいて，家畜を放牧し，家畜をどうやって太らせ，どうやって冬の寒さを克服し，どうやって病気から保護するか，といったことだけを教わりました。私たちはこういうことを知っているだけで，それ以外のことは知りません。当時の牧民は，家畜が病気になれば常に野草を採ってきて治してしまっていました。たとえば，疥癬という病気が発生していました。ハンガイ（森林ステップ地帯）では様々な興味深い植物がたくさん自生しています。その植物を採ってきて，それを水で煎じて塩やソーダを入れ，それを疥癬のある，皮膚病のある家畜に塗布して洗い流せば治ってしまうのです。たいてい，そうしていました。

人間は，チベット医学を修めた医者たちから薬をもらって飲みます。彼らの与えた薬を飲んで病気を治します。重病にかかった人は薬を飲んでも治ることはありません。その時は厄払いをしてもらいます。読経してもらいます。

読経してもらうということは，何頭かの家畜や財産でお布施をするということです。病気にかかった人は貧しくなります。読経をしてもらい，お布施をし続けて貧しくなってしまいます。そのような生活の中で私は幼少の時を過ごしました。

L：あなたは裕福な家庭の家畜を放牧していたそうですが，あなたに群れを分け与えて放牧させるのですか？

M：いいえ，そういうことはありません。給料というものはありませんでした。当時の裕福な家庭は平均で300～400頭のヒツジやヤギを有し，20～30頭のウマ，そして土地によっては，たとえばゴビ（砂漠ステップ地帯）であれば多くのラクダ，ハンガイでは多くのウシを所有していました。40～50頭ぐらいのウシがいたと思います。そのような数の家畜を所有する家庭が裕福な家庭とみなされていました。このような家庭に私たちは仕えていました。家庭に仕えるというのは私たちがその家庭のヒツジを，ウシを放牧する，女性であればその乳を搾る，乳製品を作るということなのです。その家庭のすべての仕事をするということなのです。その際，給料はありません。食事や飲み物は彼らのところで無料で食べられます。そして彼らから冬季に1～2頭のヒツジを労賃としてもらいました。貧しい人にも家はあります。そこで昼食，お茶をとります。大型家畜，ウシなどはもらえません。それから古く傷んだデール（民族衣装）を着させてくれます。もっぱら傷んだデールを着させてくれます。夏には雨の中で着るものはほとんどありません。召使いはヒツジの毛皮のデール1着しか持っていません。いつもヒツジの毛皮のデールを着ているのです。それを雨の時にもまとい，冷たい嵐が吹き荒れたときにもそれをまといます。岩の隙間でそのヒツジの毛皮のデールをまとってやり過ごします。そのようなとてもひどい生活をしていました。

K：当時は牧草や穀物の収穫をしていましたか？

M：していません。今考えると変ですよね。当時，モンゴルの気候はとてもよかったのです。現在のように干害が多発したり，寒害が多発したりするようなことは記憶にありません。多量の雨が豊かに降り，土地の植物はよく生育していました。そして，家畜を飼料で飼養して春を迎えさせる必要はありませんでした。冬はオトル（よい牧草地を求める短距離の移動）をおこない，状態のよい土地に行くものでした。当時は人が少なく，家庭も少なく，土地は豊かで家畜は多くはありませんでした。こんなに広大な素晴らしい土地の上で数少ない私有財産を有する者たちが召使いを使って生活していたのです。彼らは僧侶や俗人の封建領主たちに納めるものを納めて，上からは彼らの庇護により，下からは貧者たちを使って生活していたのです。私がさっき言ったような中規模の富者たちはアルヒ（蒸留酒）を飲み，アイラグ（馬乳酒）を飲み，家畜を食べて暮らしていたのです。そのような時代です。

L：あなたは先ほどのお話の中でオトルをしていたとおっしゃいました。これは家畜を太らせるために牧民がおこなっていた方法ですか？

M：当時はとても広い素晴らしい土地で，少ない人，少ない家畜，少ない家庭がゆったりと暮らしていたと先ほど私は言いました。そのため，人も家畜もとても自由でした。相互にとても近い範囲に，冬営地，春営地，夏営地，秋営地がありました。ハンガイで，ですよ。秋営地というのは家畜を太らせる場所です。また快適な場所で夏を過ごします。そして冬には冬営地に宿営します。少し雪が降り，天候が厳しくなって

くると冬営地から家畜を追って近場に，現在のように遠くへ行くことはなく，その周辺の土地の中で，谷間の中で，何頭かの家畜とともに距離をおいて宿営し，オトルをして家畜に春を迎えさせます。そんなにたいへんなことをしていたわけではありません。当時，牧草を刈ったり，毛を刈ったりはしていませんでした。

1.2 中国商人

私の故郷に何人かの中国人商人がいました。商店，消費者組合といったものはまったくありませんでした。そして，中国人商人はタルバガ，リス，キツネ，オオカミ，キノコといったようなものをモンゴル人から買っていました。牧民たちからカシミア毛や羊毛を買うことはありませんでした。ですから，ヒツジの毛を刈ったり，ヤギのカシミアをくしけずり取ったりすることを私たちはまったく知らず，ヤクの柔毛や剛毛を取ることも知りませんでした。家畜は柔毛，剛毛，毛を引きずって歩き，それは草原に自然に落ちます。若干まとまったものを取って自分たちでフェルトを作っていました。牧民はフェルトでゲル（モンゴルの天幕）を覆います。フェルトはいつも作るわけではありません。今年フェルトをかなり作ってゲルを覆ってしまえば，数年間はフェルトを作る必要はなくなります。そしてまた，縄をなうのです。縄からゲル用の縄や身の回り品を作ります。また，ウシの皮をなめします。なめして現在の覆い布，絨毯，テーブルクロスの代わりに敷きます。ウシの皮を細く切って革紐，縄を作ります。それでさらに馬勒，端綱，留め具，荷留め用の縄などを作ります。当時はいつも荷物を家畜の背に積んだり，荷車に積んだりしており，荷物をウシの皮で作った革紐で束ね，結わえていました。そのような，いくつかのものを作っていました。皮革からは革紐，縄，敷物を作ります。また，ものを包むフーム（風呂敷様のもの）と呼ばれるものもありました。毛や羊毛でフェルトを作ります。そして残ったものを自然に捧げるのです。

ですから，家畜の毛を定期的に刈り取ることはありませんでした。ヤギの毛をくしけずり取ることもありませんでした。カシミア毛は自然にそうこうしているうちになくなっていたのでしょう。ウシの柔毛，剛毛を取ることもありませんでした。ウマのたてがみもまた切りませんでした。まったくこれを切らなかったのです。ウマのたてがみは際限なく長くのびます。毛に手を加えないので家畜が肥えるのにも都合がよかったようです。家畜はほぼ野生の気性の荒いままです。そんなに調教したり，乗ったりして利用することはありません。引っ越しや移動には，ヤクやウシの背中に積んで利用します。また車を引かせます。日常に使うウマだけを調教して乗ります。

ハンガイはかなり山がちなため，ウマにあまり乗らないのです。もっぱら徒歩で移動します。私たちのハンガイでは徒歩で移動していました。山でウマに乗ってヒツジを放牧することはありません。私たちは徒歩で移動しました。私は21歳で軍に行く際，

ウマに乗ることができませんでした。軍に入って初めてウマに乗ることを学んだ人間なのです。当時兵役では乗馬の訓練をしっかり実施していました。21歳で軍に入り乗馬を学びました。21歳で軍に入って文字を教わり，読み書きを学びました。当時，モンゴル国民は非常におおらかで，おとなしく，忍耐力がありました。お酒を飲み，宴会やお祭りをするということはありませんでした。ダンシグ・ナーダム（活仏の長寿を願う祭典）をしていた，と今は言われています。でも，私たちのように遠くハンガイの地にいる人びとは，ダンシグ・ナーダムをしたり，ウマの調教やお祭りをしたりして楽しむということを知りませんでした。ただ弥勒仏詣の時期には大きな寺院で法会などがおこなわれていました。それには，徒歩の人びとは徒歩ででも熱心に詣でていました。弥勒仏にお参りし，祝福を受けていました。とても盛大で多くの人が集まりました。家で法会をしてもらったり，読経してもらったりすることもありました。

L：子どもや大人が食べる食べ物や飲み物についてお聞かせください。

M：子どもたちはヨーグルト，ツァガー（酸乳）を食べ，飲みます。蒸留してアルヒを作ることはすでにおこなわれていました。少なくとも，私が生まれ育ったときにはありました。私は80年間ぐらいのことは知っています。87年前にあったかどうかはわかりません。蒸留した後「ツァガー」という，時には「アールツ」（ツァガーを濾したもの）と呼ばれるものができます。そのツァガーを飲んでいました。それを濾してアーロール（酸凝固チーズ）を作ります。またエーズギー（加熱凝固チーズ）という食べ物を作ります。エーズギーというのは家畜の乳を沸騰させて作ります。乳製品を外部に販売するための市場はありません。作って自分たちで食べるだけです。これとは別に肉を煮て食べます。小麦粉や米はほとんどありません。私が幼かったころ，ものを売買する市場がありませんでした。自分たちの需要の分だけ食べて飲んでいました。中国人商人はそのような乳製品を買わないのです。

K：中国人商人は毎日来ましたか？

M：中国人商人は寺院の近くに少数が住んでいました。モンゴルには700ほどの寺院がありました。谷間ごとに寺院があったのではないでしょうか。わがムルンには２つの寺院がありました。バヤンジャルガラン寺院，ダシラン廟という２つの寺院でした。ムルンのたった２つの谷間にですよ。その近くに１人の中国人商人がいました。彼のことをチョローン商人とモンゴル語で呼んでいました。チョローン商人のところに，私のレンチンおじさんがキツネやオオカミやタルバガの毛皮，その他の獣の皮を持ち込みます。チョローン商人からは若干の白米や小麦粉をもらっていました。彼は庫倫（ウランバートルの旧称）からか，どこからかわかりませんが，商品を5〜10頭の牛車で運んでくるのです。いろいろなところに立ち寄りながらやってきたのでしょう。どこに立ち寄っていたのかはわかりません。１軒の家庭で当時最高で10斤の小麦粉を買います。裕福な家庭で，１年分で，ですよ。そしてその他の家庭は１斤，２斤という感

じでほんの少量買います。私たち貧者は中国人商人から小麦粉や米を買うことはありません。貧しい家庭の子どもたちは，小麦粉や米をまったく食べたことがありませんでした。ないのです。弥勒仏詣や裕福な家庭が読経をしてもらうときには小麦粉を使った料理を作ります。その時に少しだけ手のひらに載せて，分けてもらいました。とてもおいしく感じたものでした。お偉方や僧侶たちはお椀で食べていたようです。それから乳製品や肉を食べます。ハイルマグ（クリームチーズに小麦粉を溶かして作る料理）などは貧者や召使いたちは食べません。もっぱら酒を蒸留したあとに残るツァガーを飲みます。当時「ツァガーを飲む」と表現していました。これは召使いとして暮らすことを意味します。酒を蒸留した後に残るツァガーは貧者しか飲みません。口にする食事からそのように名付けたのです。蒸留後に残るツァガーはとても酸味が強い食べ物です。それには少しのシャル・スー（乳しょう）が混ざっています。それを飲むときには少量の沸騰させた乳を入れて混ぜて飲みます。「ツァガーチン（ツァガーを飲む人）」というのはそのようなものを食べて生活する人を指す言葉です。飲食物はそのような程度でした。

貧しい子どもたちはヒツジを放牧する際にキノコをたくさん採りました。私の故郷にはキノコがたくさん生えます。そのキノコを採って小さく刻み，ひもに通して数珠のようにして乾燥させます。当時は羊毛を紡いでひもを作っていました。我が国の当時の女性たちは縫い糸を家畜から作っていました。現在のような糸はありません。そのためヒツジ，ラクダの毛から縫い糸を作っていました。ウシの腱というものがあります。ウシを食べる際，腱をすべて取ります。その腱からひもを作って靴，毛皮のデールを縫います。ウシの腱でひもを自分たちで作って，自分たちでヒツジの毛皮をなめしてデールを作るのです。デールを腱で縫います。ですから，ひもを自分たちで作り，ヒツジの毛皮を自分たちでなめし，ウシの皮革も自分たちでなめします。このようにすべてのものを自分たちで作って，自分たちの衣服としていました。

私たちはヒツジの毛皮のズボンをはき，ヒツジの毛皮のデールを着ていました。富者たちは布や絹のデールを着ていました。僧侶たちは黄色や赤の絹のデールを着ていました。貧しい子どもたちは毛をとっただけのヒツジ皮でデールを作って着ていました。それを「サルマイ（なめしていない皮）・デール」と呼んでいました。常にそのようサルマイのデールを着て，サルマイのズボンをはいていました。ウシの皮をなめして「フム（大型家畜のなめし革）」と呼ばれるものを作っていました。そのフムで靴を作って履きました。フムで作った靴の底はフェルトで作ります。私たちには布や絹は存在しないものでした。私たちはそのような素材で作った服を着ませんでした。私は21歳までそのようなものを着たことがありませんでした。暖かい時期には靴を履かずにほとんど裸足で歩きます。冬季はそのフムの靴，ヒツジ皮のデールを着ます。そのように暮らしていました。

K：チョローン商人はモンゴル語を話せましたか？
M：その中国人は言葉を知っていました。モンゴル語を話しました。今考えると内モンゴル人だったのかもしれません。モンゴル語で話し，商売をしました。今思うと彼にはまた2〜3人の召使いがいたように思います。そのチョローンのそばに2〜3人の若い中国人がいました。彼らのことを「ショシマイ（中国語のShuo shenme何と言った？の表現から)」と言います。そのショシマイたちは各戸をまわって獣毛やその他のものを買います。私たちはキノコを採って，キノコをチョローン商人のところに持っていきました。チョローン商人は私たちに「タンゾール（小麦粉を揚げて砂糖をまぶした菓子)」という小麦粉で作ったお菓子をくれます。それから，ナツメ，プルーン，黒砂糖をくれます。角砂糖もくれます。中国の角砂糖は小さくて四角い箱に入っていました。そのようなものをくれていました。また中国茶，中国の葉煙草をくれます。この2つは中国から輸入してきたものでしょう。また「ジョーシャー・オタス」というひもを持ってきます。すこし円筒がかった芯に色が付いている絹のようなひもだったと記憶しています。ほんの少ししかありません。キノコを渡すとそのひもをくれました。私たちのキノコを受け取って，手のひらにそのようなものを載せてくれるのでした。いくつかのお菓子は両手にいっぱいになります。たくさんのキノコが採れると服の裾でくるんで持っていきます。懐に入れて持っていきます。私たちはいつも革紐のベルトをしていました。帯を作る布は貴重だったため，いつも革紐のベルトを巻いていました。

1.3 放牧の方法

家畜に関する知識がどうして私たちの頭に刻み込まれているかというと，飲み食いするものをそれから取り，身につけるものをそれから取っていたので，そのように強固に刻み込まれたのだと思います。今風にいえば私はこの方面の専門家なのですよ。どうやってウシの皮をなめすか，革紐，縄をどうやってなめすか，乳製品，ツァガーをどうやって作るか，家畜をどうやって放牧するかということしか知りません。当時，家畜を放牧するということはとても複雑でした。私はウシを追っていきます。そしてウシを牧草地に連れて行っていつ牧草地から連れ帰るかといったことについて細かな指示を受けて放牧していました。暗くなっても空に100個の星が出ないうちは家の方に家畜を追ってはなりませんでした。私たちはウシを放して仰向けに寝転がります。星が出てくると1つ，2つ，3つと数えます。ちょうど100の星を数え終わったら起きあがってウシを追って帰っていました。100個星が出る前にウシを追って帰ると叱られます。これは冬のことですよ。当時は時計というものはありませんでした。朝は早く家を出ます。そして必ず日が差してから家畜を牧草地に出します。ゲルに日が差してくるとすぐに家畜を出します。100の星が出てから追って帰ります。ヒツジはもう少

し早く戻します。暗くならないうちに戻ります。ウシ，ウマはかなり遅い時間に戻すものでした。

そのころ井戸はまったくありませんでした。ハンガイではすべての谷間に水場がありました。現在では私が幼少のころに家畜に水をやっていた，私の宿営していた場所では，水場はまったくなくなってしまいました。どこに消えたのかわかりません。冬，夏に関係なく宿営できる水場がありました。今はなくなってしまいました。今は自然まで変わってしまいました。私たちが幼少のころと比べて変わってしまいました。この80年間にあらゆるものが変わりました。自然の有り様も大きく変わり，冬，夏になる時期も変わり，雨の降る，降らないも変わり，食べたり飲んだり，身につけたりするものも大きく変化してきました。私の幼少のころはこのようなものでした。

L：裕福な家庭はヒツジの搾乳をよくおこなっていましたか？

M：ヒツジはよく搾乳していました。当時，家畜の搾乳には熱心でした。母ウシを朝晩二回，ヒツジは時には三回搾乳します。朝放牧に出る前に1度搾乳し，昼ごろ1度搾乳します。夕方搾乳してから子ヒツジを合流させます。子ヒツジと親ヒツジは別々に放牧するのです。夏のあいだだけですが。夕方搾乳したあとにだけ，子ヒツジを合流させて乳を与えさせてから再び子ヒツジを区別して柵に入れてしまいます。子ヒツジをうまく放牧する方法があります。サーハルト（放牧のパートナー）同士で宿営し，サーハルトの家庭のヒツジ群に自分たちの子ヒツジを合流させます。彼らの子ヒツジを自分たちのヒツジ群に合流させます。このように放牧するのです。このようにサーハルト同士でよく宿営します。ヒツジは短期間しか搾乳しません。夏の3ヶ月だけ搾乳します。それ以上搾乳しません。

L：ヒツジは毎日遠くまで放牧しますか？

M：そんなでもありません。それほど遠くありません。半径でいうといずれの方向へも7〜8キロメートル以内で放牧していました。半径10キロメートル内に1軒の富者の家があるのです。冬営地，春営地，夏営地，秋営地それぞれの距離はそれほど遠くありません。牛車に荷物を載せて，その日の内に冬営地に宿営できていました。冬営地から春営地へもその日のうちに到着します。およそ7，8，9，10〜20キロメートル内で回っていたのです。

L：冬営地は頻繁に変更しますか？今年はこの冬営地，来年はあの冬営地という風に頻繁に変更しますか？

M：当時は，国が配分した冬営地，春営地というものはありませんでした。伝統的には家庭ごとに春営地を持っていました。家庭ごとに冬を過ごす場所があります。私たちの家は私の知っているトーロイトの冬営地に宿営していました。それを国があなたの家のものだとか，違うとかいうことはありません。その土地の家庭同士で互いに調整します。トーロイトの冬営地，アルツァトの冬営地，ドンド・ダワーの冬営地とい

うように冬営地がありました。近くにはこのような3つの冬営地がありました。その3つの場所に宿営する家庭は，互いの冬営地の草を家畜に食べさせないという決まりがありました。その3つの冬営地の中でサーハルトを作り，兄弟のような関係でした。

当時は素晴らしいことが1つありました。様々な喧嘩や中傷，うわさ話などがなかったことです。年配の人びとを，若者や子どもたちは尊敬します。彼らの姿をまともにみることができません。そのような偉い人が来たとき，私たちはゲルに入りません。外で家畜のそば，家畜囲いの辺りにいます。その人が帰ったあとでゲルに入ります。その人に群がって中に入ることはありません。それから，他人の家に入ったとき上座に行きません。炉よりも下座に座ります。座るときにもまた決まりがあります。現在はベッドや敷物，何の上にでも座ります。私たちはいつも正座して座っていました。日本でも正座しますね。私たちはそのような感じで座っていました。

当時，子どもたちに大人がよくものをくれました。当時は陶器のお椀はありませんでした。私たちは中国製の木椀を使っていました。中国の小さな木椀は商人が売りにきていました。スプーンやフォークはありません。それを木で作ります。柳で木のスプーンを作ります。私たちにはお椀いっぱいに入れてくれることはありません。手のひらに少し載せてくれます。よその家で鍋についたホサム（乳を煮てできるお焦げ）をこそいで，「さぁ，手を出して」と言います。そして手のひらの上に載せてくれます。それを口に含みます。このような生活をしていました。お椀に入れてたくさんくれるということはありません。

アルヒ，アイラグを子どもは味見すらしてはなりません。それはとても貴重な食べ物なのです。それは子どもが食べるものではありません。肉を煮て食べるとき，子どもに対しては頭，脛，臓物，頸骨の骨髄，首などの部分だけが割り当てられます。肩胛骨，腿，大腿骨の骨髄，大きな関節などの部分がありますよね，子どもたちは食べません，与えません。それを食べると運気を落とすとか，しつけの悪い人間と見なされます。夏は肉をほとんど食べません。富者も夏に家畜を屠殺して食べることはありません。主に乳製品を食べます。

K：タルバガの肉は食べていましたか？

M：タルバガの肉を食べていました。貧しい人びとはタルバガの肉をよく食べていました。タルバガ，リス，鹿を食べます。リスがとてもたくさんいました。リスをよく狩りました。中国人商人がリスの毛皮を非常によい値で買ってくれました。リスの肉は子どもたちが食べます。樹液の味が染みついた肉です。現在は食べるのは難しいでしょう。どうやって食べていたか思い出せません。タルバガの肉は当時からよく食べました。子どもたちは頭ぐらいしかもらえません。大きな脂身の付いた肉はもらえません。内臓から「ヤルビグ」（腸に脂身や野菜を詰めて作る料理）と呼ばれる料理を作って食べます。私たちの手のひらに載せてくれます。あまり食べていなかった気がし

ますが，子どもたちがおなかの病気にならないのでとてもよかったのだと思います。

子どもたちにはお茶を飲ませず，ヒャラムを飲ませます。沸騰したお湯に少し牛乳を入れ，たくさんは入れません，「ツェヘル・ヒャラム」にして飲ませます。牛乳が少ないヒャラムは「ツェヘル」と呼ばれます。お茶は，男性は結婚して嫁をもらってから，女性は嫁入りしてから，初めて飲みます。嫁入りしていない女性，嫁をもらっていない男性はお茶を飲むことはありませんでした。とりわけ貧しい子どもたちはまったく飲みません。富者たちは違うでしょうけれども。とても裕福な家の子どもたちについての映画が上映されています。中国の王侯貴族の子どもたちに関する映画が先ごろ上映されました。好き勝手にふるまえる子どもたちだったのでしょう。教養がなく，学校もなく，無知で粗野だったのです。

私の幼少のころ，干害や寒害は記憶に残るようなものはなかったように思います。干害，寒害が起こらなかったのでしょうか。いつも十分な雨が降る夏でした。冬になると雪が降ります。最近では時々大雪が降るようになりました。しかし，当時はそのようなことはなかったと思います。ただし，時々たいへんな洪水になっていたことを記憶しています。1軒の家庭がそのまま洪水にすべてを流されてしまったことを覚えています。また「神鳴り」が家畜や食物に危険をもたらしたこともあります。そのようないくつかの災害が起こっていました。また「龍が降る」といわれるものがありました。大きな雷鳴を伴う豪雨のことを「龍が降る」と言いました。龍が降るという伝承からです。当時は，またよく竜巻が起こりました。

昔からの伝統的な習慣としては「オボー（地神を祀る石積み）の祭祀」があります。土地ごとに祀るオボーがありました。現在ではすべての丘の上に石を積んで祀っていますね。私の故郷には「ジンスト・オボー」というオボーが1つだけありました。たくさんのオボーはありません。そのオボーを年に1度祀ります。多くの僧侶が参加し，祀ります。そのオボーの祭祀には私たちの世代の子どもは徒競走したり，相撲を取ったりしました。それに優勝した子どもにはとても大きなチーズやウルム（乳脂肪分）を与えていました。そのような賞品をもらいました。オボーは秋に祀りました。昔からこのようなオボーの祭祀がありました。

山河をとても敬います。泉の水をとても敬います。そこにバケツを持っていって水をくみます。水をくむとき，水場から遠く離れたところでバケツを洗います。龍神や地神の怒りをかうと考えていたため，水の中で手や足，容器やその他のものを洗うことは禁じられていました。そのようなことは決してしません。ものを洗う場合は他の容器に水を入れて運んで，遠く離れたところへ持っていって洗います。水場のそばで洗ったり，水の中にものを入れたりしません。水の中に乳を流しません。仏教を信ずると同時に自然を信仰し，保護していました。自然によく祈りを捧げます。昔から，「国の御旗よ，お許しを！豊かなハンガイよ，お許しを！国よ，世界よ，我を助けお

許しを！」と言って乳やお茶を捧げたものでした。
L：年輩の人びとは，子どもや若者であったあなたがたに，家畜が好んで食す植物や，それがいつ，どこで生えるか，どんな家畜が好んで食すかなど教えてくれましたか？
M：よく教えてくれましたよ。家畜の放牧の際にはヒツジをどこで放牧させるか，ウシ，ウマをどこに連れて行くかというように牧草地をよく教えてくれました。本当に小型家畜を太らせることのできる牧草地の植物，花，葉には，ヨモギ（*Artemisia frigida*），ニラ（*Allium polyrrhizum*），ハギ（*Thermopsis*）などといった香草があります。ヒツジを太らせる草はヨモギ，ニラ，モンゴル・ニラ（*Allium mongolicum*）です。ヒツジをそのような植物がたくさん生えているところで放牧します。ウシやウマを放牧する場所ではヒツジは放牧しません。ヒツジは川辺で長い時間寝そべるのを好みません。ウシやウマは遠くの山の，太い古い草がある場所で放牧します。また，ヒツジの牧草地を保護するためにヒツジを放牧する場所ではウシやウマを放牧させません。
「おい，行って来なさい。ウシがヒツジの牧草地へ入りますよ」と言って，子どもや若者たちに命じて行かせます。

家畜を放牧している人にはのんびりと座っている時間はありません。そしてこのような仕事がありました。搾乳の時間にはウシの群れと子ウシを一緒にするために子ウシの方へいったん行き，ウシの群の方へまた行きます。子ヒツジの方へいったん行きます。そしてヒツジの群をつれてきます。ヒツジの搾乳が終わるとヒツジを連れて行きます。立ったままで，あるいは座ってツァガーを飲み，家畜の方へ行きます。椅子はありません。幼少のころは疲れを知りません。夜だけ休み，寝ます。寝るときには子ウシの革を敷いて寝ます。子ウシの革はすべてなめしてあります。ヒツジの毛皮，ヤギの毛皮は柔らかくしてあります。それを昼間は地面に敷き，地面の上に座ります。夜は裏返して毛を上にして敷いてその上にデールを被って丸まって寝ころびます。足を伸ばして寝ころぶ余地はありません。丸まって寝ます。敷いている革，被っているデールの形に沿うように丸まります。他に掛けるものはなく，足が出てしまうと凍えるため，いつも丸まって眠ります。丸まって座ることもします。これもまた足を痛めないためによい面があったのかもしれません。

現在は，いつも柔らかいものの上に座っているのに「足が痛くて」などというのです。どうしてそんなに簡単に足が痛くなるのかわかりません。思うに柔らかい椅子，ソファーといったよいものに座り，外でも柔らかな車のシートに座る。このために足がすぐに痛くなるのでしょうか。私たちは丸まって座り，丸まって寝ていました。そのようでありました。掛け布団，敷き布団に合わせていたのです。
L：当時，家畜の出産期をどうやって調整していましたか？
M：牧民自身が調整するのです。我が国はゴビ，ハンガイ，ステップ（草原地帯）の3つの地帯に分類され，それに適った，土地土地に適した牧草地に分かれています。そ

して日の出から日の入りまでのあいだに，すべての生活がおこなわれていました。太陽が昇ると家畜を牧草地に向かわせ，乳製品を作り，搾乳し，革をなめし，すべてのことをおこないます。太陽が沈むとすべてをやめて家畜を囲いに入れて寝てしまうものでした。当時は貧しい人びとには自分の家畜がいませんでした。母と私は自分たちのものといえる家畜を持たずに21歳まで過ごしました。今も家畜はいません。家畜を放牧する方法を知っているだけです。他人の家畜を放牧し続けてこのようになってしまいました。自分の家畜を放牧することで学んだわけではありません。家畜をもっていない人でも，家畜のそばにいて初めて空腹を満たすことができます。他に空腹を満たす方法はありません。他の収入はありません。

K：他人の家畜を放牧する際，家畜の種類によって割り当てが決まっていたのですか？どうやって配分していたのですか？

M：私たちのような子どもには主にヒツジが割り当てられます。ウシやウマは裕福な人たち自らが放牧します。またウマに乗ることができる人にやらせます。私たちのような弱い者にはもっぱらヒツジが割り当てられます。そのほか，身近なすべての仕事に参加します。

K：家畜を所有している家庭と一緒に移動するのですよね？

M：そうです。移動の際は召使いもともに移動させます。一緒に連れて行きます。その家庭の家族の人数によって１つのホト・アイル（宿営地集団）に含まれる家庭の数は異なります。婿が多ければ１つのホト・アイルが10軒ぐらいの家庭から構成されることもあります。子どもが少なければ4〜5軒くらいの家庭が１つのホト・アイルになります。かつてソーリ（ネグデルを構成する最小単位）はありませんでした。ホト・アイルしかありませんでした。夏の盛りにはホト・アイルはサーハルト同士だけで宿営します。冬は多くの家庭が一緒になり，冬営地に宿営します。冬営地にはたくさんの家庭が宿営するのです。食事を作ってしまってから，冬はよく遊びます。昔の人びとはよく遊んでいました。夜になると遊びました。年輩者のいる家庭とか，気だてのいい人の家庭に集まって遊ぶのです。私たち子どもは好奇心で鼎の脚の部分の辺りに座ります。１つには大人たちがシャガイ（ヒツジのくるぶしの骨）を握ってよく遊びます。２つには子どもたちが（シャガイで）ウマを競走させて遊びます。

また，物語を聞きます。昔の１つの興味深いことは，物語をよく聞いていたことです。語り部は選ばれた人です。語り部を各家庭が交代で招待し，物語をしてもらい，家に泊まってもらいます。物語をし，遊び，昔語りをし，とても長居します。夜はバターを割っておおきな固まりを丸ごと食べます。昔は，子どもたちは人にものをよくねだりました。他人の家で食事をします。自宅でもご飯を食べています。夜，他人の家に行ってその家のご飯を食べます。それぞれの家庭でほとんど同じような食事を作ります。肉しか食べないのです。刻む必要のあるような食事は作りません。ヒャラム

ツァグ（家畜の胃に血を入れて凍らせた保存食）を中の血と一緒に混ぜて少し刻んで調理した食事をします。他人の家で食事をして，また次の家で食事をします。私は幼少のころそのような生活をして暮らしてきました。当時は学問を学びませんでした。

K：春の家畜の出産について少しお話しいただけますか？

M：家畜はおもに春に出産させます。土地の状態に大きく関係します。出産期間は公的に決められているわけではありません。自分たちで決めます。一部の家庭では若干遅く出産させます。一部はとても早い。それでもすべて春に出産させます。出産の時期は春の少し遅めで，暖かくなってから出産させます。ハンガイでは各家庭に家畜囲いがありました。ひさしのある家畜囲いでした。「冬営地のひさし付きの家畜囲い」と呼んでいました。家庭ごとにそのようなものを持っていました。各家庭では互いの家畜を一緒にして囲いに入れることはまったくしませんでした。私有財産だからです。家庭ごとに自分の家畜囲いに自分たちの家畜を入れておきます。朝になるとそのままそれぞれの方向に家畜を追っていきます。家畜の少ない者たちは，家畜をまとめて当番を決め，今日は彼らの番，明日は彼らの番といって放牧し，2日おき，3日おきに1軒の家庭が担当するというような感じでした。夜はそれぞれの家畜囲いに自分のヒツジを入れて眠るのです。当時のよいことは泥棒がいないことでした。私の故郷にはまったく，いませんでした。いないのです。自分たちのヒツジが1頭，別の家庭のヒツジの群に迷い込んでしまうと，とても大々的に噂が広まります。

「うちのヒツジが1頭いなくなってしまいました！」と言って噂を広めます。

「行方を知りませんか？」と聞いて回ります。

「おお，うちの家畜囲いに茶色のはげたヒツジが来ています。それじゃないですか！」と互いに話し合います。ある家庭のヒツジ群に紛れ込んだ別の家庭のヒツジを無断で食べてしまうことなど，まったくありませんでした。別の家の家畜が一緒に紛れ込んできたならば，それについての噂も広めるのです。

「うちのウシの群の中に1頭の黒い子ウシが紛れ込んでいます！」と人びとに伝えます。

「子ウシがいなくなった人はいませんか？」と言って回ります。泥棒がおらず，他人の家畜をもらってしまおうという考えはまったくありません。これに関しては公正で正直で素晴らしかったです。

L：家畜が出産する時期を春の遅い時期に合わせていたなら，子家畜の死亡は少なかったのではないですか？

M：子家畜も死んでいたと思います。子ヒツジの毛皮を内側に張ったデールをよく作って着ていました。子家畜が死ぬとその毛皮を使ってデールを作り着ていたはずです。当時，今のようにどれくらいの家畜が死んだか，どれくらいの子家畜が育ったかといった統計を作る機関はありませんでした。それを知ろうとする人もいませんでした。

母家畜が死んだとしても数えない。とてもたくさんの子家畜が死んだとか，育ったとか，数を話すこともまったくありません。みな一緒に，家庭ごとに谷間の窪地にいたのです。そのような数は時には数えていたかもしれません。現在，この国の文書館を人びとが探して，何年の段階では何頭の家畜がいたのです，と話しています。特に国による粛清の名誉回復をおこなう際に，国立文書館を調べて何頭の家畜がいたかを確定しているようです。1937〜38年ころ，たくさんの人が無実の罪により死刑となりました。当時の文書を見て何頭の家畜がいたかを確定しているのです。するとそのように家畜の統計を調べる場所があったようですね。私が幼少のころに家畜の頭数を数えていたのか，私は知りません。

1.4 家畜の売買

L：牧民同士で家畜を売買することはよくありましたか？

M：牧民はしばしば家畜を売買していました。家畜と家畜を交換します。また当時のお金で商売をします。家畜はとても安かったです。ヒツジは平均で7ヤンチャーン（貨幣単位）だったと思います。ウシや大型家畜はおよそ20ヤンチャーンほどだったと思います。お金がとても安かったです。かつて裕福な人びとは側対歩と側対速歩の2種類のウマを売買したものでした。富者の子どもたちは側対歩のウマに乗っておしゃれをしました。競走馬はずいぶん最近になって発展したのです。当時，私たちのハンガイは競馬をしてナーダムをするということはありませんでした。それはかなり後になって出てきたものです。私の故郷は遠隔の，庫倫から遠く離れ，中央から遠いのでツァータン（モンゴル北部に住むトナカイ遊牧民）たちと同じようなものでした。そのような凍土の上で競馬をおこなうといったひどいことはありませんでした。競走馬を互いに売買することもありませんでした。しかし，側対歩のウマは売買されました。ヒツジの売買，ウシやウマの売買をおこないます。すこしだけします。

「さぁ，私はお宅から1頭だけ雄ヒツジを買いましょう」というような感じです。6〜7ヤンチャーンで買います。現在のように100頭単位で商売することはまったくありません。食料を蓄える時期に，

「2〜3頭のヒツジを買って食べます」というように話します。町や寺院へ家畜の商売をするといって家畜を追って行くようなことはありませんでした。トーバル（食肉工場などに家畜を追う移動）はかなり後に生まれたものなのです。

K：チョローン商人は家畜を買い付けていましたか？

M：チョローン商人は家畜を買いませんでした。でも自分で食べる食料としては買っていたかもしれません。

K：モンゴル人は冬に食べる乳製品を搾乳期に作りおきしますよね。あなたの故郷では通常1軒の家庭がたくさんの乳製品を用意していましたか？

M：かなりたくさん作っておきます。たくさん食べていました。小麦粉や米がなかったので乳製品をたくさん食べていました。ウルム，ズーヒー（サワークリーム）を作る容器も同様にすべて家畜の皮で作ります。バターを入れる入れ物を「ホンギオ」と言います。それは牛皮で作ります。そのようなものにバターを入れます。それは現在でいうところの100リットル，50リットルの金属缶のようなもので，そのようなサイズの容器でした。アーロール，エーズギーなどの乾燥させた乳製品を「トラム」という入れ物に入れます。トラムというのはヒツジ，ヤギの皮をなめして，それで作った袋です。ですから「トラムに入ったエーズギー，アーロール」，「ホンギオに入ったバター」などと言います。

1.5 木工・銀細工職人

ところで昔からモンゴルでは木工と金属細工はかなり盛んでした。それはとても盛んでした。鉄や銀でものを作る金属細工職人はかなりおり，木で箱や入れ物を作る木工職人もかなりたくさんいました。天然の木を利用して様々な木桶をよく作りました。アイラグを入れたり，バターを入れたり，ゲルの中に置く箱や入れ物をその木工職人たちが作ります。彼らはたいてい少し貧しい生活を送っていました。金属細工職人はおもにナイフやはさみ，錠前を作ります。掛け金を作ります。金属細工職人は寺院には住まずに牧民と一緒に移動して暮らします。私のおじレンチンが狩猟で生活していたように，金属細工職人だけをしながら暮らしている人もいました。木工職人で暮らす人もいました。私の故郷には有名な腕のよい木工職人たちがいます。ダライ・チョインホル王旗は腕のよい金属細工職人で有名な地です。鉄をどこから入手していたかは知りません。鉄でナイフ，錠前を作っていました。銀細工職人というのもいました。既婚女性の髪飾りや装飾品などはすべてモンゴルの職人が自分たちで作ります。外国から買うことはありません。銀の一部は外国から入ってきていたかもしれません。現在の1つの郡で考えてみると3〜4人の金属細工職人がいたと思います。金属細工職人の人数はかなり少ないのです。4〜5人の木工職人がいたと思います。それは自分たちの才能，あるいは代々受け継がれてきたものです。

当時，木工職人，金属細工職人を養成する学校はありませんでした。自分の才能で学ぶものなのです。猟師になるにも自分の才能で，生活の必要性から狩猟を学びます。モンゴルの金属細工職人が作った「火打ち石銃」という鉄砲がありました。現在のもののようにそんなに大きな鉄砲はありませんでした。

K：その猟師，木工職人たちの家の生活様式は一般の牧民と異なっていましたか？外見から木工職人，猟師，金属細工職人を区別することはできますか？

M：そのような人びとはその地で名が知れています。腕のよい木工職人，金属細工職人，猟師であれば本当に名が知れています。たとえば，ワンジル金属細工職人，イシ

ダグバ木工職人，アダイ木工職人，彼らを知らない人はいません。彼らは木工をし，また寺院を建てます。寺院の付属の建物を建てます。私の故郷には有名な10人ほどの木工職人がいたと思います。家畜がたくさんいる人はそのようなことはしません。富者に仕えて家畜の放牧をする代わりに木工職人，金属細工職人をして暮らしていたのです。富者たちに作ってあげて労賃として家畜をもらう。富者たちは銀でいろいろなものを作らせ，何らかの状況で家畜が死んでしまった場合にそれを売却して，それで再び家畜を購入することがあります。自分が自分のものを売却する完全な権利を有していたのです。禁止することはまったくありません。何でも売るし，何でも買う，自由でした。商売は禁止されていませんでした。何でも商売してよかったのです。もともと国は未発展で小さなものでしたから利益はあまりなかったことでしょう。たとえばイシダグバさんに，

「木桶を作ってください」と人が訪れて頼みます。

「いいでしょう！私はあなたに2つ木桶を作ってあげましょう。あなたは私に1頭の2歳の子ヒツジをくださいよ」というような感じです。木工職人はすべてのものを手作業で作ります。1つの木桶を作るのにも何日もかかります。山に行って木を切る。その木を乾かし，よく手間をかけて1つの桶を作る。そのようにして1つの桶を作って1頭のヒツジをもらいます。その木工職人はもらったヒツジを屠殺して，それを食べて暮らします。自身には私有財産としての家畜はいないのです。いくつかの職業の違いが生まれていました。大半は召使いとして暮らしていました。少数の一部の人びとは自分の才能により狩猟し，木工職人，金属細工職人をして暮らしていました。そして僧侶となって一部の人は暮らしていました。僧侶たちは寄生虫のような生活をしていました。僧侶たちには家畜を放牧して生活することはできません。彼らは寺院で座って読経や瞑想をし，暇がありません。彼らにものを持っていってあげて，彼らはそのもらったもので生活をしていました。今の僧侶たちは袋を1つ身につけていますよね。それはあることを物語っているのです。

K：あなたは21歳になるまでこのムルン郡に住んでいたのですか？

M：そうです。そのような生活をしている人には遠くに行こうなどということは思いもつきません。タリアト寺院，ザヤ活仏，シレート活仏というのがあるのだそうだ，というふうに物語のように噂を聞いていました。聞いていただけでそこに行こうとか，その人に会おうといったような考えは私たちには浮かびもしませんでした。それらがどこにあるのかまったく知りませんでした。

1.6 著作紹介

L：21歳になって，あなたの生活はどのように変わったのですか？

M：ええ，こうして人間としての道を歩み始めます。私が書いた1冊の本があります。

この本を1983年に執筆しました。自伝を書きました。『人生の経緯より』と題しました。私の親戚の１人に少しものが書ける人がいました。その人と共著で書きました。人は前言といいながら本にたくさんのことを書くものです。私は少しだけ書きました。その代わりにたくさんの見出しを付けました。たくさんの図表を入れました。

L：その本の目次を少し読み上げます。

・心の銘
・人生のスタート
・羊毛の準備
・家庭を持つ
・剣ヶ峰
・あげようといえば１つだけ
・党のスローガン，私たちの目標
・手綱を向けた先
・大地がくれた恩恵
・大地の恵みを天に捧げる
・群れの先頭馬ボル・ハルザン（茶色の禿）
・子どもの運命は母に

M：これは私の人生について書いた見出しです。

私は1935年に21歳で兵役に行きました。兵役をとても興味深い場所で務めました。ドルノド県で務めました。チョイバルサン市に近いバヤントゥメンの第５師団というのがありました。これはモンゴルの国土を日本軍や中国軍の侵略から守るために設立された大きな軍事施設です。このバヤントゥメンそのものが軍の部隊でした。そこで兵役を務め３年間滞在しました。私が幼少のころ，６歳の時に背負い籠の上に立って，「お母さん，ここよりも向こうにも地面はあるの？」と母に聞くと，母は，「もちろんありますよ。向こうにも広大な土地がありますよ！」と答えてくれたものでした。

本当にうまく説明してくれたことを私は覚えています。当時はトーロイトの冬営地という，その谷間から先に行ってみる，そのような考えは思いもよらず，その必要性もありませんでした。徒歩で移動するだけで，交通手段もなく，モンゴル国というのは不思議な国だったのです。新聞では最近，私のことをいろいろと書いています。この新聞に書いてあることを読むと，お書きになることの役に立つかもしれません。「黄金のソヨンボを受け取ると借金の帳簿が作られる」という見出しの記事が掲載されました。これはアバルゼドとナムジグと私の３人についての記事です。３人とも農牧業部門の労働英雄です。私たち３人が英雄の称号を受ける時，受けたあとに起こった出来事やおこなった仕事について，いろいろなことを思いつくままに語ったものです。

これを読んで必要な部分を利用してください。

ここにも私のあるインタビュー記事があります。「休むことのなかった人間の1人」という見出しで掲載されました。幼少のころから，そのような人生を送った私にとっては，それ以降の人生は毎日休息のようなものです。休息し幸せな生活でした。なぜかといえば職場で座って，人と話し，ものを書いていました。ずっと話していました。決定を出していました。寒害，干害の対策をし，牧民各戸をオトルで移動させる決定を出していました。休息をしているかのように感じられます。今では人びとは「今年は休みがとれずに疲れている」などと言います。私は21歳まで，あのようなたいへんな生活を過ごしてきたため，それ以降はすべて休息なのでした。私は現在89歳です。休む暇もなく60余年国のために働いてきました。66年働きました。昼夜の別なく働きました。体は悪くありません。健康に暮らしています。健康に暮らすためのいくつかの秘訣があります。遊行し，遊び，娯楽し，飲酒し，ふざけ，道楽するような暇はありませんでした。まったく社会主義というもののためだけに尽くしました。私ミンジュールにはものが欲しい，家畜が欲しい，今度はあんな建物や塀のあるこんな家におしゃれに暮らしたいなどという考えはありませんでした。まったくこのモンゴルという祖国を発展させるために闘ってきました。国民全員が文化的な素晴らしい生活ができるように「おまえは今こそ力を出せ！」と党から任務を受けました。それを実現するために働き続けて現在に至りました。ですから健康で，いろいろな病苦に悩まされることはありませんでした。我がモンゴルはとりわけ性病が蔓延していた国でした。そのような病気にかかった人は現在血圧や血液循環系などをはじめとして皆持病を持っています。様々なものを飲食し，肝炎といったような様々な病気になります。私はそのようなことはありません。たばこもまったく吸ったことはありません。お酒を飲んだこともありません。もともと貧しい生活をしていたため，そのような生活をするお金もありませんでした。このように暮らして現在に至りました。

現在少し疲れています。少し疲れた生活をしています。子どもがたくさんいます。2人の妻との間に9人の子どもがいます。ウランバートルに4家庭が住んでいます。4家庭のすべて，居住環境がよくありません。ウランバートルであまりよくない生活をしています。わたしにいろいろと無心します。わたしはそうしてヒツジを屠れば4～5等分します。私はこのような3部屋のアパートを1つしか持っていません。アパートというのは出費がかさむだけで収入をもたらしません。年金の一定額を奪っていきます。それから少し少ないようです。貧しい，子沢山の人は衰弱してしまうかもしれません。どうなってしまうのでしょうか。これについて不安に思いながら暮らしています。党や政府の幹部に話そうと思います。私のネグデルの多くの人たちが現在では車に乗り，店を構え，食堂を持ち，様々な商売を行っています。私にはそのような才能はありません。生まれつきの貧者はそのままでいるしかないようです。そのまま

で暮らしているのです。何年か生きていればモンゴルに必要な意見を伝えていくことができるでしょう。そのような機会もなくなりつつあります。その後のことを話すのに必要かと思い，昔のことを話しました。
K：本日午前はとても素晴らしいお話を聞かせていただきました。あなた以外の人からこのような興味深いお話はなかなか聞けないでしょう。年配の方は多いけれども，あなたのように具体的に話すことはなかなかできません。どうもありがとうございました。

1.7 胸いっぱいの勲章

M：革命80周年記念の際，私に招待状が来ました。私が勲章を身につけて行くと，外国人たちが写真を撮ろうと押し寄せて進むことができません。とてもたいへんなことになりました。
K：それらの勲章についてご説明頂けますか？
M：これは労働英雄の「黄金のソヨンボ」という勲章で，その次は「スフバータル勲章」，スフバータルの絵が入っていますよね。その次が「労働功績赤旗勲章」，その次が「北極星勲章」という勲章が3つあります。それから「戦功メダル」が2つあります。1945年の解放戦争に私は参加しているのです。そのときに褒賞されました。モンゴル文字で書かれているのは「労働名誉メダル」，その次は例の毎年おこなわれる革命記念のメダルです。25周年，30周年，50周年，70周年，80周年の記念メダルです。「青年庇護教育者」というメダルを労働組合が授与していました。青年団体もメダルを授与していました。その他は軍やハルハ川戦争記念で授けられるメダルです。「文化優秀活動家」という大きな賞があります。ネグデルの長を21年間務め，牧民，若者たちの啓蒙という大きな仕事をしたとして授けられました。1945年の戦争前，内務省に10数年勤めていました。よく働いたということで内務省の「名誉チェキスト」のバッジをもらいました。これは「党ベテラン活動家」というバッジです。このようなたくさんの勲章，メダル，特別バッジがあります。1969年にモンゴルでネグデル化運動勝利10周年記念の大きな祭典が催されました。そのころモンゴルでは3つの大きな祭典がありました。

・未開地開墾10周年記念
・ネグデル化運動勝利10周年記念
・モンゴル工業設立10周年記念

人民革命以降おこなわれた3大革命がこの3つです。ネグデル化運動勝利10周年記念に際し，たった2人に労働英雄の称号が与えられました。ウブルハンガイ県ボグド郡のラクダ飼い牧民マーニと私の2人が労働英雄になりました。ネグデル長の私とそのラクダ飼い牧民，私たち2人だけが選考に残ったのでしょう。私たち2人に労働英

雄という称号が与えられました。

2 社会主義的集団化の過程

M：午前中，私はあなた方に自分の幼少のころについてお話ししました。地方であなた方にお話ししたような生活をしていて兵役を務めました。21歳になるということは人が少し考えるようになるということです。

「さて，私はいったいどうやって暮らそうか」と考えました。私が依拠し，依存し，私を上に引っ張り導いて，学校に通わせたり，就職させてくれたり，これからおまえはこうしなさい，ああしなさいと注意してくれる人はほとんどいなかったため自分で自分のことを考えなければならなかったのです。そして私は，

「21歳になる，とにかく兵役に行ってみよう！」と考えました。当時兵役には21歳に達した人を徴兵していました。そして徴兵されました。私は健全な身体を有していたので徴兵に合格しました。兵役に参加したのは1935年でした。1935年に徴兵され，故郷を離れバヤントゥメン第5師団までウマで行ったのです。アルハンガイからドルノドまでウマの駅伝を利用して行きました。私はウマに乗るのが下手でした。それでも駅伝を利用して行くのです。大きな困難を克服してドルノド県に到着しました。故郷から40人ほどが一緒に行きました。バヤントゥメンに着きました。ウランバートルを経由し，ウンドゥルハーンを経由して到着しました。ハンガイからステップにやって来ました。家から生まれて初めて，最も遠くに行ったのがこの時です。また最もたくさんのことを経験したのもこの時です。

2.1 軍隊生活

初めてウランバートルすなわち昔の庫倫を見ました。まったく木がなく，山がない場所を見ました。全部で10日ぐらい移動しました。ずっとウマの駅を通って行きました。時にはウマがありません。徒歩でも進みました。いろいろでした。そしてそこに着くと，たくさんの兵士を士官たちが受け入れ，入浴させて服を脱がせ，軍服を着させました。そして軍服を着てたくさんの兵士の中に入っていきました。そこには非常にたくさんの兵士がいました。新兵を整列させると士官たちがやってきて連れて行きます。それからまもないある日，小隊長学校の兵士を選抜することになりました。士官たちがやって来て，整列した兵士たちから選んで連れて行きます。300人ぐらいの兵士が小隊長学校に選抜されました。その中に私も含まれました。その学校には健全で積極的，快活な人びとを選抜したようです。そしてその300人に命令していきました。ヘルレン河畔で低木を切って椅子を作り，鉄の黒板を建てて，「講読の教師」という人が数字の「1」と文字の「A」を書いて質問をします。

「さぁ，これを誰が読みますか？」と聞きます。
私は「1」を「A」，「A」を「1」と読んでいました。この時300人程の中で7～8人だけが文字を知っていました。当時モンゴル人の約90%が非識字者でした。兵役に行った若者たちの人数は，それよりもっと少なかったでしょう。私たちに5種類の授業を教えてくれました。「モンゴル国の5冊のノート」と呼ばれる5種類のノートがありました。モンゴル国について教わっていました。どれくらいの国土面積を有するか，どこにどんな湖，河川があるかといったことを教わっていました。県，郡の数はいくつか，家畜頭数はどれくらいかといったことを教わりました。政治の授業ではこのようなことを教えます。これ以外に乗馬訓練，射撃訓練，戦術訓練がありました。3ヶ月後に私はモンゴル文字を読み，手紙を書けるまでになり，文字がわかるようになってきました。伝統的なモンゴル文字ですよ。軍で教わった知識はこれだけです。これだけで現在まで生活してきました。軍ではいくつかのことを学びました。
・射撃を学びます。
・乗馬が上手になります。騎馬で疾走し障害物を飛び越えることを学びます。
・刀で柳を切る練習をします。
・ウマにどうやって鞍をつけるか，どうやって水をやるか，どうやって洗いきれいにするかといったとても詳しい授業をしました。

また銃の分解，組み立て，銃での走りながらの射撃，座射，様々な形で射撃をします。私は政治の授業では常に優をとっていました。繰り返し読んでその数字すべてを覚えました。6～7ヶ月後に私は小隊長になりました。1人の小隊長が約30人の兵士を指揮します。約30人の兵士に訓練をさせ，自分が教わったことを彼らに教えます。そこで人と協力し，人を指導することを学びました。そして3年が経ちました。3年のあいだ，たくさん褒められました。よい隊長であるととても有名になりました。私の小隊の兵士はあらゆることに積極的で優秀でした。衛生，その他の検査でとてもよい結果をあげます。そこでは極端な2つの相違が観察されました。私のような生活を送ってきた兵士はより輝き，美しくなり，素晴らしくなって，あらゆることに積極的に参加し，褒められますが，他方，富者の子どもはふさぎ込み，飲食物が口に合わず，衣服に慣れることはありませんでした。そして，彼らは病気を患いやすく，多くが亡くなり，彼らはたいへんな状態にありました。逆に私たちは輝いているのです。

兵士は白い布の下着，青緑のズボン，軍服を着用し，冬はフェルトの靴，夏は革のブーツを履きます。夏は制服外套を着ます。冬は毛皮張りのデールを着て，毛皮の帽子をかぶります。そのようなものを着用したことのなかった私たちの身体にはとても心地よく感じます。貧しい生活をしてきた人びとは軍で頭角をあらわします。学問をよく学び，隊長になります。昇進して本当の士官になります。一部の人は進学します。当時の軍隊生活は今を考えると，どうやって生き残ったのかと思えるほど厳しいもの

でした。なぜかといえば住宅はないからです。夏の暖かい時期はずっとテントで暮らします。冬になると地面を掘って作った半地下小屋で暮らしていました。ほかには何もありません。白い草原に半地下小屋を作っていました。中隊，連隊の兵士たちは地下にいました。そこで暮らします。冬は寒くたいへんで，夏は常にテントや幕舎で暮らします。ヘルレン河の水はよくありません。水が合わずに兵士が腹痛を起こすこともあります。兵士たちがたくさん亡くなりました。敵が飲料水に毒を混ぜて殺害したのだと新聞に掲載されたものでした。本当にそうだったのか，どうかはわかりません。私たちの故郷からは40人ほどが赴任し，10人ほどが戻ることができませんでした。そこで亡くなりました。兵士は非常にたいへんな生活を送っていたのです。食事がよくありません。私のような者は食べたことのない食事を食べ，着たことのない衣服を着て，そして学問を教えてもらいました。今振り返ってあれを生きて健康で克服できたことを考えると，とても忍耐力があったのだなと思わずにはいられません。今ではそのような状況で生活することはどうやってもできません。軍が組織を固め，秩序だっておらずたいへんでした。あらゆるものが新しく，恐ろしいものでした。

そして退役しました。退役は自分の希望でした。私を分隊長に昇進させると幹部たちが説得しました。私は考えました。何を考えたかというと，私の母が亡くなり，私が１人になったときに私の面倒を見てくれたあのレンチンという人のことを考えていました。私と同じように孤児で貧しい人なのです。彼がどのように生活しているのかと考えていました。家族になろうと考えていました。２つ目に，前から私の胸に１つの考えがあったのです。私の母が亡くなりました，ある冬に。その土地にはよい僧侶がいましたが，私の母の後世のために読経をしてくれる僧侶が見つかりませんでした。私の母は今考えてみると肺炎で亡くなったのです。そしてその僧侶たちから薬をもらって飲むことができませんでした。貧しい者にはその僧侶たちは薬をくれませんでした。読経すらしてくれませんでした。そのような状況が思い起こされました。富者，僧侶たちは貧者に同情しないのものだと考えました。物事には順番があるのだと考えました。そして退役して戻ってきてみるとアルハンガイ県の党委員会は党員を登録していて，私はとても偉い人になりました。文字を知っている人間の１人に数えられたのです。私は軍にいるときに党員として入党していました。そして高く評価されました。私は公務に就こうと考えていました。地方で牧民になり，妻子を持とうとは考えていませんでした。県の党委員会は私を県の通信・郵便配達の仕事に就けました。それは私にはとても適した仕事でした。私はいくつかの困難な仕事を人生の中でやってきました。そのうちの
１つがこれです。

2.2 郵便配達の任務

アルハンガイ県は49の郡があり，その中でタリアト方面の13郡がありました。アルハンガイの最北の郡はトソンツェンゲル郡で，現在はザブハン県のトソンツェンゲル郡となっています。その間に13の郡がありました。その13郡へ郵便物を配達する代表という仕事につきました。1度にウマ13頭分の荷物と6人の駅伝御者を伴って駅を通っていくのです。1郡につきウマ1頭分の荷物になります。当時「人民の権利」紙，「党の真実」紙，「党生活」誌，「党宣伝員手帳」といったいくつかの新聞，雑誌が発行されていました。1郡へ配達する公文書を新聞，雑誌とともに袋に入れて，ウマに積んで配達します。そしてその郡から折り返す文書を回収します。1度出かけると15日かかります。その13郡を回って郵便を配達し，折り返す郵便物を回収してくるのです。月2回出かけます。夜間にもかなり移動します。平均して1日6時間しか寝ません。そして，その他の時間はウマで疾走しています。とくに冬季はとてもつらいです。1年ほどこのような仕事をしました。

1年ほど経ったころ，県の党委員会に呼ばれました。私をとても優秀な人間であると褒めるのです。重要な仕事を1年あまり立派におこなったため，昇進させて長にすると言います。ブルド郡の党細胞長になりました。現在のウブルハンガイ県ブルド郡です。昔はアルハンガイに含まれました。そして，そこで党細胞長として赴任しました。1938年に党細胞長になりました。私の人生のスタートはこのように始まったのです。ウブルハンガイのブルド，アルハンガイのウンドゥルオラーン，生まれ故郷のムルンなどの郡で7年間党細胞長を務めました。そして1945年の戦争の年，内務省に引き抜かれ，対外諜報局で職務を遂行しました。内モンゴルを日本から解放する戦争に参加し，内務省に11年間勤めました。その後1955年に党はネグデル化運動勝利のために指導的立場の職員を党の呼びかけで地方に派遣しました。総勢130余名を派遣しました。その中に私も含まれていました。こうしてネグデルの長を21年間務めました。

70年代後半にネグデルを「ネグデル連合最高評議会」の配下に再編しました。ゴビアルタイ県のネグデル長であるG.ロドイフーという人がいました。私のように素晴らしい長であると褒められていました。とてもよく働く長でした。私たち2人をネグデル連合最高評議会の評議員に任命しました。私たち2人は国家レベルでネグデルの問題を担当する評議員という仕事を7年間務めました。そしてしばらくするとネグデルを相互間で協同させ，豚，鶏，ウサギなどの食肉関連の補助農場を営ませることになりました。このために消費者組合を作る指針が出され，私は「トンガラグ・タミル」という消費者組合をアルハンガイに設立しました。そこで6年間働きました。このように仕事をして約60年間国のために働きました。

L：あなたが兵役をバヤントゥメンで務めているときに様々な国境問題は起こっていましたか？

M：国境問題は起こっていたと思います。これは国境警備軍が管轄していました。私は国境警備軍にはいませんでしたのでわかりません。
L：兵役を務めていたバヤントゥメンは故郷のアルハンガイ県と自然環境がかなり異なりますよね。牧民の生活，家畜の放牧の様子にも何らかの違いがありましたか？
M：牧民の生活はどこでも変わりませんよ。しかし，家畜の放牧の仕方は，その土地の状況によって違いがたくさんあります。ハンガイでは1日中徒歩で家畜について放牧します。ゴビでは常に乗馬して家畜について放牧します。家畜は草原地帯をかなり自由に遠くまで行って草をはみます。柵や囲い，寝床にあまりこだわりません。家畜は牧草地で寝て，時々井戸や水場に集まります。ゴビ地帯の家畜は少し野性的な感じです。ハンガイの家畜はゲルを出て1つ尾根を越えると見失ってしまうため，常にそばを徒歩で子どもが1人ついて行きます。ゴビではそのようなことはありません。ゴビの家畜の群れ同士が互いに混ざり合うようなことはほとんどありません。ハンガイではこれがあります。バヤントゥメンにいたときに，ヘルレン河畔に沿って牧民の家庭があったと思います。現在のようにたくさんの家庭があったわけではありません。バヤントゥメンには歩兵と騎兵がいました。当時，我が国から，あるいは内モンゴルから家畜が国境を越えて入ってきたり，出て行ったりすることが起きていたそうです。また生活の貧困さのため内モンゴルから国境を越えて人びとが入ってきていたそうです。しかし，これらのすべては私が務めていた国内軍には関係がありませんでした。国境警備軍が直接管轄していました。

2.3 結婚

K：あなたはいつ結婚なさいましたか？
M：1938年に長となり，1940年ころにブルド郡の党細胞長を務めていた時に結婚しました。ブルド郡の出身です。
K：奥さまとはどのようにお知り合いになったのですか？
M：そうですねぇ，当時はとても不作法な時代でした。当時このようなことがありました。すべての国民に文字を教えるという大きな運動がおこなわれていました。このため文字を知らない，成人に達した人びとを郡の中心地に集めて20～30人ごとに文字を教え，証明書を交付していました。「成人グループ」という名前でした。その成人グループの中の1人の女性と知り合いました。私は彼女に授業を教えていませんでした。でもいろいろと話をします。祖国について，現在国のおこなっている政策に関していつも話をしていました。当時は私有財産制の時代でした。ネグデルのない時代でした。彼女はかなり裕福な家庭の娘でした。そして，彼女と結婚しようと約束しました。当時，彼女の兄弟や親戚はとても反対していました。どこの者ともわからない，よそ者の浮浪人と連れ添うことに，ひどく反対していました。

「お宅の子どもが党細胞長R.ミンジュールとつきあい，彼と結婚すると陰で盛んに話しています！」と両親に噂が伝わり，彼らは娘を結婚させまいと多くのたくらみを画策していました。

党細胞の筆頭党員であるN.チルハージャブという幹部がいました。消費者組合長だった人です。その人が私を助け，彼女の両親に話をしてくれて結婚することができました。その人は上下の幹部たちにまでこの問題を正しく伝えてくれました。そして結婚して1941年に子どもが生まれました。当時は自分の家がありませんでした。郡の役所の大きなゲルがありました。そのゲルで私は暮らしていました。朝起きて手と顔を洗い，仕事に就きます。郡の役所の用務員，火夫を務める1人の老翁がいました。その人もまたそこで寝泊まりしていました。そのゲルには棚が1つ，テーブルが1つ，椅子が1つありました。それはそれほどたいしたものではありません。寺院のテーブル，椅子を利用して作ったものでした。朝ご飯を食べてその机に向かって座り仕事をします。そのゲルに妻と一緒に生活することになりました。外出するときは駅からウマに乗ってバグを回ります。

当時はあのレンチンおじといつも連絡を取っていました。おじは私に小さなゲルを用意してくれました。そして，それを取りに来いという伝言を人に託しました。私はゲルを取りにウマの駅伝を利用して帰省しました。そして私のおじは3頭の牛車に私のゲルを積んで，ツァガーン・ノール湖の手前のムルン郡から走り続けて県の中心地にやってきました。党細胞長が引っ越しをしているのです。県の中心地に来ると，消費者組合で買い物をしにブルドから20台ほどの牛車を伴った人びとが来ていました。彼らの3つの牛車に自分のゲルを積んでもらいました。彼らはブルドに届けてくれました。その私の最初のゲルはハナ（折りたたみ式の壁）が4枚の小さなものでした。それに妻と一緒に暮らしました。その年に息子が生まれました。家庭，家，子どもを持ちました。この後，妻の兄弟たち，両親たちは娘と私が結婚することを許しました。そしてある日娘の持ち物を持ってきました。箱2つに入った小物や衣服でした。このようにして結婚しました。

K：当時，結婚式はおこなわれていましたか？

M：おこなわれていました。私が結婚式をするということはありません。兄弟がなく1人でお願いして回ってようやく結婚しました。結婚式，披露宴はしていません。妻の兄弟が許してくれていなかったので役所のゲルで，2人で暮らし始めました。我が郡の原料担当者のO.ガルサンツェレンという人がいました。私たちは彼の家によく行きました。このようにしていて結婚しました。そこで3年間を過ごし，妻子を持つようになり，そこからアルハンガイ県のウンドゥルオラーン郡の党細胞長になりました。当時，党細胞長たちを1年の期間で勤務地の郡を異動させていました。私は異動することなく，1つの郡に3年間勤務しました。そこで党細胞長を務めた3年のあいだに

家畜の毛を刈り取るようになりました。「家畜の毛は黄金」という運動が広まりました。

ヤクの柔毛，剛毛，ヤギの剛毛，カシミア毛を刈り取るようになりました。ウマのたてがみ，尻尾の毛を刈り取るようになりました。家畜の毛を刈り取ることはとてもたいへんな作業でした。このようなことをしたことのない人民たちは反対して作業をしませんでした。このように家畜の毛を刈り取れば家畜が流産するとか，痩せて死ぬといって認めませんでした。さらに僧侶や俗人の封建領主たちが風説を流すからたまりません。ロシアに家畜の毛を納めるという内容でモンゴル国は契約を交わし，家畜の毛を集めるよう私たちに実行計画を示していました。それなのに牧民たちは家畜の毛を刈り取ってくれません。私たちには，とりわけヤギのカシミア毛をくしけずってもらうというのがとてもたいへんな仕事でした。カシミア毛の価格も安かったのです。それを誰も顧みませんでした。地方の富者たちは家畜の毛を消費者組合に納めていくらかのお金をもらうことを顧みませんでした。国の消費者組合はそれを安いお金で購入します。トゥグルグの値が付くものはありません。50，60，70ムングです。ですから，人びとは熱心ではありません。それなのに「家畜の毛は黄金」という指令ですので，たいへんな仕事になります。私たちは党員たちを連れて自分たちが赴いてヤギをくしけずり，家畜の毛を刈るのです。当時党員たちはとてもよく仕事をしていました。党員と青年同盟のチームを派遣して富者たちの家畜を柵に入れて格闘するのです。このようにしてようやく家畜の毛の実行計画を達成していました。

1942年に私の務めていたウンドゥルオラーン郡が全国で3位になり，私は労働名誉メダルで褒賞されました。そして人びとは私を「勲章ミンジュール」と呼ぶようになりました。勲章をもらった人はとても珍しかったのです。

K：党細胞長自身が家畜の毛を刈り取る作業をしていたのですか？

M：そうです。私が党細胞の成員を連れて自ら刈り取るのです。自身が行って初めて家畜の毛の実行計画を達成できたのです。こうして最初の褒賞を受けました。そしてその褒賞のメダルを身につけて歩きます。とてもよく身につけていたものでした。

K：あなたの故郷にこのような勲章を受けた人はいましたか？

M：いませんでした。

L：第1回国家優秀牧民協議会が1940年代初頭におこなわれたと聞いています。あなたはその協議会に参加しましたか？

M：参加しているはずです。

2.4 1940年代のウランバートル

L：1000頭所有牧民運動はいつ生まれたのですか？

M：民主化の時期に生まれた運動で，P.ツァガーン大蔵大臣が提案したのだと思います。昔は「国家優秀牧民」の称号を与えていました。家畜の数は考慮されません。封

建時代にも優秀な牧民を奨励し，鋼鉄の鼎などで褒賞していたそうです。私がよその家畜を放牧して仕えていた時にこのような鼎で褒賞していたのだそうです。富者が受ける賞ですよ。1945年までこのような仕事をし，内務省に入省しました。

当時，内務省というのはモンゴル国の非常に重要な省であり，すべての活動が極秘でした。当時の内務省はとても優秀な人びとを採用していました。私は勲章も受け，よく働いていたのでしょう。優秀な人の数に入れていただきました。ウランバートルに家族で引っ越してきました。子どもが3人いました。当時は，ウランバートルはたいへんなところでした。このような建物や住宅はありません。このようにたくさんの車やバスもありません。徒歩でかなり歩きます。どこへ行くのにも徒歩で行きます。建物は1つもありません。現在の感染症病院のある辺りの塀で囲った場所に私たち家族は暮らすことになりました。内務省はハナが5枚のゲルをあてがってくれました。自分のゲルはありません。内務省のこのゲルで暮らし，仕事に行きました。妻は当時の軍の手工業工場に就職し，軍服を縫うようになりました。ミシンで縫っていました。当時の生活はとても苦しいものでした。

戦時中，モンゴル国は困難な状態になりました。物価は天井知らずでした。1キロの肉が70トゥグルグに達していました。ふすまのような大粒の小麦粉しか入手できません。それをガーゼで濾していると大粒の黒い粉になります。それで食事を作って食べます。とても痩せて疲弊した馬肉が食料として手に入ります。牛肉となれば価格が高くなってしまいます。私の階級は中尉でした。とてもたいへんな時期を過ごしました。戦時，モンゴル国民はとても憔悴しました。たくさんのウマを前線に供出していました。金銭，資産を貯め，また毛皮のデール，衣服を牧民たちが戦争の最前線へ供出していました。公務員たちは給与を貯めて供出していました。そのようなひどい時期を克服しました。私たちの人生には何事もなく平穏に過ごした時期はありません。当時の人びとは勇敢で正直で，祖国を愛し信じていたので祖国を守って生き残りました。そうでない一部の人たちが途中でたくさん失われました。反革命家になった人もいます。ならなかった人もいます。人民政府打倒を謀った多くの蜂起がありました。僧侶たち，俗人の封建主義者たちが参加し，人民政府を倒壊させようと活動していました。当時人民政府に捕まり，法に基づいて処分された人びとは現在では全員が粛清被害者となったようです。粛清被害者もいますが，反革命家だった人もいます。区別すればその違いは明確になります。誰が反革命家で，誰が粛清被害者かということを明らかにできます。これからその違いを明らかにするのかどうか，わかりません。人民政府と闘争した僧侶たちや封建主義者たちの蜂起がたくさん起こっていました。

1932年のタリアト寺院の蜂起は単純に地方の僧侶たちが地方の人民たちと野合して人民政府を壊滅しようと起こった蜂起なのです。当時人民政府は積極的に活動しており，党員たち，宣伝担当の革命家たち，教師たちが働いていました。これらの人びと

を反革命家たちは「赤」といって殺害し，殺戮し，非常にたくさんの人命が失われました。消費者組合や商店，郡の役所を破壊し，焼き捨てていました。そのときロシアの商品，小麦粉，お茶，たばこを山積みにして燃やしてしまいました。ロシアのものを使ってはならないと煽動しました。私は自著にこれについてかなり書きました。1932年に反革命蜂起が起こったとき私は17,18歳でした。私は反革命家たちをよく知っており，彼らと同じ苦悩を味わいました。しかし，私たちの世代は子どもだといって顧みられませんでした。

1930年代にモンゴルに共同社会コミューンを設立する大きな運動が広まりました。私はよく知りません。1932年の反革命蜂起の時にはそれを見ていました。当時たくさんの人びとが資産，金銭をあわせて共同社会コミューンを設立しました。そこでは労働はまったくおこなわれませんでした。資産，金銭を出した人びとがその資産，金銭で飲食，飲酒，娯楽，遊行に興じたそんな時期でした。このため偏向が起こったとして，我が党・政府が解散させました。ジャグバラルさんのある本に書かれているように，個人生産者は1000余年の歴史を有します。そして個人生産者というただ1つの形態だけでやってきたことが昔から反対され，批判されており，協力してまとまって生活しようという関心が生まれていたのです。この考え，意見はコミューン以降も継続して出されていました。そして協力しよう，まとまろう，ネグデルを設立しよう，ネグデル化しようという問題が提起されると同時に，過去の失敗の経験が持ち出され，実現しませんでした。「例のコミューンのように多くの資産，金銭を無駄にしてしまうだろう。協力して1つになれば生活が向上し，労働が軽減され，科学の発見や成果を導入してすべてがよくなるということは実現しないかもしれない」と信じられなくなっていたのです。

2.5 ネグデルの設立過程

ネグデルは1945年から長く続きました。至る所に設立されました。ネグデルの設立を望む人があれば党・政府は，

「どうぞ，どうぞ！」と言って，ある若者をネグデルの長として4，5軒の家庭で1つのネグデルを構成していました。1つの谷間でまとまって1つのネグデルを設立するといったように，これを続けていき，約730のネグデルが設立されました。私が内務省に勤めて以降，地方ではこのような活動が広まっていました。なぜそのようにたくさんのネグデルが設立されたかというと，各人の自らの意志によって，設立しようというすべての場所に設立していたからです。こうして多くのネグデル，多くの成員を有するようになり，それと同時に全国で255の郡ができました。郡という行政単位がありました。党・政府が措置を講じて700ほどあったネグデルを合併させ，郡ごとに1つのネグデルを有するように再編成しました。郡の行政単位の数と同じ255のネグデルと

なりました。このように大きく拡大しました。

私たちは1955年，地方に，ネグデルに赴任して働く呼びかけをおこないました。新たに設立されたネグデルの長たちは，党・政府が任命しました。そしてそのネグデルを強化する作業に入りました。私はネグデル設立運動が始まったとき，ネグデル長になりました。党・政府はまさに必要な時期にネグデル長を任命しました。1955年に出された呼びかけにより党員たちはネグデル長となり地方に派遣されました。1955年にネグデル長となった人びとは好条件の待遇を受けました。

第1に住宅を用意してくれました。ウランバートルを離れるのですから，地方に住宅はありません。それからウマの鞍と馬勒を用意してくれました。内務省からは9人が派遣されました。私たちに9つのゲル，9つの鞍と馬勒をくれました。私たちの2〜3ヶ月分の給料をくれました。私たちが任命されたネグデルまで車で送ってくれました。党学校で私たちは1年間の講義を受けました。7〜8ヶ月講義を受け，カザフスタン，ブリヤートに連れて行かれて2ヶ月の実習をしました。このようによく準備をしてから私たちを派遣したのです。最初の1年分の給料を月額1000トゥグルグと決定し，国が支払いました。ネグデルから給料はもらいません。呼びかけによって派遣されたネグデル長たちは国から給与をもらいます。2年目は月額800トゥグルグ，3年目には月額600トゥグルグの給与をもらいます。こうして3年分の給与を国が負担しました。そしてネグデルの資金繰りが十分になっていた場合に自分たちで給与を支払うことになっていました。

月額1000トゥグルグをもらうか，何ももらわないかは自分次第でした。そしてこの時期にネグデル長たちの明暗が分かれ始めました。ある者は誤った仕事をして党から追放され処分を受けるようなことも起こりました。またある者は優秀に仕事をして褒賞されました。労働功労赤旗勲章という勲章を受けたのは私が最初でした。それ以降，様々な人がこの褒賞を受けました。私はアルハンガイのあのムルン郡に行きたいとしばしば考えました。

なぜなら，男としての考えがあったのです。当時は私有財産制で富者は富者のまま，貧者の一部は貧者のままでした。私は「この富者たちをネグデルの成員とし，ネグデルの家畜を放牧させてやろう」と考えていました。私ミンジュールが幼少のころ，彼らの家畜を放牧していたことの意趣返しをしようと男として考えていたのです。

「故郷に帰ろう！いつまでも富者が富者のまま，貧者が貧者のままでいていいのだろうか？党の政策もそうである。だから富者たちを権力で押さえつけネグデルに入れてネグデルの家畜を放牧させてやろう。貧者の生活を向上させ快適な素晴らしい生活ができるようにしてやろう！」ということを男として内心考えていました。

「おまえは私の母が亡くなるときに薬をくれず，私が仕えていたときも面倒を見ず，兵役に行くときも10トゥグルグすらくれなかった。21歳まで酷使して享受していたの

に私が兵役に発つ際『道中気をつけて』と後ろから乳を捧げることすらしなかった」といったように思い浮かぶことがたくさんありました。私はそのことだけを考えていました。

一般に富者は他人に対して同情心を抱かないものです。今でも我がモンゴル国の何人かの富者は巨大な力を持っているように思われます。当時もそんなふうに思われました。男としてそのようなことを同時に考えていました。

2.6 ムルン郡のネグデル長

こうして故郷に赴任しました。そこでは私がネグデルに100%加入させました。ネグデルの成員は規則に従いハンガイ地帯で50頭の家畜を自分の財産として持つことが許されました。後に75頭に増加されました。その他のすべての家畜をネグデルの家畜としました。それを私は自分の故郷で自分の手で行ったのです。これにより1969年に私はネグデル化運動10周年記念の場でネグデル設立に大きな貢献をした人として「労働英雄」になりました。ムルン郡では4年間ネグデル長を務めました。そしてそれからネグデルの拡大，合併が始まりました。ムルン郡は小さな郡でした。イフ・タミル，タイハル，ボガトという3つの郡と合併して1つの郡になりました。そして私はそこへネグデル長として赴任しました。イフ・タミルに3つの郡が吸収されて，1つのネグデルになりました。

L：ムルン郡であなたはネグデル化運動を100%達成したと話されました。家畜を共有化してネグデルの成員になる決定を牧民たちはどのように受け止めていたのですか？

M：ネグデルには牧民が強制的にではなく，自分の意志で参加するものでした。家畜を共有化する際に「人民生産ネグデル模範規定」に基づいて実施しなければなりませんでした。ネグデルの成員は規定を実施するために何頭の私有家畜を残すかといったことを遵守します。またネグデルへの加入は自分の意志による決定です。この2つの条件を厳しく守っていました。どうすれば自分の意志でネグデルに加入するかというと，協同労働というものの何が優れており，人民の生活に何が有利となるかということを示すことができたときに人びとは自分の意志でネグデルに加入するのです。これは党の政策でした。

私たちは野菜を植えました。ジャガイモを植えました。家畜の飼料を作るようになりました。ネグデルには機械が導入されました。機械で学校の生徒たちの寮の燃料である木を加工するようになりました。寮に学校の生徒たちを無料で住まわせるようになりました。母親たちがネグデル付属機関で療養できるようになりました。保育所，幼稚園を設立し，飲食物をネグデルが提供しました。そこにはネグデルの成員の子どもたちを受け入れました。学校の生徒たちをまったく不登校させないようにしました。就学年齢の子どもたちの100%が学校に通うようにしました。これらすべてをネグデ

ルがおこないました。ネグデルは所属する牧民に給与を支払っていました。毎月定期的に支払います。年金を支給します。作業着を支給します。こうなってくると例の富者たちも自然とネグデルに惹かれてきます。ネグデルの成員になった人びとの家畜から様々な税金を徴収するのをやめました。個人生産者からかなりの税金を取るようになりました。税金により圧迫していました。個人生産者たちから食肉，毛，乳を徴収していました。これにより向こうからも締め付けるのです。

ネグデル化事業は全国で同時におこなわれました。同時に行ってその家畜の調整を行ったのです。このためどこでも同様におこなわれました。中にはうまくできなかった，よくできたといった違いはありました。機会を悪用して家畜が無駄にされることもたくさん起こりました。家畜を隠したり，数をごまかしたりするなどの現象が牧民の中に見られました。大衆の目がありましたからそれを追及して摘発していました。そのことをネグデルの議会で審議し批判していました。保有家畜頭数が50頭に満たない貧しい家庭が非常にたくさんありました。彼らにネグデルの家畜を預け，放牧させていました。貧者がたくさんいたため共有化した家畜を放牧する人はたくさんいました。貧しい成員に家畜を預ける際に，個人所有の家畜を贈与します。

「さぁ，君にネグデルの250頭のヒツジを預けます。上手に放牧してください。君自身に加えて５頭のヒツジを差し上げます。この５頭のヒツジを君は繁殖させてたくさんの家畜を持つようになってください！」と言って引き渡していました。乗用馬を支給します。家畜を放牧する場所を指示します。家畜を放牧する家畜囲いを建ててあげます。井戸を掘ってあげます。飼料を作ってあげます。

ネグデルの家畜の飼料を作り，ネグデルの家畜囲いを建て，物的基盤を整備する上で個人所有の家畜からは何も徴収しません。ネグデルの成員は自分たちの個人所有の家畜をネグデルの家畜と一緒にネグデルの家畜囲いに入れて，ネグデルの飼料で飼養します。その経費は牧民から徴収しません。ですから貧しい人びとの生活が向上してきました。

L：家畜を共有化してから，家畜が少ないために地方での生活ができなくなり都市へ移動した人びとはたくさんいましたか？

M：そのような人びとはたくさんいました。かなり多くの人が都市部へ移住しました。家畜を共有化してしまってから，ネグデルの家畜を放牧したくないといって引っ越していった家庭はたくさんありました。県の中心地，郡の中心地，ウランバートル，ダルハン，エルデネトに多くが行きました。そこに行った人たちは工場に就職したのでしょう，そのような場所へ兄弟を頼ってか，子どもを頼ってたくさんの人が移り住んでいました。

L：共有化した家畜をネグデルの成員に放牧させるために預けていました。彼らは家畜をよく世話していましたか？家畜の損失はよく起こっていましたか？

M：ネグデルが初めて設立されたころ，全国的に家畜の損失が起こっていました。どうしてかといえば共有化させないために大量に食べたり，市場へ売却したりするなどの行為がかなり頻繁におこなわれていました。そのような困難が発生したことにより，家畜がかなり損失しました。

L：イフ・タミル郡のゲレルト・ザム（輝く道）・ネグデルを自立させて，社会主義的な大規模生産者となした経験をお話ください。

M：ネグデルのおもな生産は牧畜です。ですから，家畜の飼料，水やり，家畜囲い，牧民の給与や生活の問題に重点を置いてたくさんの措置を講じました。ネグデルは家畜の生産物，乳製品，乳を利用し多くの収益をもたらし，また細々とした商売をおこない，市場経済的な原理にかなり近づいていました。ネグデルを強化するために手近な商売をたくさん実施しました。たとえば，我がネグデルには非常にたくさんの森林があり，当時は森林法や土地法が若干雑なようでした。ですから，材木，板，丸太をたくさん加工し，それをバヤンホンゴル，ゴビアルタイに持っていって売却してソーダや塩を買って家畜に与えていました。このような形で商業活動をかなりおこなっていたのです。

ネグデルの成員の個人所有家畜は増加し数多くなっていました。家畜が増えた家庭は分家して家畜頭数を計上するようになりました。1つの家庭が分かれて2～3戸の家庭となれば150頭の個人所有家畜を持つことが可能となります。婿，娘の名前で家畜を計上するようになりました。また，家畜頭数の少ない兄弟の名前で計上するようにして，分割して計上することで，個人所有家畜頭数は増えていました。これを私たちは禁じたり，それほど追及したりはしませんでした。しかし，もっと過度に多くなってくると，ネグデルの家畜を邪魔と見なしたり，ネグデルの家畜に注意を払わなかったり，ネグデルの家畜が虐げられます。個人所有の家畜が増えるということはネグデルの家畜飼料をとてもたくさん食べて減少させてしまうのです。このため，家畜がかなり増えてくると規則通りに共有化します。後にハンガイでは50頭から増やして全部で75頭の家畜を保有することを許しました。最後には100頭にしました。それ以上増えた家畜は共有化する。そのような調整をしていました。総会で採択したそのような規則があります。規則に従っておこないます。イフ・タミル郡のゲレルト・ザム・ネグデルではこのような共有化を行っていました。私は少しだけやりました。あまり多くはやっていません。イフ・タミルのネグデルの成員は自分たちで調整していたのであまり上限を超えることはありませんでした。

2.7 内務省時代の任務

私はウランバートルにいる時代，イフ・テンゲル谷でチョイバルサン元帥の食料を用意する任務を負っていました。チョイバルサン元帥の食料という名称ですが，それ

以外にも国内外の賓客が来たときに利用する食料を用意していました。政治局のメンバーに対して彼らの食べ物を検査所で検査をして料理する，そのような農場で働いていました。そこで私は肉，毛，乳，乳製品の生産を行っていました。その農場はボグド山，イフ・テンゲル谷にありました。イフ・テンゲル谷の農場は現在もそこにあります。

当時第1（10年制）学校の近くには何の建物もありませんでした。民間のゲル地区でした。私の家は第1学校の北側にありました。当時，建物はなく，すべてゲルでした。私が来たときにはスフバートル広場はこんな風ではありませんでした。スフバートル広場は土とぬかるみで，夜は歩くことができない場所でした。スフバータル広場をこのように変えました。周辺に劇場，政府庁舎，外務省，ウランバートル市役所の建物が1945年の戦争以降に建てられました。当時たくさんの日本兵が捕虜として来ました。彼らに戦後補償のような形で建てさせました。日本国は我が国に対して多くの責任を負ったのでしょう。その補償の資金で，その労働者たちのおかげでこれらが建設されました。私は当時ちょうどウランバートルにいました。当時，捕虜となった兵士たちを警備するグループで働いていました。私たちはウマに乗っていました。とても多くの分隊が捕虜たちの警備に当たりました。そこで私も物資を担当していました。日本兵の捕虜たちと会ったり，彼らの建物に出入りし，また病気になった人に医療支援をおこなったりしました。彼らの作業に参加もしました。逃亡して行方不明になると捜索しました。そのような仕事をよくしていました。逃亡して事故に遭う事件がよく起こっていました。彼らを捜索し，見つけ出す仕事をしばしばしていました。逃亡させないために十分に警備をしていました。捕虜たちの体調が悪くなることはしょっちゅうでした。彼らは自分たちの病院を有し，自分たちの指導者たちが治めていました。彼らの建物の外には国内軍の警備がありました。当時食品市場や物品市場など，すべてが混在した市場が現在のウランバートル駅の近くにありました。このウランバートル駅はまだありませんでした。住宅の建物もありませんでした。これらすべては鉄道が開通してから作られたのです。

L：当時，飲食物をどこから入手していましたか？

M：当時「ウンドゥル消費者組合」というのがありました。現在は，その建物に美術館が入っています。我が国の最も大きな商店がそれでした。そして，中国人たちの店がたくさんありました。中国九路通りというのがありました。現在のレーニン博物館近辺です。この近辺はそのまま中国人街でした。食品デパートがありますよね。あそこには中国の「シャンズ」という映画が上演されるクラブがありました。土造りの建物がたくさんありました。モンゴルには中国人が非常にたくさんいました。当時モンゴル人は野菜，穀物の栽培をしませんでした。ですから中国人が個人で野菜を栽培します。それを中国人から購入します。

公的機関は自分たちの家畜を所有していました。常に個人所有の家畜の肉を使っていました。乳製品はほとんどありません。私は1955年以降地方に出てしまいました。鉄道が開通したと聞きました。ロシアのたくさんの建築部隊がやってきて建物を建てていました。地方にいてたまに戻ってくると大きな高い建物が建っていたものでした。後にロシア人の手により多くの建物が完成しました。中国人たちとも関係がよくなりたくさんの建物が建てられました。この大きなデパートの建物も中国人が建てたのです。あの近辺のアパートは中国人が建てました。そして中国との関係が悪化し，後に中国人を全員追い出しました。苦労をたくさん味わいました。ロシアとはとてもよい関係にありました。ロシア人たちは我が国にたくさん実行しました。民主化運動が起こり，ロシア人たちを追い出しました。この間に最も悪かったことは，非常に多くの資産が無駄にされたことです。中国人たちは発つ際にたくさんのものを破壊していきました。ロシア人たちも発つ際にたくさんのものを破壊していきました。現在，世界がモンゴル国にたいへん注目しています。日本は我が国の面倒をよく見てくれています。援助をたくさんしてくれています。まさにかつてのロシアの地位を引き継ぎました。すべてのものに日本の援助が見られます。

南方へ解放戦争に行く際に妻子をアルハンガイにおいていきました。私はフフ・ホトまで行きました。私の属したのはスレンヘール部隊という有名な非常に大きな部隊でした。私はその部隊と一緒に進みました。オラーンツァブ盟，シリーンゴル盟などの盟に入りました。そこには常に日本軍がいました。彼らをロシア・モンゴル軍が協力して追い払って故郷に撤退させ，そして内モンゴルを解放しました。解放した内モンゴルを中国に併合させる，そのような大きな戦争でした。当時内モンゴルはとてもひどい状況でした。外国に支配されるというのはその国を丸ごと破壊することです。我が国が満州の支配下にあったときのように内モンゴルは日本に支配されている間にそのような状態になってしまいました。権利はありません。すべてのものは日本の手に。牧民が家畜を放牧している状況は，我が国の私有財産制の時代とよく似ていました。１家庭あたりの家畜頭数は我がモンゴルとほぼ同様でした。内モンゴルの家庭を訪れると食べ物が貧相でした。そして主に肉を食べます。とても臆病です。人を非常に怖がります。日本のスパイと中国人に疑われます。日本人にも中国のスパイと疑われます。こちらからはモンゴル人がおまえは日本のスパイかといって疑います。ロシア人がさらに下手をすると殺してしまいます。多くのひどいことの中でとても苦しみ，被害を受け，多くの人が粛清され，逮捕され，殺害され，行方不明になっていたと思います。とてもたいへんな状況で生活していました。言葉について苦労はありません。年配者はよく話せます。若干若い人びとは異なりました。

フフ・ホトもまた貧しく疲弊していました。庫倫と同様にゴミにまみれた街でした。たくさんの資金を投じた近代的建物はありませんでした。内モンゴルには寺院がたく

さんありました。僧侶が多かったです。中国人たちは寺院を非常に締め付けます。中国人たちは実際には仏教を非常に嫌っています。現在もそのままでしょう。私は仏教を信じません。嘘です。偽物です。よくありません。

3 ネグデルの発展過程

3.1 家畜の共有化

L：国民から共有化した家畜をネグデルの家畜としてネグデルの成員に放牧させることになりました。家畜の共有化の過程を少し詳しく教えていただけませんか？

M：モンゴル国では個人生産が主でした。協同生産で勢いのある，人びとに信用されうるような生産者はいませんでした。モンゴル経済の主な基盤は家畜です。家畜によって主な生産を行っていました。その家畜の生産物を完全に利用して国の発展を促し，学校や病院，商業，日常必需品を家畜の生産物の利用による資金調たちによって発展させてきました。科学の成果，特に動物学，獣医学を牧畜業に導入する大きな必要性がありました。モンゴルの農牧業部門では農耕という新部門を生み出す必要がありました。モンゴル人は穀物の栽培をまったくしていませんでした。穀物の栽培というのは本当にたいへんな作業です。これを1つ2つの谷間で自分のことしか考えない人がおこなうことはあり得ません。労働力を1つにして初めて農耕作業をおこなうのであって，個人生産者が個人である人民を集めて連れて行き農耕を営ませ，野菜を植えるということはあり得ません。このすべてをモンゴルで発展させる必要がありました。モンゴル国がこのすべてを発展させて初めてモンゴル国民全員に文字を教えることができます。国民全員を封建時代に流行っていた持病から解放することができます。そのおかげで若い母親たちがたくさんの子どもを生むことができます。生まれた子どもたちは健康に育つことができます。これをどうやって実現するかといえば，協同労働を発展させて初めて，経済を発展させて初めて実現できるのです。このようにしてモンゴル国を発展させる必要があったのです。

個人生産者にはたくさんの家畜があります。そのたくさんの家畜の皮を集めます。その毛を刈り取ります。それを搾乳してバターを作ります。これもまた協同の力で，協力して初めてできるものであり，協同労働を行わなければただ1人でその谷間の窪地にいる家庭が1戸あたり乳を20リットル，10リットル，5リットルを搾乳し，ウマの背に乗せて持っていって乳バター工場に供するということはあり得ません。必ず，共同生産組織を設立し，共同生産組織を設立するというのはたとえば10名以上の搾乳労働者，150頭の乳牛を有する1つの酪農場を作ることをいっています。その150頭の乳牛の乳を工場が買い取ります。全郡で1000戸の家庭から乳を購入するのか，150頭ずつ乳牛のいる10の酪農場から購入するのか，どちらから購入してバターを作るかという

問題は特に重要な問題でした。このすべてを勘案すると，ネグデル化は必須でした。ネグデル化して初めてこのモンゴル国を発展させることができるのです。世界各国の中で明確な地位を確立する必要がありました。ですから，我が党はネグデル化の問題を上から非常に具体的に計画しました。第2に人びとは孤立して暮らすことを厭うようになり退屈し始めていました。何年も孤立して暮らしていました。谷間の窪地に孤立していました。雪害や天災が起こるとそのような家庭は家畜を失ってしまいます。家畜がいなくなった家庭に家畜をくれるところはありません。世話をする者もありません。ですから「共同して生活しよう，乳・バター工場を設立してバターを作るのも正しいし，消費者組合に家畜の毛を大量に回収して売るのも正しいのだ」というように理解し始めました。「すべての家畜を獣医に診てもらい，動物学的な方法により種付けの仕事をしてもらい，スケジュール，詳細な計画性を持って子家畜を育てる方がいいのだ。こうすることで家畜の毛をたくさん回収でき，肉がたくさん得られるのだ」と考えるようになりました。

個人生産であれば100頭のヒツジから50～60頭の子ヒツジが死なずに育ちました。共同生産となってからは90頭の子ヒツジ，優秀な牧民であれば100%子家畜を死なせずに育てることができるようになりました。ネグデルの成員は協同して働き，また家畜の飼料，家畜囲いを含む拠点を提供します。すると100頭のヒツジを放牧して40～50頭の子家畜を得るのか，100頭のヒツジを放牧して100頭の子家畜を得て200頭のヒツジを所有するようになるのかということを決断しなければならなくなってきました。

「協同生産者ネグデルというのを設立した結果，家畜もよく増える，家畜から得られる生産物もとても増える，その家畜の感染症や慢性病も治る。人の感染症，慢性病も治る。すべての子どもたちが学校に通える。学校を卒業した者，10年生で卒業した者，8年生で卒業した者は専門学校や大学に行って学ぶことができる。うちの子どもが教養を身につけることができるのだ」と言ってネグデルというのを設立するのが正しいのだと人びとは理解し始めました。これにとても関心を持つようになりました。

私有財産制では全国民の60～70%が貧者で，30%が中流かそれ以上の生活をしていました。その裕福な生活をしている数少ない人たちは，先に挙げた国の要求を達成することができません。貧しい70%を労働で協同させて初めて彼らに家畜，資産を持たせることができ，国の政策を実現できるのです。ですから人びとはネグデルを設立しよう，ネグデルに加入しよう，ネグデルの仕事だけをしようと言うようになりました。そのうちの5～10%はネグデルを好ましく思いませんでした。少し裕福な生活を送っている人びとは，その通りだ，ネグデルは正しいと言って手を挙げることはありませんでした。他方ネグデルに好意的な人は60～70%いました。ですから多勢に負けました。少数の一部の人が負け，こうしてネグデルが作られ始めました。こうして作られたネグデルの成員になるには次のような手続きで加入していました。当時の規則では

そうでした。

3.2 組合加入方法

25トゥグルグを支払います。まず私はネグデルに加入したいという内容の申込書を書きます。私はこのような生活をし，このような家族を持ち，このような家畜，財産を有する者であると自分に関して記入し，ネグデルに自分の意志で成員として加入する関心がある旨記します。その申込書をネグデル評議会幹部会議で審議します。ネグデル評議会というのは定員10人の評議会です。その会議で，

「この人はネグデルに加入したいと言っています。彼のネグデル加入を認めますか？」と審議します。

「この人は約100頭の家畜を持ち，6人家族です。父母，妻子がいます。ではネグデルの加入を認めますか？」という風に検討します。その会議に加入希望者を出席させます。ネグデル長たる私ミンジュールが議長を務めます。規則をよく説明します。

「さぁ，ネグデルの規則はこうです。君は50頭の家畜を個人の財産として残し，100頭の家畜をネグデルに提供するのですよ。では25トゥグルグの入会金を徴収します。ネグデルの成員となり，君はネグデルの家畜を放牧します。好きな家畜を放牧してよろしい。乳牛の搾乳を望むのであれば君に10頭以上の乳牛を与えますし，ヒツジを放牧したいのならば100頭以上のヒツジ，ヤギを与えます。ウマを放牧したければ種ウマやその他の馬群，すなわち20頭ほどのウマを与えます。ネグデルの家畜を放牧した報酬として君に労働日当を支給します。君に1労働日あたり何グラムの肉，何グラムの乳を支給します」というようにその人にネグデルが施すサービスを紹介します。その人は同意します。

「はい，それでかまいません！」と言って受け入れます。当時ネグデルを人民生産ネグデルと呼んでいました。当初，人民生産ネグデルの労働日当は常に現物で支給されていました。その幹部会議でネグデルに加入を希望する人は，

「私はこのような家畜を共有化します」と言って共有化する家畜の毛色，年齢，性別を書いてもらいます。そして25トゥグルグを支払います。それからどの家畜を放牧したいか意見を述べます。こうして幹部会議で加入許可決定を出します。1度の会議でたくさんの人について審議します。会議にかけられた人びとの名前を承認します。会議の議事録を作成しますし，また決議を出します。その決議はとてもきれいに，押印した形で作られ，その決議は現在でも文書館にすべて保管されています。自分の意志でという言葉がその申込書には必ず書かれていなければなりません。その申込書を読み上げます。「私は自分の意志で，人民生産ヤラルト・ネグデルに加入することを希望します」というように書かれています。こうして申込書によってネグデルの成員になります。

3.3 ネグデルの仕事

当時はネグデルの経理担当，ネグデル長，ネグデル出納担当といった役職がありました。現在のように獣医，動物学者はいませんでした。そのような人はいなかったのです。モンゴルにその専門家はほとんどいませんでした。特に農牧業ネグデルにそのような人材を派遣する余地は党にはありませんでした。そのような学校もまだ発展していませんでした。私は学校を出ていません。私ミンジュールは兵役の3年の間に文字ができるようになり，そして4桁の数，1000までの計算ができます。1000までの足し算はまちがえることなく計算でき，引き算も計算できます。かけ算，わり算はまちがえます。私ミンジュール・ネグデル長はこのような教養を有するだけなので，退役した，文字がわかり，中国の算盤で上手に計算ができる人をネグデルの成員の中から見つけ出し経理担当とし，また別の人を出納担当に就けました。そして成員の中から火夫と清掃人2人を採用しました。このような役職があったのです。

ネグデルの本部はゲルに事務所を置きます。倉庫といったものはありません。そして自分たちは少しだけ働いていました。するような仕事がなかったのです。ネグデルの家畜を放牧することを望むたくさんの人がいました。ネグデルの成員の中の貧しい人びとはネグデルの家畜を放牧します。ネグデルの家畜を放牧したいと言って取り合いになります。たとえば1度に10名あまりが加入した際，ネグデルには400頭あまりのヒツジ，ヤギが納められました。それを取り合って皆が放牧する希望を表明しました。そして彼らの私有財産として残っている家畜や生活の状況を見ながら配分してあげました。共有化した家畜にはネグデルの焼き印を押します。我がネグデルの焼き印は上向きの三日月でした。ネグデルごとに異なった焼き印を用いていました。またヒツジは左側の耳の後ろから耳標を付けていました。「矢筈の耳標」と呼びます。小型家畜は「矢筈の耳標」，大型家畜は三日月の焼き印をしました。ウマやウシに焼き印をします。ウシは蹄の上に，ウマは左側の太股の上に焼き印します。このように焼き印をし，目印をつけてから成員たちに家畜を配分します。こうなるとネグデル長は非常に敬意を表されるようになります。

「ネグデル長が私にヤギ15頭，ヒツジ40頭をくださった。これをうまく育て，毛をよく刈り取ろう」というやる気が起こるものでした。

ネグデル長は牧民たちに放牧地を指定します。当時党・政府からネグデルを発展させるために土地が配分されていました。「あなたのネグデルはこのようなところで活動しなさい！」と言って土地が与えられていました。この与えられた土地を牧民たちに配分し，指定します。「あなたの家はあそこで冬を過ごしなさい！そこで春を過ごしなさい！」，「あなた方はドルジ一家，ボルド一家，オチル一家の3家族で1つのソーリとなりなさい！ドルジがソーリ長となりなさい」と1から組織しました。ソーリ長は重要な義務を負います。冬営地，春営地の管理，運営に関して他の2人と相談し

て作業をさせます。ソーリは成員の老若，積極性の有無などに鑑みて組織します。こうして500頭ほどのヒツジで１つのソーリ，６頭の種ウマを有する馬群で１つのソーリといった具合に組織しました。こうしてソーリを組織して，放牧地を指定して，家畜を運んでやります。その後家畜囲いを建てる指示を出します。その人たちは牛車で丸太を運びます。当時のよかったところは樹木を伐採して囲いや井戸を作る作業に国が何の禁止もしなかったことです。自由に樹木を伐採し，家畜囲いを建ててしまいます。その３つの家庭からなるソーリではそのうちの一家庭が家畜を放牧します。３家庭あるので妻子会わせて10人ぐらいの人数となります。この10人のうち一部が家畜を放牧し，残った７〜８人が家畜囲いを建て，牧草を刈り，家畜の毛を刈り取ります。

乳製品も協力して作ります。ヒツジを搾乳し，乳牛を搾乳します。ネグデルの本部は次第に仕事が増えてきます。まず40リットルの容量の金属缶をたくさん買いました。１頭の牛車に４つの金属缶が積めます。出納担当が牛車に乗っていき，ソーリから牛乳を回収してきます。回収してきた牛乳を郡の中心地で150リットルの分離器をもつ乳加工機械で加工し，手でバターを整形します。郡の中心地で乳加工工場の従業員を雇うようになります。また主任が生まれます。そしてバター１kg当たり何々トゥグルグで国に販売します。国はそのバターを購入するためにネグデルに賞金やお祝いのメッセージなどで褒賞します。たくさんの家畜の毛を集めることができればまた褒賞します。このように，こうして成長し拡大していきました。

個人生産の時にはとても憔悴していました。とても貧しく，物不足で富者というのに対し私のように不満を抱いていました。ネグデルというのが出てくると次第に支持され，発展してきました。この間富者たちは少し疎外されるようになってきます。彼らの牛乳をネグデルは購入しません。ネグデルは家畜囲いを作ってあげないし，飼料を供給してくれません。すると，個人生産者はネグデルの悪口を言い始めます。ネグデルをとても悪く言います。流言をばらまき，ネグデルを土地から閉め出したり，追い出したり，様々な本性をむき出しにします。そしてすでにそのネグデルに加入した人たちの悪い噂が持ち上がります。おとなしくしていません。モンゴル・アルヒというお酒がモンゴルには存在していました。今もあります。昔もありました。アルヒを飲むと争いになります。食べた，飲んだと争いになります。

「おまえは金持ちだと言っているが，それが何なのだ！我がネグデルは素晴らしいぞ」というふうに挑んでいきます。

裕福そうな人を国は税金で，公的な食肉実行計画で，工場に乳を供する命令で締め付けます。彼らがネグデルの工場に牛乳を運ぶのはたいへんな仕事でした。食肉の実行計画を達成するのもたいへんな仕事でした。こうして富者たちは次第に生活する術をなくしてきます。国の税制により締め付けられ，ネグデルの規則に締め付けられる。ネグデルがその土地でかなり勢力を誇るようになり，大部分の地域にネグデルが広ま

り，ネグデルのソーリが生まれてくると，ネグデルは「見かけ上の金持ち」となってきます。このような状態でネグデルは発展していきました。それを管理するネグデル長たちは優秀でなければなりません。当時一部のネグデル長が酒を飲んだり，無責任な行動をとったりする事件が起こっていました。人はそれぞれ違うのです。また公正に働かなかったり，ネグデルの家畜に十分な配慮を怠ったりします。またネグデルの家畜を損失させたり，計画を達成できない状況を発生させたり，乳加工工場を十分に稼働できない状態にしたり，一部のネグデル長はネグデルをあまり発展させることができなかったことから国がその貧しいネグデルに対して助成金，融資を交付しました。そして，そのネグデルは助成金や融資の債務に陥ってしまいました。すると債務を支払うために家畜に手を出します。家畜を売却します。そして家畜が増加しません。労働日当をネグデル成員に定期的に支払えなくなります。ネグデルの成員はネグデルの生産活動の成果で得た所得によって給与を受けるべきでした。こうしてネグデルの中でも明暗が分かれてきます。

3.4 ネグデル長の任命

私は1955年にネグデルに赴任して以降21年間ネグデル長を務めました。国から融資や助成金を受けたことはありません。ですからたくさんの勲章，褒賞を受けたのです。私がムルン郡に赴任するとネグデルの成員は10%に達したところでした。家畜，財産といえるようなものはありませんでした。ネグデルが組織されてから，手法をわきまえて発展させることのできる長がいなかったのです。党が意図的に幹部たちを解任してからネグデルは発展しました。私は任命を受けて故郷の郡にやってきました。私と一緒に県の党委員会から１人の人が一緒に赴任しました。

任命を受けた130人のうち，アルハンガイには14名が赴任しました。アルハンガイは約20のネグデルがありました。私たちを県の党委員会の人びとが出迎えました。県の党委員会委員長はD.アディヤー，県知事はS.ダシデンデブという２人でした。県の党委員会の局がありました。たくさんの人が局のメンバーでした。彼らが会議をし，私たち１人１人をとりあげて審議するのです。

「さて，どのネグデルにこの人を配属しようか？」と審議します。

そして「ミンジュールをムルン郡のヤラルト・ネグデルに配属しよう！」と決定しました。そして，「ムルン郡のヤラルト・ネグデル長に任命する」という県の党委員会の局の決議が出されました。私は県の党委員会の代表に連れられて，あのムルン郡に赴任しました。そして赴任してみるとかわいそうな状態の悪い何軒かの貧しい家庭だけがネグデルの成員となっており，１つの汚いゲル以外には何もなく，何頭かの疥癬を患った黒いヤギがいるだけで，家畜，財産といったものは何もありませんでした。いる家畜は最低の家畜でした。当時人びとはよくない家畜をネグデルに渡していました。

そこに赴任すると，ネグデルのほかに郡の役所がありました。郡の党細胞長，郡の首長はそれぞれ忙しい人びとでした。彼らは例の個人生産者たちを指導し，方針や目標を示し，ネグデルとはそれほど関係していませんでした。その長たちはネグデルをそれほど重視していませんでした。そこでのもう1つのたいへんなことは，その郡の首長，党細胞長が郡のすべての牧民や個人生産者たちを対象として公務をおこなっていたことでした。そこではネグデルというものに関して郡の首長や党幹部たちの一部が好ましく思っていませんでした。支持していませんでした。そして赴任して会議がおこなわれました。会議が始まるとミンジュールがヤラルト・ネグデル長として着任したことが発表されました。私が故郷に着任したにもかかわらず，故郷の人びとは戻ってきたといって喜んではいなかったでしょう。でもネグデルの何人かの貧しい成員は喜んだかもしれません。ともあれネグデル長が着任したと考えたことでしょう。貧しい私たちを我がネグデルが生活を向上させてくれるだろうと喜んだはずでしょう。しかし，裕福な人びとや幹部たちは支持せず，あまり顧みませんでした。幹部たちは時にはその富者たちの側に立って話をしていました。

会議が開かれました。その会議で県の党委員会の代表が問題を審議させました。「さぁ，ミンジュールという者が任命を受けました。党の学校を卒業した人です。ロシアのブリヤートにいって実習をしてきた人で，ブリヤートでコミューンを見てきた人です。ミンジュールの給与は国が支給します。ネグデルは払いません。国が初年度は1000トゥグルグの給与を支給します。ですからネグデルから給与はもらいません。ミンジュールはあなた方のネグデルを向上させることができるだろうと思います。あなた方のネグデル長にミンジュールを選んでもらうために来ました」と言って，続くすべてのことを私に話させます。その会議にはその郡の党細胞長，郡の首長が出席しています。そして私に質問がされれば私は答えなければなりません。そして質疑応答がおこなわれます。主な質問はネグデルに新たな成員をどうやって加入させるか，どれくらいの人を加入させる考えなのか，ネグデルは何をおこなうのか，ネグデルの成員をどうやって裕福に暮らせるようにするのか，彼らに家畜を与えるのか，あなたはどのような考えなのかといった質問でした。よく話します。私がヤラルト・ネグデルを引き継いだ時，10軒ほどの有名な貧しい家庭が成員でした。10頭ほどのラクダを所有し，そのほとんどが疥癬を患っていました。ラクダは簡単に疥癬にかかるものなのです。ヤギが主で200頭ほどの家畜がいたでしょうか。ウシなどはいません。それだけです。自分たちのものといえる土地もありません。何頭かの家畜とともに，ネグデルの成員がある場所に宿営すると，例の富者たちが追い出して先に進ませてくれません。ヤギとともに追われながら移動します。こんな感じです。それに関して質問をします。

3.5 ネグデル長の使命

ネグデル規則があります。その会議で話し合うのです，すべてを。ネグデル規則をその会議で採択します。その規則を中央で作ってきました。それをヤラルト・ネグデルの状況に合わせた表現にします。その会議でネグデル長，経理担当，筆頭成員といった7, 8, 10人ぐらいの人を承認します。規則を採択します。50頭の家畜を所持してよい。それ以上持っている場合はどうするか，そのような問題が出されます。ネグデルの成員をどこに住まわせるか。たとえばジグジドという家を持たない，20頭あまりのヤギを飼いながらチョグチ冬営地に住んでいる1人の女性がいました。

「彼女のヤギの家畜囲い，飼料をどうやって支給しようと考えているのですか，あなたは？国からお金をあげるのですか？」という質問をします。私たちは主にネグデルが自分自身を発展させていくということを答えます。「国からはそのような助成金，融資は交付されず，ネグデル長の給与だけが支給されます。私は，今は自分のゲルを持ち，ウマに乗るためにつける鞍を持ち，国から給与をもらっている者です」と言います。これはとても偉い人であるということです。「1000トゥグルグの奴」といったあだ名が生まれました。当時ネグデル規則を作成する国家委員会の委員長はYu.ツェデンバルでした。たくさんの専門の人びとが参加し，何度も作り直して政治局でも何度も審議をして採択した規則なのです。その規則のひな形をアルハンガイ県に持っていって，県の状況に合わせて非常にたくさん修正します。それを私たちはヤラルト・ネグデルに合うように表現を変えて書くのです。私は国家規則を作成するときにもよく参加していました。「アルハンガイ県，ムルン郡人民生産ヤラルト・ネグデル規則」という名前の規則になりました。他のネグデルの規則と特に異なることはありません。「人民生産ネグデルを発展させ，共同生産の長所を個人生産者に信用させる」というのが主な趣旨でした。共同生産の長所を個人生産者に信用させるというのが主な趣旨でした。それをどうやって信じさせるかといえばその個人生産者，裕福な個人生産者よりもネグデルがよりよい仕事をして信じさせるしかありませんでした。そのときに個人生産者たちは降参するはずです。

「おぉ，協同生産というのはこのような面で私たちよりも優れているのだな！」と考えて初めて富者はそのネグデルに加入するはずです。そしてそのような状態でネグデルに人びとを加入させていきました。それが続くのです。「ネグデルに加入したい！」という申込書が絶えることなく来ました。それを調べた上で受領します。そしてネグデル評議会幹部会議で審議する日付を伝えて返します。また申込書を読んでその場で直させます。

「おい，この君の申込書に『自分の意志に基づいてネグデルに加入する』という言葉がありませんよ。書き直してきなさい！」と言って返します。また「君は共有化する家畜を年齢，性別ごとに書く必要があります」という助言を与えます。

「ウシ5頭を供出すると君は書いています。この5頭のうちの何頭が乳牛で，何頭が種ウシで，何頭が2歳ウシで，何頭が1歳ウシなのか，子ウシの何頭が雄，何頭が雌なのか，君はこのすべてをもう1度書いてきなさい」というように申込書を書き直させます。文字を知らない人びとがたくさんいたため，彼らは小学校の先生たちに書いてもらいます。ネグデル加入の作業はこのように継続し，ネグデルの家畜も増え続けていきました。ネグデルが国に対して負う義務が増大していきました。上から国が見ているのです。私ミンジュールの後ろから見ているのです。ミンジュールに1000トゥグルグの給与を支給している。ヤラルト・ネグデルをどのようにするのだろうか？と観察しています。そこには把握しておくべきいくつかの特徴がありました。

ネグデルの長所を個人生産者たちに対して模範を示すように留意すること，ネグデルの家畜によってソーリを正しく組織すること，ネグデルの家畜をうまく放牧できる牧民に与えることが必要です。優秀な牧民，そうでない牧民をうまく組み合わせる必要があり，放牧地を正しく指定して家畜囲いを建てることに留意します。家畜に対しては次のことに留意します。種付けのできる雄家畜，雌家畜に非常に注意します。特に雄家畜です。かつてこの問題は非常に無秩序でした。ですから我がネグデルのヒツジをどの種ヒツジで種付けするか，この何頭かのウマにはどの競走馬や側対歩の種ウマをあてがうか，この雌ウシにどんな毛並みのよい，おとなしい種ウシをあてがうか，このヤギをどの種ヤギで種付けするか，このようにした結果，どんな子ヤギ，子ヒツジ，子ウシが翌年生まれるか，といったことをよく計算します。

当時は動物学者がいませんでした。獣医もいませんでした。ネグデル長の頭の中にすべてがありました。動物学者，獣医，農学者のすべてをネグデル長が代行するのです。ネグデルには党員がたくさん加入しました。ですからネグデル内に党細胞を設立しました。党細胞長を有するようになりました。それはまた非常に重要なこととなりました。2人で力を合わせて仕事をおこないました。郡の党細胞とは別でした。

3.6 学校寮の建設

私はいくつかの仕事により4〜5年の間でとても有名になりました。郡の学校の寮を建てました。我が郡には200人ほどの生徒を有する小学校がありました。彼らのほとんどは貧者の子どもたちでした。彼らは子どもたちを学校に通わせることができません。居候させて通わせました。学校で十分に学ぶことができませんでした。ウマで来て授業を受けて夕方帰ると，翌日来ることなく不登校になってしまいます。その小学校にはそのような大きな苦労がありました。ですから我がネグデルは最初に建物を建てることにしました。最初にいくつかのゲルを建てて，子どもたちを寮に住まわせました。ゲルに木製のベッドを置き，そこに住まわせました。その小学校には国が生徒の食費を補助していました。「愚者はちょうど真ん中を（愚者は良し悪しがわからず平

均を取る)」という言葉があります。愚者は合わせようとします。私は比較してよく考える人間です。他人のことを考えるにはまず衣食住すべてのものを供給する必要があります。若者たちにお腹いっぱいになるまで食事を与えてから仕事に向かわせるととてもよく働きます。心地よい軽い音楽のメロディーで素晴らしいホールで踊らせて仕事に向かわせることでもまたたくさんの力が出せます。

「ネグデルの成員の68人の子どもが学校で学んでいますが，その68人の子どもの食事を私が負担しましょう，燃料，暖房を私が負担しましょう。あなた方は勉強させることを担当してください！」と郡，学校の幹部と話しました。こうして68人の子どもたちへの国の補助金をネグデルがもらうことになりました。県の教育課，県の幹部たちはこの提案を大いに支持していました。

「ミンジュール，君は本当に正しいことをおこなっている！」と言っていました。そしてゲルを建て，木製ベッドを置いて，そこに火をたく火夫と警備員を配置し，補助金を使ってその近辺に1つの建物を建て，68人の子どもたちが食事をする食堂を作りました。その食堂ではジャガイモや野菜を出すのですが，人びとはジャガイモや野菜を食べないのです，汚いものだと言って近づかずまったく食べません。子どもたちに臓物，ジャガイモ，カブ，ニンジンなど様々なもので食事を作り与えて，またネグデルの成員をコックとして配属しました。そしてネグデルの成員たち自身が食事をする場合はお金を払って食事をするのです。国が支給した補助金が4万トゥグルグであったと考えると，これらすべてを実施するのに3万トゥグルグを費やし，1万トゥグルグの余剰分をネグデルが受領します。計算するべきですよね。この仕事の噂が広まりました。

「ミンジュールはネグデルの成員の子どもたちを寮に無料で住まわしている，無料で食事を与えている。全国規模でこの活動を実施しよう」と新聞に書かれて，たいへんな騒ぎになりました。私のこの考えに基づいて初めて閣僚会議の決議が出されて学校の生徒たちの寮が作られました。私が発案して有名になったことはこれです。国はこれを支持し閣僚会議決議を発してすべてのネグデルに学生寮を作り，寮の生徒たちの食事をネグデルが無料で負担することになりました。我がネグデル長たちは時折私に絡んできたものでした。

「君がまったく無駄なことを発案して・・・学校の生徒たちの寮での食事を負担するというとんでもないことが頭に浮かぶとは。この緑眼のミンジュールめ，殺してやる！」と言ってからんできます。

不思議ですよね。これは人生のとても不思議なことです。これにより私は第2回教員大会に代表として招待され参加しました。立派な重要な発案をしたと評価されました。これは本当に多くの人の注目を引いた活動でした。当時ネグデル長は大衆の注目を引き，大衆の間で有名となり，国に非常に多くの成果がありそうなことを発案して

実行する必要がありました。自分のところに集中してくる資産はこのように利用する必要があります。それを現在の富者たちのように自身の懐に入れてしまうことがあってはなりません。それで国にとって価値のある，利益のあることをするべきです。

3.7 宿泊施設の建設

2つ目にかつてネグデルに県の党委員会の代表者が訪れると党細胞長のところに宿泊し，県知事が訪れれば郡の首長のところに宿泊していました。農牧業大臣が訪れればネグデル長のうちに宿泊します。ホテルやレストランが地方にはありませんでした。私は郡に代表団を受け入れるホテルを作りました。

部屋が10室ほどあり，レストランを有するホテルを作りました。あなた方が行けばそこが受け入れます。そこに宿泊してもらってベッド代を徴収し，食堂で食事を取って食事代を払ってもらいます。これはネグデルに適度な収入をもたらし始めました。ネグデルは国に有益で，国の負担を軽減し，ネグデルに収益をもたらすすべてのことを考え，発案する必要がありました。ネグデルのホテル，食堂というのを作り，その食堂で寮の生徒たちに食事をさせるようになりました。そして補助金をもらいます。賓客，代表団が来ればそのホテルに宿泊してもらい，1日1トゥグルグ50ムングをいただきます。当時のレートでですよ。5日宿泊すれば7トゥグルグ50ムングになります。食事代は1日3食，40〜50ムングでおいしい料理を出します。ネグデルに来た客は大喜びです。他人の家に泊まるのはたいへんです。ホテルに宿泊し，出来合いの食事を食べ，仕事をおこなうのにとても便利になりました。大騒ぎになりました。

「ミンジュールが郡にホテルを作り，食堂を作り，県やウランバートルからやってきた人びとをホテルに宿泊させるようになった！」と新聞，雑誌に書かれてたいへんな騒ぎになりました。

3.8 野菜栽培

それから私は野菜を栽培することを決めました。最初にジャガイモを栽培することにしました。そのころ国はネグデルにジャガイモを栽培する指針を示していました。私の故郷は高山地帯であるため，あまりよく育たないだろうと考えていました。我が郡の中心地のそばをバヤンジャルガラント川という川が流れていました。その川の近く，ムルン郡の中心地のそばに少し窪んだ土地がありました。そこでジャガイモを栽培しようと決めました。県の中心地にいってそこからジャガイモの種を何袋か買って，例の小さな土地にすべての成員を集めて，シャベルで掘り起こしました。ネグデルは20〜30人が成員となっていました。私は成員たちに，

「シャベルを持ってきなさい！土地を耕してジャガイモを植えます！」という通知をしました。そしてシャベルで掘り起こしました。掘り起こした土は砕いて鍬で耕さな

ければなりませんよね。そこにウマを追って連れて行き踏ませました。人びとはその土を砕いて踏みます。こうして植える農地を整えました。1ヘクタールほどの土地です。私自身が植物学者になります。植える際に私自身が指導してそのジャガイモを服の裾で包んで運びます。そしてシャベルを踏んで穴を掘り，その穴に1つずつジャガイモを入れていきました。20センチの距離をあけます。そのように植えて，ジャルガラント川から畑の方に溝を掘って水を引き，畑の辺りに小さな溜め池をつくって，そこに水を満たして大勢でバケツを使って汲んでは撒いて1日に2〜3回水をやりました。当時雨がよく降っていました。雑草が生えます。雑草を抜いて捨てます。私たちのジャガイモはとてもよく育ちました。ハンガイ・ネグデルやタリアト・ネグデルではジャガイモを植えたけれども育ちませんでした。

秋に県の党総会が開催されました。その総会で各ネグデルのジャガイモの栽培について話し合われました。党委員会委員長の演説でこの問題が言及されました。

「ムルンのヤラルト・ネグデルはジャガイモを植え，非常にたくさんの収穫が得られました。ネグデルの成員の労働日当としてジャガイモを分配しました。ホテルを建て，寮の生徒たちの食事にジャガイモを出すようになり，子どもたちは今ではジャガイモを食べられるようになっています！」と発表しました。その会議上，ハンガイ・ネグデル長であるダシデンデブという人が演説しました。

「私たちのジャガイモはこんなに小さいのです。ミンジュールの『ジャガイモ』(暗に睾丸も意味する）はこんなに大きいのです」と握った拳を示して話しました。こうして私は冗談のネタになりました。

そのような大きな会議でジャガイモについてこのように大々的に話し合われていました。こうしてジャガイモを栽培したことについて新聞，雑誌上で大きな話題となりました。ジャガイモを栽培することに成功し，学校の生徒たちにジャガイモを使った食事を与えている。来客があるとジャガイモを使った料理を出すようになったというように書かれました。それまでジャガイモはアルハンガイ県にはありませんでした。そのような珍しいものが出てきたのです。そして新聞に大きくとりあげられるようになりました。「ミンジュールのジャガイモは大きい」と一部の人がからかうようになりました。ジャガイモを収穫しました。秋の労働日当を配分することになりました。当時仕事を日数で評価していました。現在はお金で評価するようになりました。当時は1労働日に対して，たとえば1〜2キロの肉，2キロのジャガイモ，4キロの乳製品というように計算し支給していました。そして労働日当を配分する際にネグデルは大会を行っていました。大会に出席する際，全員が牛車で行きます。そしてそのジャガイモ，肉，乳製品を持って帰ります。そして若干のお金を支給します。そのお金で消費者組合から小麦粉，米，お菓子を買って帰ります。ネグデルの成員は大喜びです。さて当時一部の裕福な人びとに対して意図的にジャガイモをあげていました。

我がヤラルト・ネグデルの本部はオラーン・ウズールという場所にありました。人びとはウマに乗ってジャガイモを積んだり，鞍ひもにぶら下げたりしていきます。ラムスレンという裕福な人がいました。ムルン郡で最も多くのウシを所有していた人です。100頭ぐらいのウシを所有していたはずです。彼に私は意図的にジャガイモをあげました。こうやって食べます，とても美味しい，ビタミンが豊富で体にいいですよ，と話してあげました。

「ええ，もちろん食べますよ，ネグデル長！ありがとう！」と言って袋に入ったジャガイモを鞍に下げていきました。しかし，その人はジャガイモを道すがらこぼしながら捨てていったのです。その道はジャガイモで埋まりました。ラムスレンさんが鞍に下げていたジャガイモをオラーン・ウズールからの道すがらこぼしながら捨ててしまったといって大騒ぎになりました。私はこのことを自著に書きました。モンゴル人はジャガイモをまったく食べませんでした。とても疑っていました。パサパサしていてまずいと話していました。本当は，特段に味はありませんよね。ウシや家畜も食べません。私たちは寮の生徒たちに食事をさせる食堂を作ったと先にお話ししました。そこではまた県の中心地やウランバートルから来た人びとに食事を提供していました。県の中心地やウランバートルから来た人びとの一部はジャガイモを嫌がりました。こうしてジャガイモを栽培したことは，新聞や雑誌に取り上げられとても有名になった活動なのです。

3.9 手工業の発展

社会主義労働ブリガードという問題がありました。

鉄道労働英雄のG.マンダフという人が最初に提案しました。ムルンでもそのようなブリガードを設立しました。そこではたくさんのことをおこないます。私たちのところではレンガを作るのによい土があり，水があり，また石灰を作るのであれば石灰岩がたくさんありました。ですから，私は昔庫倫のガンダン寺院で暮らしていて還俗して故郷に帰っていた人びとの中に，バリオルという人を見いだしました。ウランバートルにいるときにレンガ工場で働いていたそうです。またガンダン寺院で宗教活動をし，還俗したオラムバヤル・ディバーンナムサルという人がいました。ネグデルの成員は自分たちで石灰を作るようになりました。お金の稼げるものだけを私たちは探していました。石灰を作って売るようになりました。レンガを作って売るようになりました。近隣のネグデルに販売するようになりました。融資をもらわず，助成金をもらわないというのはこのようにしていたおかげなのです。

私たちのところにはさらに木工職人，金属細工職人の優秀な人たちがたくさんいました。貧しい暮らしをしていました。彼らの力を利用し食器，箱，ゲルの骨木，小さな椅子など様々なものを作らせました。それをネグデルの成員に売ります。

当時「文化攻勢」という活動がおこなわれていました。各家庭に椅子を備えさせようとたいへんな仕事になりました。人が家に入ったときに地べたに座らせることなく，必ず椅子に座らなければならないと言われるようになっていたのです。ですからネグデルは椅子を作って成員に売ります。ネグデルの成員がよその家に行った際に椅子の上に座るようにさせます。それがとてもおもしろいのです。各家庭が椅子を備えるようになったととても話題になり，新聞に取り上げられました。文化的になったと褒められました。金属細工職人にも仕事をさせます。鉄が入手できません。私はウランバートルでゴミの中から様々な鉄くずを拾って持っていってあげます。彼らは鉄を受け取り大喜びします。それでナイフを作ります。その金属細工職人たちは様々なものを作ります。特に食事の時に使うナイフを作ります。当時はナイフが手に入りませんでした。また錠前を作ります。様々なものを作ります。私たちは作ったものを小さな売店に並べて売ります。ネグデルの本部にそのような売店を作りました。新聞に取り上げられます。「ヤラルト・ネグデルは商店を設立した。」商店でナイフ，錠前などを売っていると。我がネグデルの金属細工職人が私に１本のナイフを作ってくれました。このナイフは塩ゆで肉を食べるのにとても便利でした。ネグデル長はカバンにお金を入れるのでカバンに鍵をかけるためのこのような錠前を作ってくれました。とても文化的できれいに作ってあります。単純な粗雑なものは作りません。こんなにすごく繊細なものをモンゴルの金属細工職人たちは作ることができていたのです。そこに模様を入れ，銀で装飾が施してあります。これはその土地の柳という木を使ったものです。鍵付きです。このような真鍮でメッキした上に模様が入れてあります。
「ネグデル長，カバンに鍵をかけていてください！」と言って作ってくれました。このようなものを売店で30～40トゥグルグ，10～20トゥグルグで販売します。昔は10～20トゥグルグといえば大金でした。ヒツジ１頭が20～30トゥグルグぐらいの価格でしたから。このように様々なものを作り，ネグデルの家畜は増え，家畜の生産物をたくさん回収しました。

さらに石灰を作り販売し，レンガを作り販売し，木工職人，金属細工職人がこのようなものを作り，ゲルの椅子など様々なものを作ります。お金に換えます。お金になる仕事をたくさんしました。後には車や機械を所有するようになり発展しました。最初はいつも牛車で仕事を行っていました。ネグデルはこのような形で発展しました。ネグデルはこのような形で生まれました。現在一部の人が言っています。私有財産制で豊かであったものを社会主義時代に人民党の力でネグデルに加入させ，財産を接収してしまった，そして無一文にしてしまったと言います。事実は1990年までネグデルがすべてのものを担って初めて，国の負担をネグデルが負担して初めて国が発展したのです。それを人びとは歪曲し，中傷しています。ですから私は今よく語っているのです。

「ネグデル化というのはそんなにまちがったことだったのですか？ネグデル化を，先駆者として，それを一手に行ってきた人のうちの1人が私です。あなたたちはあちこちで人を捜す必要はありません。そのネグデル化を訴求するのであれば私を捕まえて訴求しなさい，私はここにいますよ」と民主化の様々な話が出てきたときにそう私は叫んでいました。

私がやったのです，今さら何を隠しましょうか。最初の先駆者はもう私だけなのです。私が死んでしまえば，これについて語る人が誰もいなくなってしまいます。誰も知りませんよ。ええそうなのです。

3.10 イフ・タミル郡「輝ける道」ネグデル

1959年にネグデル化運動が勝利した後，国はネグデルの削減をおこない，大規模化しました。少数の大きなネグデルとなりました。かつては1つの郡に2, 3のネグデルがありました。このときすべてを改組し，郡に1つのネグデルとしました。こうして郡に1つのネグデルとなり，我がヤラルト・ネグデルはタリアトと合併しました。アルハンガイ県のイフ・タミル郡というのはゲレルト・ザム・ネグデル，ボガティン・バヤン・ザム・ネグデル，ハノイン・タイヒルのゲレルト・ザム・ネグデルの4つのネグデルを統合し，1つのネグデルに再編成しました。ボガト郡，タイヒル郡，イフ・タミル郡が合併して1つの郡とし，3つのネグデルを合併させて1つのネグデルとし，こうして郡ごとに1つずつのネグデルとすると同時に幹部たちを交代させました。私はムルン郡がタリアトに併合されて以降，イフ・タミルのゲレルト・ザム・ネグデル長に任命されました。ネグデルが巨大となり豊かになった時期でした。1961年に着任しました。ゲレルト・ザム・ネグデルというのはとても大きなネグデルでした。私は大きなネグデルを引き継ぎました。そのネグデルの歴史を書かせました。M.ダシという人が党歴史研究所に務めていました。素晴らしい学識を持った人たちに書いてもらいました。

この写真にゲレルト・ザム・ネグデルの最初の成員，サンドイジャブという人が写っています。この人は草刈り鎌で牧草を刈り，県の優勝者となった人です。草刈り鎌で牧草を非常に上手に刈り取る人でした。

L：最初の学校は1919年に現在のハンウンドゥル・バグに設立されました。

M：そうです，現在のハンウンドゥル小学校は1919年に設立されました。

L：これはあなたがゲレルト・ザム・ネグデルで働いていたころの写真ですか？

M：そうです。

L：ここに労働英雄R.ミンジュール，あなたの写真があります。

M：そのころは写真があまりきれいに写りませんでした。出版は写真，紙，印刷の状態がとてもひどかったです。現在のようにきれいではありません。

L：これは1970年に出版された本です。さて，イフ・タミル・ネグデルをいったいどのように国の模範的協同生産者に育て上げたのですか？そのことについてお話しいただけますでしょうか。地図上ではイフ・タミル郡の中心地がここです。ここにタミル川が流れています。川の傍にはかのタイハル岩があります。

M：私がそこに赴任する前，そのネグデルには頭のよい優秀な人がネグデル長を務めていました。そのネグデルは家畜も多く，それらは順調に増加していました。国の示した家畜の実行計画を十分に達成していました。ですが注意すべき点は家畜がたくさんいたけれども貧しい人もたくさんいたことでした。その郡は10年制学校，郡共有総合病院，ネグデル共有工場，たくさんの消費者組合，公共機関を有するとても大きな郡でした。しかしムルンのヤラルト・ネグデルとの間にはたくさんの相違点がありました。運営にあたっては別の方法を用いなければなりませんでした。ヤラルト・ネグデルは小学校が１つあっただけなのです。私は国の補助金により学校の生徒たちをネグデルの食堂で食事させていました。タミルのネグデルには1000人ほどの生徒を有する10年制学校があったのです。ここでは大規模なネグデル共有工場が稼働していました。

K：ネグデル共有工場では何を製造していたのですか？

M：ネグデル共有工場というのはネグデルの家畜囲いの建設，野菜の栽培，ネグデル用の建築物の建築などをおこなう，建築を主とした工場でした。ムルンのヤラルト・ネグデルと比べるとたくさんのインテリ，動物学者，農学者，獣医たちが働いていました。ですから私にどんな役割が与えられていたかというと，まず数多く家畜を増加させ，計画を達成してきた伝統を途絶えさせてはなりませんでした。２つ目にはヤラルト・ネグデルの人びとを驚かせていたミンジュールのジャガイモをそこで大量に栽培する必要がありました。そのジャガイモ，食用野菜，さらに家畜用の植物飼料をたくさん栽培する必要がありました。そのためにはトラクター，コンバインを購入する必要がありました。また発電所，ディーゼル発電所を設置し電気を引く必要がありました。多くのインテリたちと上手に協力する必要がありました。たくさんの専門家たちの心を引きつける仕事を作り出し，彼らと上手に融和し，ネグデルの活動を連携させて仕事をする複雑な知恵を働かせる必要がありました。彼らによく働いてもらうためにはまず人間関係を，次にその他の仕事について考える必要がありました。

家畜頭数は実行計画を上回っていました。これは私には大きな財産となりました。私に仕事を引き継いでくれた前ネグデル長が，このようなチャンスを与えてくれたのです。こうして私は余剰の家畜を売却することから始めました。余剰家畜を売却する際，価格を根引きして教員，労働者，インテリ，その他の専門家たちに売りました。その人たち自身の希望により，５頭と言われれば５頭，10頭と言われれば10頭のヒツジを売ってあげました。当時すべての家庭ではヒツジを屠殺して食べ，

「このネグデル長は食事を本当に十分に与えてくれるなぁ！」と言っていました。このようにそれらの人びとと融和していきました。そこでは春に非常に多くのジャガイモ，野菜を植えるようになりました。学校，病院，学校の寮をネグデルがすべて管理するようになりました。学校の寮には600〜700人の生徒が暮らしていました。彼らのすべてに食事をさせていました。このたくさんの子どもたちに食事を与えるのには野菜，肉，乳製品が必要でした。ですから，モンゴル乳製品を集中的に製造する必要が生じました。また農耕を機械化し，多くのトラクターや自動車の運転手を雇い入れました。自動車車庫が独立した大きな組織になりました。

ボガトの「バヤンタル・ネグデル」，ハンウンドゥルおよびイフ・タミルの「ゲレルト・ザム・ネグデル」という2つのネグデルがありました。その中間のタイハル岩の傍にタイハル郡の中心地がありました。両側のネグデルを合併して「イフ・タミル」，「ゲレルト・ザム」という名前をとって「イフ・タミルのゲレルト・ザム」という名前をつけました。彼らは相互間で少し仲が悪く，「うちは」，「お宅は」という話が尽きず，お宅のゲレルト・ザム・ネグデル，お宅のタイハル・ネグデル，うちのボガト・ネグデルと言います。互いに和睦させ，いがみ合う考えを持たせないためにボガト郡にあった施設を復活させ，そこに商業，消費者組合を発展させ，そこにもネグデルのブリガードや娯楽施設を，そこにも芸術や芸能を発展させるよう目指しました。

そこのブリガード長，記録係などの人びとのための事務所を作り，また往来する人びとを宿泊させる建物を作りました。そこに資金を投じて，建設作業員たちを招じて建物を建てさせました。その結果，ボガトのバヤンタル・ネグデルはかなり自立し，そこで家畜を育てて繁殖させることが可能になってきました。ここで私は，人びとの気持ちを第一に考えて働きました。それが大いに当たりました。これによって10年制学校の多くの教員たちや専門家たち，また県やウランバートルから来た多くの人びとと意を通じて働けるようになりました。学校のたくさんの生徒たちを畑で働かせるようになりました。また採草地，家畜の冬営地，春営地の準備作業などでも働かせるようになりました。学校の寮の生徒たちに質のよい食事を与えるようになりました。ネグデルは家畜の乳を十分に利用して乳製品をたくさん作るようになりました。牛乳運搬用のタンク車を買いました。そして牛乳を運搬し，郡の中心地に牛乳を供給しました。牛乳のない家庭に牛乳を提供し，乳製品のない家庭に乳製品を提供するようになりました。貯蔵庫に乳製品を保存し，子どもたちに乳製品を十分に与え，椀にアーロール，エーズギーを入れて与えるようになりました。

ジャガイモ，野菜を収穫して子どもたちに与えました。ジャガイモで使った料理が作られた段階でネグデル長が行って調べます。食事の味を見ます。学校の生徒たちの寮は暖かいかどうか，ベッドや布団はきれいで快適かどうか，生徒たちの食事は美味しいかどうか，といったことをネグデル長自ら調べる必要があります。そうして，そ

この欠点を見つけ出す必要があります。見つけ出した欠点を書いて机上に並べておいて学校長を呼びだします。

「私はお宅の学校に行きました。お宅の学校はこのような食事を与えています。この美味しいジャガイモ，カブでこんなにまずい食事を作って与えています！お宅の寮のベッドを見ました。シーツが汚れています」と話すのです。人と働くには，人のことを考えるにはまずお金，給与を決まった時期に支給する必要があります。食べる食事を配分すべき場所に十分に配分しておく必要があります。なすべき仕事をその長である者がよく把握しておく必要があります。

誰が何を担当しているかということをよく把握し，欠点を見いだして書いたものを机上に並べておいてその人と話します。無駄に無為にその辺りを走り回り，叱責するならばそのネグデル長は悪く言われます。当時は，郡の首長とネグデル長は同義になってしまっており，かなり強い権力を持つようになっていました。ネグデル長の話というのは郡の首長が話しているのと同意で，現代で言うところの市長の話ということになるのです。そこではこのような状態で働き始めました。

3.11 牧畜の改善

仕事の中で家畜の品種，品質を改良するためにかなりの活動をしました。私たちはネグデルに中細羊毛の工場を設立しました。羊毛を極細毛，中細毛と分類していました。その中細毛のヒツジを飼うようになりました。よりたくさんのカシミア毛のとれるヤギを飼うようになりました。また1日5～10リットルの乳を搾ることのできる混血種のウシを飼うようになりました。

我がネグデルでは1000頭の乳牛がいたとすると，そのうちの約100頭を混血種としました。ゲレルト・ザム・ネグデルは6000人の成員がおり，15～16万頭の家畜を保有するネグデルでした。ですからその15～16万頭の家畜の約10%を品種改良した家畜にしたのです。その他のは在来種のままにしておくことを目指しました。学者たちもこのような比率を是としていました。家畜の品種改良作業を牧畜業学術研究所と協力して行っていました。そこの学者たちとネグデルはなすべき作業を分業します。ネグデルは品種改良する家畜を選別します。学者たちは選別された家畜の中から，たとえばヒツジからある程度の数のヒツジを選別します。それを中細毛の種ヒツジと交配させます。そして第一世代としてこのような子ヒツジが生まれるということを教えてくれるのです。このように家畜の品種改良をしました。イフ・タミル郡はこの仕事で有名になりました。そのほかに有名になった仕事は家畜の家畜囲いの整備，飼料の供給，飼料備蓄庫の設立などの仕事があります。大きな寒害が起こり，家畜が家畜囲いから出ることができないたいへんな状況に陥った際，5～10日間家畜を飼養することのできる飼料を作るようになりました。全国的に我がイフ・タミル郡の家畜囲いを見学し，

それを模範として作るようになりました。それは牧畜業に対する大きな措置でした。
K：そのネグデルでは家畜囲いをどうやって建てていたのですか？家庭ごとに，ソーリごとに自分たちの家畜囲いを作っていたのですか？
M：それはネグデル成員たちの力でおこなわれた仕事です。当時ネグデルは自動車やトラクターを有し，機械を有し，人の労働力が充実していました。ネグデルの本部にある様々な公的機関に家畜囲いを建てる任務を与えていました。たとえば自動車車庫職員一同は家畜囲い3つ建てなさい，学校職員一同で2つ，病院職員一同で2つ，郡共有工場職員一同で5つの家畜囲いを建てなさいという任務を与えます。家畜囲いを建てる公的機関には食事，乗り物をネグデルが提供します。

ネグデルのブリガードにも同様の任務を与えます。彼らは大きな家畜囲いを自分たちで建てます。国は木材を十分に惜しみなくくれます。私たちのネグデルは樹木の中に存在していましたので家畜囲いを建てるのにはとても恵まれていました。素晴らしい家畜囲いを建てていました。
L：その家畜囲いを建てる場所はどうやって選んでいたのですか？
M：それは牧民たちと話し合って選びます。ブリガードで会議をおこないます。ブリガードの牧民たちを集めて彼らから意見を聴取します。家畜出産拠点をどこに建てるか。混血家畜牧場をどこに建てるかなど意見交換します。

「では『アル・エレグ』に建てよう」とか，「『シャナート』に建てます」とか。このように場所を決めます。それだけでなく建てようとしている家畜囲いのひさしをこちらに向けるか，あちらに向けるかということまでも現場で指示します。とても細かくやっていたのですよ。このように指示して建てさせていました。こうして暖かい素晴らしい家畜囲いが作られました。ゲレルト・ザム・ネグデルにはゴルト・ブリガード，ボガト・ブリガード，ハン・ウンドゥル・ブリガード，フフ・ノール・ブリガード，ウルント・ブリガードの5つブリガードがありました。この5つのブリガードの中心地の3つに発電所があり，相互間で接続されていました。すべてのブリガードの中心地には電話回線が引いてあり，娯楽施設，倉庫，貯蔵庫が作られ，ブリガードに勤める人びとの事務所，ホテルが作られました。そしてブリガードごとに整備されたこぢんまりとした村を作りました。ですからそれぞれのブリガードから必要な情報を受けます。そしてブリガードの中心地へ定期的に郵便の集配がおこなわれるようになりました。1週間に2度ブリガードの中心地で郵便の集配がおこなわれます。新聞，出版物を届けます。こうして発展してくるとウマに乗るのをやめ，牛車を使うのをやめ，何かあればトラクター，何かあれば自動車を走らせるようになりました。これもまた過ちでした。モンゴル人は遊牧経済を営んでいるため牛車に引かせ，ウマに乗るのが正しいのです。それを失いそうになりました。私たちは当時まちがったこともしていました。

3.12 医療・保健

妊婦は郡の中心地の病院で1週間ごとに検診を受けます。病院で予定日を算出します。当時人びとはずいぶん健康になりました。多くの子どもたちが生まれるようになりました。牧民で最も子沢山の家庭は16人の子どもを持ち，少ない家庭で3，4人の子どもを持ち，そして8人，9人，10人の子どもを持つ家庭が多かったです。牧民は1年おきに1人の子どもを産みます。そして妊婦を郡の中心地に連れてきて病院で出産させます。産前7，8日前に連れて来ます。特別なゲルを建て，また食堂から食事を与えます。そこに滞在させて病院で出産してから，産後7，8日間休ませます。そのゲルに滞在させるのです。単に滞在させるのではなく，赤ん坊をどうやって育てるか，どうやって食べさせるか，どうやって身体を洗うかについて授業をしました。

K：医師がウランバートルから来て教えるのですか？

M：いいえ。郡の医師が教えるのです。10人ほどの医師が郡共有病院にいました。郡の中心地に保育所，幼稚園があります。その幼稚園や保育所の先生たちにも授業をしてもらいます。医者にも授業をしてもらい，そして車で家に送ってあげます。母子たちを，子どもを取り上げた医師が，都合がつけば郡の役所の書記官あるいは住民の問題を担当する職員が家に送ってあげます。彼らは新生児を抱いてその家まで行くのです。それほどよくなっていたのです。さらに郡には幼稚園，保育所というとても重要なものがありました。

郡の公務員のすべての子どもたちを幼稚園，保育所が預かります。その施設，食事のすべてをネグデルが負担します。幼稚園の幼児たちを遊ばせるおもちゃ，遊び場を作ります。

若者たちにも大きな注意を払いました。結婚式をします。結婚式場を作りました。牧民同士で結婚する際には結婚式をさせます。間をおかずに結婚式を挙げます。結婚証明書を出してあげます。結婚する2人に1着ずつデールを作ってあげます。これをネグデルは無料で用意します。ネグデルは人のために物事をなしているのです。

3.13 乳製品工場の建設

さて，そしてネグデルの本部に施設を作るようになりました。モンゴル乳製品工場を私たちはイフ・タミル郡の中心地に作りました。モンゴルのみならず世界的にも有名な乳製品を製造する大工場となりました。年間，国に40トンのバターを納めていたのが，モンゴル乳製品工場を作った結果120トンの乳製品を製造できるようになりました。年間40トンだったのが120トンになったことを考えると，その差は大きいですよね。乳製品は12品目あります。シャル・トス（バター・オイル）というのは乳脂肪率100%の黄色いバターです。バターには何種類かあります。シャル・トス，ツァガーン・トス（発酵バター），エーズギーテイ・トス（低発酵チーズ入りバター）といった何

種類かに分類されます。アーロールは砂糖の入ったツァガーン・アーロール（白いアーロール）があります。ツァガーン・アーロールというイフ・タミルの有名なアーロールがあります。ホルホイ・アーロール（細長い形のアーロール），ヘビーン・アーロール（型取りしてあるアーロール），ホロード（加熱凝固チーズ）といった10品目ほどのアーロールがあります。アーロールを作るためには必ず蒸留をおこなうのでアルヒができます。蒸留した後にアーロールを作る材料ができるのです。蒸留しないとこの材料ができることはありません。乳を発酵させ，発酵したものを鍋に入れて蒸留するとたくさんのアルヒができます。1度蒸留すると3リットルの良質のアルヒができます。そしてアーロールを作るツァガーという原料ができます。ツァガーを濾すとアールツができます。これを再び乳と混ぜてアーロールを作ります。これは誰か学者が考え出した技術ではなく，私たちモンゴル人が2000年のあいだ家畜を放牧して作り出したものなのです。私たちはネグデルが発展してきて以降，モンゴルの乳製品を安定して食べられるようにしようと決定し，この工場を作ったのでした。そして党・政府は支援してくれました。

K：そうして作った乳製品はどこで売ったのですか？

M：郡の中心地に大きな商店を作りました。近隣を通過する人が，イフ・タミルに立ち寄って，ここで乳製品を買わずに通り過ぎるということはないほどでした。

L：イフ・タミルは西部の県へ通じる道の途上にあるのですよね。

M：その通りです。まさに途上にあります。2つ目には学校や幼稚園，保育所，郡の役所で働く公務員たちには家畜がほとんどいません。彼らに売ります。その余剰を県の中心地の商店で売ります。ウランバートルに持って行って売ります。とても簡単に売れます。この乳製品工場はネグデルに問題をもたらしました。困難もなく簡単なことというのは絶対にありません。それは何かというとモンゴル・アルヒ，悩みの種のモンゴル・アルヒができることです。1日1万リットルの牛乳から乳製品を作ります。平均1万リットルの乳を加工するために発酵乳をたくさん作ります。たとえば1つの部屋に1000リットルの容量を有する10の樽があります。1万リットルの牛乳からこの容器で酸乳を作り順番に持っていて蒸留します。そしてアールツを取り出して乳製品を作ります。その際モンゴル・アルヒというものがとてもたくさん作られます。平均して1回あたりの蒸留で8〜9リットルできます。とても強いお酒であるためたくさん飲むことはできません。そして総量でモンゴル・アルヒは何万トンとできるのです。大きな鉄製の容器に入れておきます。私たちには大きな鉄製の容器がありました。ネグデルはできたこのアルヒを売ってはなりませんでした。（伝統的な）モンゴル・アルヒを製造し販売してはならないという決議がありました。私たちはアルヒを作るために製造を行っているわけではなく，アーロールを作る目的で製造を行っていたのです。この過程でアルヒができるのです。モンゴルの習慣ではアルヒは食べ物の最高のもの

ですから私たちはそれを捨てることができず，大きな容器に入れて保管していました。そして私はこのモンゴル・アルヒを捨てる代わりにアルコールにしようという意見を出しました。

当時，科学アカデミーの総裁はB.シレンデブさんでした。私はB.シレンデブさんに要請書を書きました。B.シレンデブさんはいくつかの研究所から数人の学者を派遣し，そのモンゴル・アルヒからアルコールを造りました。モンゴル乳製品工場付属のアルコール部門が設立されました。そしてモンゴル・アルヒから94度のアルコールを造り出しました。国家規格のアルコールよりさらに良質のアルコールができたのです。このアルコールでアルヒを作ることを考えました。そしてアルヒ工場に行ってアルヒの規格文書をもらってきました。そこから1人の酒造専門家を招請してアルヒを調合してもらいました。そして作られたアルヒを「スーニー・アルヒ」，「アルズ」，「ホルズ」と命名しました。ツァガーン・アルヒ（アルヒの銘柄）と同じ度数で作ったアルヒを「スーニー・アルヒ」，それより少し強いのを「アルズ」，もっと強いのを「ホルズ」と名付けました。このアルヒはとてもよく売れました。このアルヒの価格を国営のアルヒ工場の製造したアルヒの価格よりも10%安く設定しました。当時ツァガーン・アルヒは25トゥグルグでした。25トゥグルグから10%安くして私たちの製品は1本17，18トゥグルグになりました。そして消費者組合では国営企業のツァガーン・アルヒは売れなくなり，私たちのアルヒだけが飛ぶように売れるようになりました。これは私たちの収入をとても増加させました。このアルヒは乳製品の製造途上の副産物なのです。一部の人が完全に話をふくらませて「R.ミンジュールはアルヒを製造して収入を得るようになった」という噂も出ていました。

私たちはアルヒを作ることを目的として始めたわけではありません。アーロールを作る過程でアルヒができたのです。そして，そのできたアルヒをアルコールにしたことがとてもよい結果になったのです。私は自らすべてを提案しておこないました。例の「愚者はちょうど真ん中を」という言葉がありますね。まさにそのような状態になりました。私はネグデルで働いている人びとのことをとてもよく考えて仕事を作り出していました。彼らの衣食住を提供しなければなりませんでした。私たちの若者たちは正しく組織すればとてもよく仕事をすることができます。食べ物，飲み物をきちんと提供し，素晴らしい軽音楽のメロディーで素晴らしいホールで踊らせて休息させてから翌朝仕事に出せばどんな仕事でもこなすものです。

3.14 発電所

青年同盟は「若者は山を崩して草原とし，川の流れを逆流させることができる」と謳っていました。私はネグデルに「牧民青年文化会館」を建てました。それは博物館，図書室，舞台を有する，とても大きな観客席を有する，大きなスピーカのある総合文

化会館でした。そして，その中に軽音楽用の楽器をセットで購入しました。電子楽器の講師を雇いました。郡の中心地に2機のディーゼル発電機を交代で稼働させるようになりました。郡には電気は来ていません。ネグデルが自分たちで発電します。我がネグデルは支払能力が高かったのでディーゼル発電機を24時間交替で稼働させていました。1つの発電所は3交代制で，9人の職員が働いていました。

ディーゼル発電所に勤める職員の給与は支給規則通りに支給します。電気を適切に使うようにとても留意しました。電線を専門家によって作ってもらいました。設計図を作成して敷設しました。どこからどこまで電線を引くか，基幹の電線はどれか，例のネグデル共有工場へ行く電線はどうか，その乳製品工場へ引く電線はどこから分岐するかといった細かい設計を行ってから敷設しました。このようなことをするに当たっては科学的根拠をもって専門家たちの力でおこなっていました。当てずっぽうで適当にやれば電線相互間でショートし，郡の中心地は火事になってしまいます。そのような危険があります。このような仕事をした結果，ゲレルト・ザム・ネグデルは融資を受けず，国から手当をもらわず，債務もなく，成員の給与をきちんと支払えるようになりました。ソ連や中国に行ったことのある客人や内外の人びとは驚嘆したものでした。「ネグデルというのは何と素晴らしいものなのだろう。何と美味しい乳製品を作るのだろう。このネグデルの成員たちはなんといきいきと輝き，幸福そうなのだろう」と言われるようになりました。我がネグデルはとても素晴らしい模範的なホテルがあり，建物の中には美しいゲルを建ててありました。訪れた客人を連れて建物の玄関から入ると，とても大きなゲルに出くわすのです。そのゲルはとても美しく，モンゴル民族の伝統的模様で装飾が施されていました。そこで客人をもてなし，宿泊してもらいます。このように人のためになる様々なことを考え続けていたらいつの間にか労働英雄になっていました。

3.15 労働英雄

K：正確にはいつ労働英雄となられましたか？

M：1969年に労働英雄となりました。郡やネグデルの歴史をまとめたところはそれほど多くはありません。我がイフ・タミル郡のゲレルト・ザム・ネグデルはまとめました。私たちは資金に糸目をつけませんでした。そのような歴史について歴史学を知らない人がただ適当に書いてよいものではありません。それは歴史学を修めた人が文書館の資料やその他の書籍を利用して初めて書くことができるのです。この書籍にもまたたくさんの興味深いことが書かれています。

「我がイフ・タミル郡とネグデルの歴史というものをR.ミンジュールが本に書かせて出版した。今後すべての郡とネグデルはこのような歴史書をつくりなさい」とツェデンバル書記長が大きな会議の席上でおっしゃいました。こうして様々なことを提案

し，創り出してきました。若者たちには結婚式，披露宴やその他のたくさんのことで楽しませました。我がネグデルの若者たちはウマを走らせてやってきてダンスをし，翌朝ウマを走らせて戻ってヒツジを放牧するようになりました。ダンスのための素晴らしいホールがあり，電子楽器があったので若者たちの関心を引くことができました。こうして私は文化筆頭活動家として表彰されました。我がネグデルの若者たちは全員文字がわかり，教養を持つようになりました。

3.16 定住化政策

L：党・政府はネグデルを社会主義的大組織として改革する政策をとっていました。ネグデルは牧民たちをソーリ，ブリガード，牧場として組織しました。牧民たちが固定の冬営地，春営地，夏営地，秋営地を持つようにしました。将来的に，牧民を定住生活に移行させる考えもあったのですか？あなたが牧民のための総合文化会館を建てたり，乳製品工場を設立したりしたのは，そうした考えと関連していますか？

M：後に私たちは内モンゴルについて少し調査しました。国の内外の経験もたくさん調べました。そして，私たちのこのネグデルは十分に集中化できていない。これをさらに集中化させようと話すようになりました。これをなすためにはまず遊牧経済の質を向上させよう。質のよい品種の家畜の数を増加させよう。酪農場を機械化しよう，電化しよう。電動で搾乳できるようにしよう。混血種，極細毛のヒツジをより改良し，その毛を電動で刈り取り，毛を電動プレス機でプレスするようにしよう。さらにネグデル共有工場の力でネグデルの建物をより改善しよう。たくさんの家畜を所有するようになったからといって，肉は十分行き渡るようになったと気を緩めずに肉の備蓄を増加させよう。この目的のために鶏，豚，ミツバチ，ウサギ，ガチョウを飼うようにしよう。このような考えに基づいていくのが適当であると考えるようになりました。そしてネグデルの一部のソーリの中心地に建物を建てよう。冬を過ごすための越冬用の建物を作ろう。ゲルは夏の移動期に利用し，固定家屋を造ろう。その機械化したソーリに電気を引こう，娯楽施設を作ろう。また150～200頭の乳牛を有する酪農場があるとすると10戸ぐらいの家庭が集中しています。10戸の家庭には保育所や幼稚園へ通う年齢の子どもたちが30人ほど，一部の酪農場では40人ほどいました。彼らに対してその地に幼稚園と保育所の兼用の施設を設立してあげよう，そして搾乳者が働いているあいだ，子どもたちを幼稚園，保育所に預けて子どもたちを保育させ，夜になって家に帰すようにしようと話すようになりました。これに関して一部のものを実行に移そうと努力し始めていました。当時，アル・エレグ酪農場という保育所と幼稚園を有する，酪農場を設立しました。この考えを実現するためのたくさんの仕事がゆっくり広まっていきました。ネグデルはこのような酪農場を作ろうと努力し始めました。この活動の向こうには，少しずつ進めていき集中させよう，より集中した状態にしよう，

ソーリを減らそう，数少ない場所に定住化した状態にしようという考えがありました。こうして定住状態となったソーリにおいて飼料備蓄をおこなわせよう，植物飼料の栽培，混合飼料，ペレット飼料を製造しようという目標が掲げられるようになりました。家畜は飼料を確保して品質が改良されました。他方，人は若干定住的な生活に移行し始めれば生活が向上するだろうと考えるようになりました。これは遊牧経済全体に対してはそれほど大きな影響を与えるものではないといわれていました。この2つの手法を組み合わせた基礎の上に国民を啓蒙しようと言うようになりました。

健康面に留意し向上させよう，とりわけ母子に関する措置を改善しよう，郵便，新聞・雑誌，ラジオで定期的にサービスをするようにしようといった目標が掲げられました。私がそこで働いていたときテレビはまだそれほど広く普及していませんでした。ロシア人たちは我が国の状況に適した，私たちに必要なたくさんのものを作ってくれました。すべての家庭にトランジスタ・ラジオを，すべてのネグデル長にUAZ－69型自動車をもてるようにしてくれました。牧民の生活環境にはトランジスタ・ラジオがとても適しており，きわめて必要なものでした。「お兄さんたち（ソ連の人びと）」の力でモンゴルに文化が広まったのです。

K：ネグデル時代，「ホト・アイル」は従前のまま維持することができましたか？

L：あなたが若かったとき兄弟や普通の知り合いがまとまって1つのホト・アイルを形成していたはずですよね。ネグデル時代，ソーリ，酪農場を組織する際，同時に従前のホト・アイルを維持することができましたか？

M：ホト・アイルの基礎の上にソーリを組織したのです。ホト・アイルをソーリとして拡大し，家畜を類別して増加のために最適化しました。ソーリが定着してくるとホト・アイルはとても集中化しました。まぁ何人かの高齢者たちは孤立して谷間の窪地の昔の冬営地近辺で，それほど長距離移動することもできずに暮らしていることはありました。ネグデルのすべての家庭の1％程度がこのような状態でした。ネグデルの成員であり，労働能力のある家庭は必ず圧力をかけて，労働が拡大している場所へ集中化させていました。年齢の高い，昔からの状態に慣れきってしまった，年金生活をしているそのような人びとを生まれ故郷にそのままの状態で暮らさせていました。それからネグデルというのは牧民である成員たちに給与を支給していました。私有財産制の時代には給与は支給されなかったのです。また牧民である成員たちに年金，手当てを支給するようになり，産前，産後の一時金を支給するようになりました。ネグデルが崩壊して以降，それらはすべてなくなりました。すると牧民たちには現在このような社会保護措置が不足しています。ですから時々再び協同してネグデルを設立しようという話が出てくるのです。

4 暮らしの変化（ウランバートル市内にて収録）

4.1 牧民文化会館の建設（オド映画館にて）

私R.ミンジュールは労働英雄になって以降，ネグデルの成員たち，若者たちに必要なものを作って残そうと考えるようになりました。我が地域には若いころにウランバートルで建築部隊長を務めていたD.レンツェンという人がいました。ダンビン・レンツェンというその人と2人でウランバートルを訪れました。ウランバートルを訪れ建築物を見学しました。設計研究所で設計図を見ました。これは例の「牧民文化会館」を建てるための準備作業に入ったときのことです。「牧民文化会館」という名称はそれまでまったく存在しませんでした。人民革命のころ，このような施設は「赤い家」，「赤いコーナー」，「クラブ」と呼ばれていました。私たちはこの単語を使わずに「牧民文化会館」と命名することに決定しました。このような文化会館を設立しようという情報が広まりました。

そして，この建設しようとしている文化会館のモデルを決めようとD.レンツェンという人を従えてウランバートルにやってきたのです。当時「オド映画館」を建築中でした。そして私たち2人はそれを建築していた技師と会見しました。また設計図を見せてもらいました。私たちが建設しようと目指している文化会館にとてもふさわしく思われました。建設総額もそれほど高くありません。そして互いに話し合い，それを牧民文化センターのモデルとすることに決めました。そして，国家建築物設計研究所を訪れました。そこには私の知り合いの技師たちがたくさんいました。彼らを通じてこの新たに建築されようとしている「オド映画館」の設計図を入手しようと努めました。すると，

「設計図を差し上げることはできます。しかしあなた方にはこのようなレベルの建物を建てることは少し無理ではないでしょうか」という話が出ました。これを建てるためにはまず第1に優秀な建築技師が必要で，第2に優れた建築機械が必要だとのことでした。しかし私たちはあきらめずにその設計図を受け取りました。最も注意すべきことは連結梁という恐ろしく長い梁を鋳造する作業であると理解しました。それをうまく作らなければ建物全体が倒壊する危険を持っていました。そのほかは何とか作ることができそうに感じられました。壁材についてはアルハンガイ県でブロックと呼ばれる素晴らしい建築資材を作っていました。それから私は建築部隊長とどのように建てるかについて話しました。彼はとても勇気のある人でした。私たち2人は何とかして建てるということで同意に達しました。建築設計研究所は私たちから設計図の料金を受け取らずに設計図を無料でくれました。私たちはその代わりに乳製品工場で作った乳製品をその研究所の職員にあげました。本来であればその設計図はとても高価なものなのです。

さて，そうして建物の建築作業に入りました。私たちはこの建物を建築するのに関連する多くの問題を地域の状況や可能性に合わせて解決しました。バヤンホンゴル県の中心地にはロシア・モンゴル合弁建築資材工場がありました。当時アルハンガイ県の中心地では大きな病院の建物を建てていました。それに必要な外装のパネルをバヤンホンゴルの建築資材工場から運んできていました。私たちも彼らと一緒にそこから運搬してきました。バヤンホンゴルの建築資材工場にサーシャというロシア人が働いていました。私は彼ととても仲良くなりました。そしてクレーンで外装のパネルをはめてもらいました。「オド映画館」の建築過程で技師の計算の誤りから連結梁が折れて倒壊し，2, 3人の人が下敷きになって亡くなるという惨事が起こっていました。その事故は私たちに大きな教訓となりました。私たちは2本の連結梁をどうやって作るか，よく話し合いました。私たちは連結梁を組むために基礎部分をよりしっかりとセメントで固め，骨組みをしっかり作ろうと決めました。そのおかげで私たちの組んだ連結梁は折れませんでした。建築作業にはたくさんの人を参加させました。我が郡の中心地にはたくさんの失業者がいました。そしてこれを建築した人びとは皆郡の中心地にいました。彼らのすべてをこの作業に動員し参加させたのです。鉄骨だけでもたくさんの種類があり28トンの鉄が使われました。それをダルハン市，エルデネト市にある大きな衛生工事用品工場から購入していました。ダルハン市の衛生工事用品工場のモンゴル側工場長はわがイフ・タミルの出身で我がネグデルの成員の子息でした。彼はラグバスレンといいました。その人は17～18トンの様々な型の衛生工事用品，鉄骨を提供してくれました。3, 4台の自動車で行って，その鉄骨を運搬していました。ダルハンのロシア側工場長とモンゴル側工場長の2人はその鉄骨を，私にそれほどのお金を受け取ることなく提供してくれました。私はここでも乳製品，モンゴル乳製品工場の製品をあげました。ですから文化会館は家畜の恩恵によって建てられた建物なのです。もし訪れることがあれば入ってみてください。

私たちは「牧民文化会館」と名付けたのでそこでは常に文化的な行事を行っていました。中には大きなホールがあり，芸能活動をおこなうことが十分に可能でした。ネグデルのアマチュア芸能家のコンサートを絶えず開催するようになりました。読書のための閲覧室があり，図書室には4000～5000冊の書籍がありました。モンゴル語やチベット語の経典がたくさんありました。チベット語の書物をたくさん集めていました。イフ・タミルの中心地にはチベット語を解する僧侶たちがたくさんいました。彼らは書物をたくさん読みます。さらに郷土でイフ・タミルの歴史を示して著名となった素晴らしい博物館を運営しました。文化会館の中には青年同盟，労働組合などの機関を入居させました。彼らはとても活発にイベントを開催します。そこに入ると石のモザイクでタミル川の水が波打っている様子が表されています。

私たちは文化会館を努力し続けて建築しました。しかし，その中に置くべき椅子が

ありません。モンゴルで作っていた椅子はそれほどいいものではありませんでした。最もよい椅子は曲げ木椅子でした。それはありませんでした。そうこうしているうちに我がネグデルにブリヤート自治ソビエト社会主義共和国の文化大臣である1人のロシア人が来ました。今彼の名前を思い出せません。その人が私たちの建てた「牧民文化会館」にとても興味を示しました。特にネグデルの牧民である成員たちがこのようなレベルの建物を，こうして無事故で建設することができたことに驚いていました。そして私はその人を連れてネグデルのソーリ，酪農場を案内しました。その人は我がネグデルを訪問し，2泊して帰っていきました。帰る際に私たちは彼にモンゴルの伝統楽器である馬頭琴，胡弓，横笛，琴，三味線の5種類をプレゼントとして渡しました。それは新品ではなく，長年使われた古い楽器でした。私たちは牧民文化会館のためにたくさんのものを蒐集していました。その中から厳選しプレゼントしました。

そして，その人は私をブリヤート共和国に招待しました。また「牧民文化会館」に必要なものがあれば言ってください，と言っていました。私は文化会館には250脚の椅子が必要ですと彼に伝え送り出しました。もともと文化会館には150人を収容できるホールがありました。それからまもなく私は彼の招待によりウランウデを訪問しました。彼は私を連れていろいろなものを見学させてくれました。そして私がそこから帰る際，ウランウデの家具工場で作った300脚の椅子をプレゼントしてくれました。ウランウデは大きな家具工場が操業していることを私は知っていました。そして私はその人のプレゼントしてくれた椅子を列車に積んで戻ってきました。このように文化会館は寄付により椅子を得ることができました。現在その椅子はトソンツェンゲルの家具工場で作られた椅子に替えられたようです。このような歴史があるのです。

私は文化会館の建物を建て終えてから，仕事をネグデルに引き継ぎました。私が去ったあと，ミンジュールの建てた文化会館は梁が折れて倒壊するそうだという噂が流れたそうです。私たちは建物の基礎部分を固める際に設計研究所のチョイジルスレン技師から助言をもらっていました。このような噂が流れた後，私はチョイジルスレン技師と会見してこのような噂が流れていると彼に話しました。するとチョイジルスレン技師は，

「あれはそんなに簡単に折れて崩れることはあり得ません。あなたを悪く言いたい人びとが適当に作り出したのでしょう」と言っていました。それは実際に倒壊しませんでした。現在でも存在しています。私の建てた建物にはこのような床はありませんでした。私たちは単にセメントを流して作ったのです。あなた方は再び行くことがあればその文化会館をよく見てください。興味深いものがたくさんあります。

我がネグデルにはバドナーワンチンという木工職人がいました。その木工職人はすべての窓を1人で作りました。ほかの誰にも作らせませんでした。私は木を加工し，切断させ，外に積んで置いておきました。その木工職人が1人で冬，夏の区別なく作

り続け，丸1年かけて完成させました。彼はモンゴル伝統木工の手法でとてもたくさんのものを作りました。扉もまた別の人が1人で作りました。その木工職人はとても器用な人でした。扉のデザインに関して私たちはよく話し合いました。当時は扉を美しい格子で飾るのが一般的でした。ウランバートルにある青年ホテル，政府庁舎の扉がそうでした。まさにそのような扉を作るべきだと私は彼に言いました。その扉は外側が銅や鉄で覆われていました。我が木工職人はよく理解できないようでした。そこで私は彼を連れてある土曜日にウランバートルに行き，その扉を見てもらいました。そしてその老翁と私は扉を作るためのすべての道具を金属細工職人に作らせて作業に取りかかりました。あなた方が訪れてご覧になれば，扉が1つの形式で，窓が1つの形式で作られていることがわかると思います。現代の若者たちは知りません。窓や扉をよく見ることはありません。

その扉や窓を見て，「モンゴルの木工職人というのは何と恐ろしく複雑に知恵を絞り，この扉や窓をこのように丈夫に，このように繊細に素晴らしく作ったのだろう」と考えることでしょう。私は言いましたよね。モンゴルの木工職人，金属細工職人というのはまったくこの2本の手だけで作ってしまいます。そしてとても頭を使って作ります。その木工職人は扉を1年ほどのあいだに作りました。彼は職人ナツァグと言います。窓を作った人は職人バドナーワンチンという人でした。いずれもイフ・タミルの人びとです。我がネグデルの成員です。私は彼等に労賃を十分に支給していました。食事を十分に与えていました。かわいそうに，その文化会館の窓を作った人は高齢なので仕事で疲れてしまいます。

「このように疲れてしまった時には何が必要ですか」と聞くと，

「ソルヒル（*Agriophyllum squarrosum*）が必要です」と言います。ソルヒルという草があります。それはバヤンホンゴル県に生えます。そのソルヒルを老人に持っていってあげると乾燥させて砕いて，お茶を沸かして煎じて飲んでいました。ソルヒルで煎じたお茶を7日間飲めばその人は1年分の力を得ます。私自身がバヤンホンゴルに行ってソルヒルを取ってきてあげていました。その老人の体力をよい状態にするためにそのようにすべてのものを用意してあげていました。文化会館が完成しました。完成後，建築部隊長のレンツェンに北極星勲章を，そこで働いていた女性の中から2人に労働名誉メダルを，例のバドナーワンチンさん，ナツァグさんにもそれぞれ褒賞してもらいました。党・政府に，

「牧民たち，我がネグデルの成員たちがこのように牧民文化会館を建築しました」と言って証明書を書いて知らせました。人間は彼らのように物事をきっちりとおこなうべきです。おこなった後はきちんと褒賞するべきです。そうすれば励みになります。R.ミンジュールを褒賞したように彼らを褒賞すればよいだけです。R.ミンジュールを褒賞したことが報われたことになるのです。こうして私たちは「牧民文化会館」を作

ったのです。どうもありがとうございました。
L：最近ウランバートルでは赤煉瓦の建物が建てられています。これは設計が悪く，建て付けが悪いものを建てていますよね。
M：そのことは今新聞で書かれていますよね。これは建物ではなく，鳥の巣であるといわれています。よくないですね，ええ。

4.2 野菜の食事（食品市場にて）

では，ここで1つおもしろいことをお聞かせすると，1930年代のモンゴルではこのようなたくさんの野菜を栽培し，このようにたくさん食し，利用することはありませんでした。それが党・政府の決定が出て，地方の国営農場，ネグデルが野菜を栽培する命を受けて栽培するようになったのです。私はムルン郡のヤラルト・ネグデルでジャガイモを栽培し始めたとお話ししましたね。アルハンガイで最初にジャガイモを植えた場所なのです。本当にこんなに大きく生長しました。そしてこれを生長させ，栽培するのはとてもたいへんだと思えました。栽培して実っても買う人がいません。1キロのジャガイモを私たちは35ムングの値を付けて売ろうと努めました。しかし35ムングで1キロのジャガイモを買う人がいません。それでもそれらを長期間保存する容器，貯蔵庫はありません。ジャガイモはしっかりした貯蔵庫で保存しないと簡単に傷みます。そこで人びとに無料で支給することになりました。そしてネグデル成員たちの労働日当にジャガイモを袋ごと支給しました。彼らは食べ慣れておらず，まったく食べることがないため，道すがらこぼしながら捨ててしまいます。道がジャガイモでいっぱいになってしまっていました。このようにたいへんだったのです。

今日モンゴル人はジャガイモ，野菜を何でも栽培するようになり，栽培したものの値段は高くなりました。このタマネギはロシア産です。そうでしょう？これはよいタマネギではありません。モンゴルには野生ネギ（Allium altaicum が地方，ハンガイにたくさん生えています。モンゴル人はそれを主に食していました。このような栽培種のタマネギはまったく食べたことがありませんでした。栽培種のタマネギの味，質が悪いといって嫌いました。さらにこのカブ，ニンジンなどはすべて姿を見るのも嫌いました。最初にジャガイモを栽培し始めました。ジャガイモを食べられるようにすることはたいへんな仕事でした。ジャガイモを食べることはよいのだと講義や話し合い，説明をおこないました。ジャガイモを食べるよう呼びかけをおこないました。それでもわかってもらえずとてもたいへんでした。現在では緑の革命ということがとても話題になっています。現在ジャガイモは家庭の庭ごとに栽培されています。そして栽培したジャガイモを売却し，それで暮らしています。多くの人びとに職を持たせる非常に役に立つ活動です。現在野菜の入っていない食事をする人はいなくなりました。中央，地方の区別はありません。地方の牧民もまた野菜の入った食事を食べるようにな

りました。野菜は人の健康にとてもよいのです。野菜を上手に保存し，売却して人びとは裕福になっています。つい先ごろまで野菜を食べる人がいずに苦しんでいたのです。

M：私が野菜を栽培して，牧民に鞍から下げて持って行かせると道すがらこぼして捨ててしまっていたのです。たいへんだったのです。そして野菜を食べ慣れさせようと，野菜を栽培させようと，たいへんな仕事でした。今あなたたちの世代でこの仕事が実生活に定着しましたね。そうですね。

農夫：そうです！

M：この人たちは日本から来ている学者です。モンゴルで野菜栽培が当たり前のことと考えているかもしれないと思い，このように聞いてみました。

4.3 パンの導入

K：モンゴルではいつからパンを食べ始めましたか？

M：パンもまた我が国では新しい食べ物ですよ。昔，地方の牧民はパンを食べませんでした。泡だった小麦粉，ふくらんだもの，苦い味がする，まずいと言います。またパンを作るようにさせようと，パンを食べ慣れさせようと，これもまたたいへんな仕事でした。ウランバートルにパン工場が設立され，パンはまずウランバートルで食され始めました。最初は学校の生徒たちや若者たちだけが食べていました。モンゴル国立大学，農牧業大学，医科大学などの最初の大学が設立される時期にパンはよく食べられるようになりました。私が若いころはパンを持って歩いている人や，人の家に入った時に皿の上にパンが載っている家庭はとても不快でみっともなく見えたものでした。とてもみっともない。ここは何と貧しい食事を出す家庭なのだろう，と言われました。地方ではかなり遅れて普及しました。1960年代以降パンを買い，作り，食べるようになりました。現在はパンと野菜の2つは完全に私たちの生活の一部になりました。現在ではこの2つがなければ私たちの生活はとてもたいへんな状況に陥ってしまいます。

当初，パンの製造にはいざこざがつきものでした。当時の規格ではパンの重量は1キロでなければなりませんでした。そして検査局は頻繁にパン工場で検査を行っていました。小麦粉の重さを量り，作ったパンを計量する。そして計量したパンが1キロに満たず40～50グラム不足することがありました。そのようなことが起これば1つのパンで不足した重さを，作ったパンの個数により乗算して，そのパン工場に罰金を科していました。こうしてこのように罰金を科された工場の財務はかなり深刻な状況に陥るのでした。そのような細かな規則がありました。現在そのような規則はありません。

我が国で果物を栽培する問題はかなり後の時代に出始めました。1950～60年代より

以前，モンゴルではリンゴとは何なのか知りませんでした。そしてモンゴルにリンゴを栽培するのはたいへんな仕事でした。現在すべてを外国から輸入しています。お茶は我が国では主に中国茶を飲んでいました。貧しい人びとは野草のお茶を飲んでいました。野生で矢車菊（*Centaurea L.*）という植物が生えており，それをお茶の代わりに飲んでいました。地方の人びとはそのようなお茶を飲んでいました。

4.4 お茶の輸入

K：ロシア製のお茶をいつから飲み始めたのでしょうか？

M：1930年代以降ですね。1932年ころ，ロシア茶やロシア・タバコすなわち葉タバコが我が国に入ってきました。当時我が国では中国茶を飲み，中国の葉タバコを吸っていました。そしてロシア茶，タバコが入ってくるととても嫌いました。ロシア茶を飲むことを，ロシア・タバコを吸うことをとても悪く言いました。ロシア・タバコはまずい，質が悪い，馬糞のようなにおいがするという風に言われていました。当時もう1つ別の興味深いことが起こっていました。私たち地方の住民はチベット医療に慣れきっていました。チベット薬で治療していました。しかし，ロシア，ヨーロッパの医療が入ってきました。そしてバグごとに講義を受けてきた衛生士が置かれ，郡の中心地には医師が配属されました。しかし人びとはそのロシア薬を飲まず，僧侶や当時年配だった人びとはロシア薬を飲んではならないと強く説いていました。ロシア薬は人の身体に合わず，身体が冷える，むくむなどと説くのでした。こうして党・政府はロシア薬を飲ませようと呼びかけをおこなうようになりました。ロシア薬の長所を述べて呼びかけをするようになりました。当時モンゴル人は性病をよく患っていました。その治療のために初めて赤サルファ剤という薬が出てきました。それを私たちは「赤い注射」と呼んでいました。性病にかかった人に赤サルファ剤を投薬すると尿が赤くなりました。人びとはこれをとても嫌がりました。しかし赤サルファ剤を注射すれば慢性的な性病が治りました。後に人びとは「本当にこれはとてもよいものだなぁ」と賞賛し始めました。私たちが若いころ党・政府は特別グループを派遣して性病にかかった人びとに接種するようになりました。そして私たちはロシア茶を飲むようになりました。逆に現在中国茶を飲まなくなってしまいました。「赤いお茶」といって現在私たちは中国茶を悪く言います。中国の葉タバコは完全に吸わなくなりました。油っぽい，焦げ臭いとか，肺に悪いとかいって吸わなくなりました。

K：米は食べましたか？

M：米はあることはありました。しかしとても希少でした。ほとんど食べることがなく，僧侶たちが主に食べました。1軒の家庭で2キロの米を買ったならば丸1年はもちます。またとても希少でした。

K：この小麦粉は？

M：小麦粉も昔は中国の小麦粉しかありませんでした。これもまた希少でした。モンゴルでは小麦粉は作っていませんでした。モンゴルでは小麦の栽培，小麦粉の製造などは1950年代以降におこなわれたことなのです。それ以前は中国から「ゴー・ザミン」，「デン・ザミン」という名前の小麦粉を輸入していました。1軒の家庭でこれくらいの（2kgほど入った袋を指しながら）小麦粉を購入すればとても長いこともちます。小麦粉というのはすべての人が食べるものではありませんでした。僧侶たちが法会を行ったり，僧侶たちに祈祷，厄払いをしてもらったりする際に茶碗一杯の小麦粉をたくさんの肉に混ぜて食します。子どもたち，若者たちに小麦粉で作った食べ物はまったく与えませんでした。今では誰もが食べるようになりました。よくなりました。

4.5 乳製品

これはシャル・トスです。色がかなり白っぽいですね。乳脂肪率がかなり少ないシャル・トスです。乳脂肪が少ないです。モンゴルのシャル・トスというのは真黄色をしています。モンゴルのシャル・トスはモンゴル人が家畜を所有して以来2000年間ずっと食してきた食べ物なのです。

さて，これはアーロールとは言いません。これはホロードと言います。これは有名なウルムという食べ物です。1950～60年代に乳加工機を外国から輸入してきて，洋風のバターやサワークリームというものを作るようになりました。それ以前には作っていませんでした。ウルムしか作っていませんでした。サワークリームは新しく出てきた食べ物です。モンゴルの乳製品の種類の中にサワークリームは含まれません。

これはエーズギーです。これは砂糖入りアーロールです。地方の家庭ではこれをよく食べます。「エーズギー，アーロールをトラムに，ウルム，ズーヒーをフフール（ウシのなめし皮で作った袋）に」という言葉があります。現在，我がウランバートルの人びとは「白い革命」と名付けて，そしてあちこちからもってきてはウランバートル駅で販売しています。

「鍋のウルム」とはこれのことを言います。今ごろはウルムを作るのはたいへんです，暑いためウルムがうまくできないのです。涼しいところではヤクの乳でとても厚い，美味しいウルムを作ることができます。本当のモンゴルの伝統的な鍋のウルムはこのように作ります。ボーズは昔から我が民族のごちそうで，お祝いの時に食べるおいしい食べ物です。私たちが幼少のころは小麦粉がなかったためすべての家庭，すべての人がボーズを食べることができたわけではありません。

4.6 古い町並み（第一10年制学校前にて）

さて，これは我がイフ・タミル郡に「牧民文化会館」を作ったようにウランバートルに建てられた最初の4階建て建物です。これを建てようと大きな努力がなされまし

た。党・政府の指導者たちが訪れ，基礎工事の起工式に参加していました。1930年に建てられたそうです。この時期には建物を建てる建築部隊はありませんでした。この建物を当時逮捕されていた僧侶たちが主に建てました。例の，粛清され逮捕されて罪人となっていたたくさんの僧侶たちの中に，器用な，積極的に働く僧侶が非常にたくさんいたそうです。すべて僧侶や囚人が建てたのです。イベーシ・ダシゼベグ・ガブジ（ガブジはチベット仏教の学位。dka'－bcu）という人が最も大きな創造力を発揮し，最も大きな生産的な仕事をしたそうです。このような何人かのガブジや僧侶たちがこの建物を完成させた後，罪を許され刑務所から釈放されたそうです。このような歴史をもっています。この両側にレーニンとスターリンの姿が浮き彫りで作られていました。これは最近はずされたのでしょう。それ以前，このように何の建物もありませんでした。この建物の向こうには垣根や塀があるだけでした。私の家の塀はこの建物の手前にありました。塀の中に我が家のゲルがありました。ここから出て北に行くとその辺一体が塀に囲まれた民家の敷地でした。

あそこは「水通り」と呼ばれていました。その通りでは馬車で水を運んでいました。ですから「水通り」という名前になったのです。当時往来する人びとに奉仕する乗り物は中国製の馬車でした。現在でもフフ・ホトや北京で人を運ぶ馬車が見られますよね。そんな馬車がウランバートルにはとてもたくさんありました。１人30ムングで乗ることができました。

「市場です！市場に行きます！」と言います。現在のウランバートル駅の辺りは市場でした。馬車で人びとは市場へよく出かけたものでした。これはこのような歴史をもつ建物なのです。そしてそれ以降，このように何階建てもの建物が作られ始めました。この近辺は本当に建物がありませんでした。私の家はここにありましたので私はよく知っています。

4.7 ハルハ川戦勝記念の丘にて

この近辺は市場でした。あちら側には何もありませんでした。建物は何もありませんでした。このナーダム会場はここにはありませんでしたよ。ナーダムはヤールマグでおこなっていました。鉄道が引かれる前にはこのような大規模な建物を建てることは不可能でした。当時はすべての建築資材を暖かい季節にウランウデから運搬していました。ロシアのZIS－5という自動車がありました。その自動車で運搬します。当時，大きな輸送基地はありませんでした。そのような基地は後の時代になって設立されました。鉄道が引かれたことで1年を通じて建築資材を運搬できるようになりました。

今私たちはボグド宮殿の傍らを通っています。これは「温泉療養所」です。現在は「国民医療研究所」となりました。昔ここで温泉にはいるためのいくつかのゲルがありました。後に拡大したようです。ここで人びとは夏の間ゲルを建てて避暑していま

した。それを「幹部たちの避暑地」と呼んでいました。

現在のウランバートルは庫倫だったころと比べてまったく変わってしまいました。庫倫の町並みはこうではありませんでした。あのガンダン寺院に千手観音菩薩像の高い仏殿がありますよね。あの近辺にはかなりたくさんの寺院がありました。ウランバートル北部の民家の北にダンバダルジャー寺院がありました。ウランバートルの中央部の森林の北にダシチョインロン寺院がありました。その寺院にはゲルの形をしたたくさんの廟がありました。庫倫にはダンバダルジャー寺院，ダシチョインロン寺院，ガンダンテグチンレン寺院という3つの寺院がありました。ウランバートルの東側にあるたくさんの民家の近辺を「アムガラン」といいました。そのアムガランには中国人ばかりが暮らしていました。それは中国人村だったのです。レーニン博物館がある当たりから「中国九路通り」という名前の複数の通りが始まっていました。庫倫に住む中国人たちはこの2つの場所にほぼ集中していました。中国人たちはゲルには住まず，皆土造りの建物を建てて住んでいました。アムガランは中国人商業の中心地でした。そこでは商売だけがおこなわれていました。当時町中に大きな建物はありませんでした。1921年の人民革命後，ロシア人たちが「ウンドゥル消費者組合」と呼ばれる商業ビルを建てました。現在その建物にはザナバザル記念美術館が入っています。現在のモンゴル銀行の建物もまたかなり古くに建てられた建物なのです。最初建てられたときはとても小さかったのですが，後になって増築したようです。また現在の内務省の建物もかなり古くに建てられました。その建物は当時，重要建造物に数えられていました。現在の師範大学の建物は政府庁舎でした。モンゴル人民革命党中央委員会はその隣の1階建ての建物にありました。Kh.チョイバルサン元帥はそこで執務していました。そして1930年代に最初の4階建ての建物である第1学校の建物が建てられました。その次に建てられた最も大きな建物はモンゴル国立大学の建物でした。鉄道が引かれてからは建築活動も大いに活発に拡大しました。ここに「オルギル温泉保養所」という名前のいくつかのゲルがありました。

トール川のこの橋は作られていませんでした。トール川は橋がありませんでした。トール川はとても大きな川でした。現在は小さくなりました。トール川はザーン・テレルジ山脈という山脈に源を発します。この山々の向こうにザーン・テレルジ山脈があります。そこからトール川は源を発し流れています。とてもたくさんの水量のある川でした。ウランバートルで使用する薪をそのザーン・テレルジ山脈からもってきていました。当時，車や機械はありません。そこで木を伐採して筏で下らせてもってきていました。木をこのように切って結んで筏を作ってその上に木を積んで運んでいました。トール川の河畔にはとてもたくさんの木が届いていました。ウランバートルの人びとは馬車，手押し車でやってきて筏で届けられた薪を購入して燃料としていました。ナライハから中国人たちが大八車で石炭を積んで運んで来ていました。石炭はそ

れほどたくさんの人が使うわけではなく，中国人自身が使っていました。「鉄職人の橋」という木工職人や金属細工職人の地区がありました。そこで石炭を少し使っていました。ウランバートルの人びとはほとんど木を燃料としていました。木は筏で届きます。トール川の河畔には薪を買おうという人びとがたくさん来ていました。
L：あなたは兵役を務める際，ウランバートルを経由してドルノドにいったとおっしゃいました。そのときあなたの部隊はどこに宿泊したのですか？
M：鉄道文化会館がありますよね。そこに最初の「モンゴル・トランス」という自動車運輸基地がありました。モンゴル・トランスはたくさんの自動車を有していました。私たちはアルハンガイから1935年に徴兵されてウマの駅伝を使って進み，シャル・フブ峠を越え，ソンギノト淵を下ってこの辺りに来ました。そしてそのモンゴル・トランスの近辺に宿営してそこから先に徒歩で進んだか，何で進んだかよく覚えていませんが，ナライハ近辺から再びウマに乗って行きました。そこにウマの駅があったのか，覚えていません。そのモンゴル・トランスからは，軽油で動いていたのでしょう，かなりたくさんの煙を排出してとても大きな音を出す車があちこちへ，一部は県の中心地へ向かっていました。私は1945年に内務省に赴任しました。その省は現在と同じ建物に入っていました。敷地内外にはそれ程多くの付属施設はありませんでした。ただその北の自然博物館の向かいに内務省付属病院がありました。それはかなり昔に建てられました。

4.8 駅伝制度

K：駅伝についてご教示ください。
M：個人生産者は家畜の数によって年に2回，時に1回駅に派遣されます。駅の管理人の役務を務めます。当時30キロ以内に1軒の駅管理人を務める家庭がありました。少なくとも100頭の乗用馬が用意されている家庭です。1つの家庭は30日間駅の管理人を務めます。30日間駅の管理人を務める際，公務で駅を通る人を必ず次の駅まで送り届けました。駅伝はかなり昔に始まったものです。駅を通る人は県や郡の役所の発行した「通行証」を持っていきます。この「通行証」を持つ人は駅のウマに乗る権利を有していました。通行証のない人はウマの駅を通る権利を持ちません。通行証には2種類ありました。「赤色通行証」，「緑色通行証」です。1つは赤色の文字で，もう1つは緑色の文字で書かれていました。「赤色通行証」は現在でいうところの大臣や幹部たちがもつ文書です。外交パスポートというのが今ありますよね，そのようなものでした。この文書をもつ人を絶対に滞らせてはなりません。ウマを疾走させて到着すると同時に鞍をはずして直接別のウマに鞍をつけ，その人は先に進みます。「赤色通行証」をもつ人は不可侵の権利を持つ大臣や幹部たちです。「緑色通行証」というのは一般の仕事をしている人ですが，公務を遂行している人です。「赤色通行証」をもつ人を

送ってから，「緑色通行証」をもつ人を送らなければなりませんでした。

駅には4〜5棟のゲルがあります。駅の管理人を務める人たちがそのゲルを自分たちで持っていって建てます。駅を通過する人たちはそこで食事をします。「赤色通行証」，「緑色通行証」をもっている人に食事を作ります。肉を煮ます。そこで宿泊します。敷き布団を敷いて，デールを被って寝ます。ウマの駅伝を利用する人は必ずモンゴル・デールを着用します。冬は駅の管理人が毛皮のデールをかけてくれます。通行証をもっている人たちには日当は渡されていなかったと思います。でも通行料は渡されていたと思います。駅のウマを使用したら使用料を支払います。たとえば10駅進む場合，10駅分の通行料をもっていきます。1頭のウマは3〜8トゥグルグで乗れます。現金で精算して進みます。30キロ進んでは降りる。どこの駅をどの郡の誰が担当するかという割当がありました。たとえばアルハンガイ県の「オラールザイ駅」というのがありました。その駅をチョロート郡が担当するのか，イフ・タミル郡が担当するのか，といった具合に割当がありました。そしてその割当に従って駅の管理人を出します。その駅を郡の役所が管轄します。

「ではドルジ家が11月にオラールザイ峠で30日間駅の管理をしなさい。21頭のウマを連れて行きなさい。2つゲルをもって行きなさい。」という命令を与えます。文書を渡します。そしてその期間，馬群を率いて，乗用馬を連れて，ゲルを積んで赴任します。駅を通過する人は自分自身の鞍と馬勒を使います。彼に鞍と馬勒は支給しません。滞らせると罰金を科されます。1949年にウマの駅伝制は廃止されました。それに代えて郵便制度を作りました。

「特急便」というのがありました。それは恐ろしく速い便でした。モンゴル政府あるいは内務省の非常に重要な文書をいずれかの県，郡に配達する必要性があれば，それを配達するための非常な重責を有する人を任命していました。その人に当該の文書を配達する期限を指示します。たとえば「2日以内に配達せよ！」とする指示があります。その人は昼夜の別なく移動します。彼が進むルートには特急便が出発した旨通知を出します。また帽子の上に印をつけます。彼が疾走して駅に到着すると直接ウマを替え，鞍をつけて出発させねばなりません。ウマに鞍をつけている間にその人はお茶を飲み，懐にアーロール，エーズギーなどの食べ物を入れます。その人を滞らせることなく，宿泊させることなく行かせねばなりません。そして指示された期限までにその文書を指示された場所に届けます。その他の便はゆっくりと行きます。

私は郵便配達をしているとき，赤色通行証を持っていました。赤色通行証を持った人の鞍を地面に置いてはなりません。乗ってきたウマの鞍をはずして別のウマにつけ，先に進ませなければなりません。赤色通行証を持った人は家畜の足の肉1本分を食べる権利があります。郵便物配達代表には必ず1本の足の肉を煮てくれます。1本の後肢の肉，あるいは1本の前肢の肉を煮ます。それを食べて出発します。食べ切れませ

ん。しかし，そのような規則があったのです。足の肉として主に前肢の肉を煮ていました。ムルンのヤラルト・ネグデルで働いていたとき県の中心地までの駅があり，後に郵便局ができました。
M：これからガチョールトに行きますか？
L：明日行きましょう。今日は遅くなってしまいました。明日の朝早く出ましょう。12時に戻って来ることができるように行きましょう。
M：明日ガチョールトに行ったらもっと田舎の家庭に行ってみたいですか？
K：はい。
M：ガチョールトまで27～28キロです。そこから先は未舗装の道路で20キロほど進みます。往復で100キロくらいです。ガチョールト郡の中心地から先のある谷間にあります。私の親戚たちがいます。２家庭あります。そこに行ってお酒の蒸留を見ることもできます。モンゴルの乳製品を食べることもできます。ヒツジを屠殺し，ヒツジの臓物を食べることもできます。蒸留酒，モンゴル・アルヒを飲むことができます。たくさん飲んでかまいません。許可します。そのようなものを見ようと思うならば私の親戚のところに行くことができます。私の２人の親戚がいます。私はついでにあなたたちの車で親戚たちのところに行き，お茶用の乳をもらってきたいと思っています。そこに私の1～2頭の乳牛もいるのです。1～2頭のヒツジがいます。その親戚のところにいます。肉を食べる時期になるとそれを屠殺して食べてしまいます。私の暮らしを話しましょう。明日９時に行きましょう。それほど遠くありません。この車であれば問題はありません。
K：ではそこで話を続けましょう。

5 旧国営酪農場ガチョールトにて

L：本日のお話をネグデルと国営農場の違いについての話から始めましょう。国営農場やネグデルに作られていた機械化農場についてお話ください。
M：社会主義時代，ネグデルと国営農場という２つの大きな生産者がありました。ネグデルというものについてはすでに話しました。私たちは今国営農場に来ています。これはガチョール国営農場というとても大きな有名な国営農場です。全国に国営農場は18，19くらいありました。国営農場とネグデルは農牧業生産を目的としました。しかし，活動の原則面でかなり大きな違いがありました。

ネグデルというのはネグデルの成員自身の意志で提供された資産，労働の上に依拠した機関です。国営農場は直接国の予算により活動する機関です。国営農場の主な目的は牧畜業ではなく，農耕でした。未開地を開墾する，穀物や野菜をたくさん栽培する，小麦粉や米をたくさん作るといったことは国営農場を通じておこなわれた仕事で

す。その資本は国が出します。国営農場は穀物や野菜を育て，多くの収穫を得てたくさんの小麦粉を作り，また牧畜を行って多くの生産物を得て，稼いだお金で国からもらった助成金を返還する，そのような機関でした。ネグデルは自己資金で活動し，国を当てにすることなく，たくさんのネグデルの成員たちをネグデルが責任を持って生活を向上させていきます。

5.1 酪農場の建設

この機械化酪農場というのは主に国営農場に作られました。農牧業ネグデルは機械化酪農場をほとんど作ることはできませんでした。国営農場にこれを作りました。現在私たちはガチョールト国営農場の機械化酪農場に来ています。これは独自のボイラーを備えていました。これは機械化酪農場の乳牛の牧舎です。ここで乳牛，子ウシは冬を越します。これは暖房を備え，上下水道を備えた建物でした。家畜飼料を牧舎の中で与えます。このボイラーが稼働します。この国営農場は機械化酪農場の飼料を作り，加工します。こうすることによって，ここで非常に大量の乳がとれます。ウランバートルを取り巻いてこのような機械化酪農場が16ありました。ちょうどこれと同じものです。この酪農場はとても重要な意義を持っていました。ウランバートルに乳を供給する16の酪農場がありました。ネグデルとは大きく異なります。

これはガチョールト国営農場の機械化酪農場のホルスタイン用の冬営地でした。民主化運動が起こると同時に私有化というものが出てきました。家畜を牧民たちに与えてネグデルを解散しました。国営農場を丸ごと個人の金持ちに売ってしまいました。酪農場も同様に金持ちに売ってしまいました。こうして国営農場もなくなりました。ネグデルもなくなりました。ここにはガチョールト国営農場というものはなくなりました。ここはウランバートル市のバヤンズルフ区の一区画です。行政単位はガチョールト区画です。これに所属する生産者はいません。全員個人生産者となりました。この機械化酪農場を１人の金持ちが購入したそうですが，どこの人が買ったのかわかりません。外国の，中国の資本なのでしょうか，それで買ったのでしょう。その人は購入して乳牛を全部売却してしまいました。兄弟にあげたり，金持ちに売ったりしました。ここには現在１頭の乳牛もいません。乳牛はすべて個人の所有になりました。乳牛がいなくなったのでここにあった電動搾乳機，飼養機械などの設備もまたなくなりました。その購入した人がそれらのものすべてを取り外して売ってしまったのです。こうしてこの建物は遺棄されました。これはその人の所有の建物です。その人は建物を売ると言っています。これを誰も買いません。一部の場所ではこれを解体しています。解体してレンガを取り出して売っています。民主化というのはおこなわれるべきものでした。重要な問題でした。おこなうべきことを我が国ではおこないました。しかし私有化というのをまちがった方法でおこなったことからすべての資産が無駄にさ

れ無に帰してしまいました。そして現在，たとえばウランバートルで乳が必要です。この近辺の乳牛を所有する家庭が乳を車があるなら車で，車がなければ馬車でウランバートルに持っていき販売しています。少量ずつ販売しています。1軒の家庭が乳用金属缶2本といった感じです。この酪農場があったときには何台もの車に積まれた乳が毎朝ここを発っていました。3トンの積載量を有する乳運搬車で乳をウランバートルに運んでいました。乳を運んでいき，ウランバートルの乳工場というとても大きな工場に納めていました。そのような集中化した統合されたものを解体してしまいました。よくなるのだといって解体してしまいました。民主勢力はよくないことをしました。民主化は私有化をまちがった方法でおこなったことで失敗しました。内モンゴルを模倣して私有化をおこなえばよかったのです。

なぜかといえば，私有化をおこなう際に賃貸借契約をおこなって，たとえばドルジに酪農場を売ることになったのであれば彼と契約を交わし，

「では君はこの乳牛をこのまま維持するのですよ。この乳牛からこれくらいの乳を搾乳するのですよ。これくらいの頭数の子家畜を育て上げ，乳牛の世話をするのですよ。国にこの中からこれくらいのお金を納めるのですよ。自分はその収益からこれだけの金額を受け取りなさい」と決めておくべきだったのです。このように契約を交わしたならば現在もそのまま残っていたはずです。そうすることなくドルジに売却してしまいました。するとその人は雌ウシを売却してしまいました。

そして，今モンゴルには何人かの富者がいると言われています。我が国では民主化のおかげで何人かの富者が生まれました。彼らは胸を反り返らせています。ネグデルを解散したことに関して言えば，民主勢力の政府は家畜を牧民に与えると公布しました。そしてネグデルのソーリを訪れて，共有化して集めた家畜をひとまとめに配分して与えてしまいました。牧民たちは家畜を追いながら去ってしまいました。ネグデルは破壊され残った家畜はいませんでした。イフ・タミルでは2人に1つ家畜囲いを与えてありました。すると，その家畜囲いを真ん中で分けて持っていってしまったのです。粗雑な材木で作った家畜囲いを解体するのを面倒がってのこぎりで切ってしまったそうです。

この酪農場はこんなありさまです。民主化の10年のあいだに，それまで存在したすべてをこのようにしてしまいました。ネグデル，国営農場，工業は完全に，製靴工場，皮革工場，家具工場，乳加工工場などすべてこのような状態になりました。この酪農場を買った人は売ると言っています。これを誰が買うのでしょうか。非常に不愉快なことをしました。私有化をまちがった方法でおこなったからこのような状態になったのです。モンゴルは貧しいです。現在の国会，政府は「国を危機から脱させよう，国民を貧困から救済しよう」というスローガンを示しています。存在したものをこのような状態にしてしまって無一文になりました。この250頭の家畜を有する機械化酪農

場はこのようになってしまっています。あのホルスタインは最初カザフスタンから連れてきたものです。ロシアはこのような酪農場に手をつけず，そのままの状態で稼働させています。

我が国の例の民主化勢力の若者たち，国家大会議議長であったR.ゴンチグドルジ，D.ガンボルド，我が民主化の立役者E.バトウールたちがおこなったことです。彼らはとても落ち着きがなく，とてもよくないことをしました。モンゴルの家畜には冬営地，春営地，夏営地がなくてはなりません。これは冬営地です。この建物はスチーム暖房が備わっています。冬はここから乳牛を出しません。この中で，飼料で飼養します。このボイラーはそれのみを目的としたボイラーなのです。

ネグデルもまた酪農場を持つようになりました。乳牛はこのようなホルスタインでした。ネグデルは酪農場を機械化することができませんでした。自分たちの手で飼養し，自分たちの手で搾乳していました。我がネグデルにはヤクがたくさんいました。雌ヤク1頭から1日平均3リットルの乳が出ます。乳脂肪分の高い乳が出ます。このような混血種の乳牛からは1日1〜20リットルの乳が搾乳できます。乳脂肪分は若干低いです。しかしたくさんの乳がとれます。ウランバートルに乳を十分な量供給していました。乳1リットルの値段は50ムングでした。現在は600トゥグルグになっています。だいぶ違いますよね。酪農場は必ずしも機械化されてなくてもよいのです。

（路傍の人との会話）

M：どうすればよくなりますか？

人：ここの人たちがどういう状態で，どのように復興させるのかまったくわかりません。私たちは見守っています。

M：これを民主化で所有した人びとはどこにいるのですか？

人：その人びとはこの辺りでは姿を見ません。破産しました。

M：こうなのです。このような話しか聞きません。君に融資をする必要があります。そしてこの養鶏場を再興するべきです。しかし融資は与えるべき人を探し出して与えることなく，またもや例の友人知己へと流れてしまいます。エレーン・ホト（モ中国境の中国側の町）に行く行商人に融資するどんな必要性があるのでしょう。むしろ，こうした部門にいくらかのお金を与えれば鶏肉，卵が得られます。これはかなり多くの雇用がまかなえます。このようなことを支援するべきです。このようなことを考え決意した人を支援すべきです。

たとえば，今このような小さな建物を買って，この中に何匹かの鶏を飼って卵を販売し，何人かの従業員を雇い，そして協力して仕事をおこなえば立派な事業になりますよ。この建物を修繕して。政府系の金融機関の職員はこのような人びとを捜し出して融資をするべきです。懐に入れて商売しているような人に融資する必要はありません。それは誤りです。

M：君は融資を受けていないのかい？
人：受けていません。まったく受けていません。
M：受けようと奔走しましたか？
人：融資のために奔走するのは無駄なことです。融資を受けようと走り回っているうちに時間を無駄にします。
M：それではいけません。このようなことを支援することはとても重要です。鶏を所有することになるのです。卵，鶏肉を所有することになるのです。
人：いずれにせよ，エレーン・ホトの卵は食べません。
M：そうなのです。我が国は今エレーン・ホトから卵を輸入しています。ここで誰かが卵を作ろう，国内で，このおんぼろの建物を復興させて鶏卵生産場を作ろうとしていても融資しないのです。

5.2 酪農場の崩壊

M：さっき見学した250頭の乳牛を有する酪農場は春になるとここに宿営していました。ここで出産させます。乳牛に春を迎えさせます。春営地のためにこのようなたくさんの家畜囲い，建物を建てました。春用の家畜囲い，建物には暖房設備はありません。ボイラーもありません。暖かくて春の雨や雪で凍えることのない程度の建物を建てました。建物の中で乳牛は出産します。そこに獣医，動物学者たちがいました。私有化で酪農場が解体して無くなってしまうと春営地も主を失い遺棄されました。これを国内外の人びとと出資し合って購入したそうです。ここにも警備員がいることでしょう。これを運んでいって自宅の塀や建物を建てています。ウシはあそこにいます。各家庭に10～20頭のウシがいます。家庭ごとにこのような数のウシを持っています。このウシはもともと国営農場の機械化酪農場のウシでした。現在，個人所有のウシ，各家庭の所有のウシになりました。ここには何もありません。ウシや家畜がいません。これもまた購入した人の名前はわかるでしょう。現在この中には何もありません。250頭の乳牛の春営地というのは非常に大きな施設なのです。ここの機械設備はこのような状況で遺棄されました。これを奪い取ってすべてのものを持っていってしまいました。この機械化酪農場はロシアの借款で建てました。ロシアに対し我が国は若干債務を抱えています。返済していません。もう返済することができないと言っています。V.プーチンは債権放棄するかもしれません。我が国のものはこのようになってしまいました，よくありません。私有化の必要性はありました。ただし，方法がまちがっていました。これを私有化する代わりに賃貸借の形態で渡していたならば，今でもこれはそのまま利用できていたはずです。当時，この酪農場はとても大きな利益を出していたのです。

5.3 ネグデルの可能性

この向こうには夏営地があります。社会主義時代利益を上げていたところは国から受けた助成金を返済し，その余剰を自分たちが受け取っていました。ちょうどネグデルと同様にです。ネグデルは利益が上がるようになっても国がその利益を徴収することはありませんでした。自分たちで享受することができました。国営農場からは国は助成金も返済させるし，利益も徴収していました。私たちの仕事の成果だといって，そのたくさんの乳から得たお金から，農耕して得たお金から徴収します。助成金というのは融資と理解して結構です。そのお金は国に返済しなければなりません。しかし，利息の付く融資ではありません。無利息の融資です。たとえば，この国営農場に1000万トゥグルグの予算を割り当てます。その1000万トゥグルグを使って生産をおこない，春か秋に，上げた業績から無利息で返済します。ネグデルは融資を受けます。数少ないネグデルが助成金を受けていました。それほど多くはありません。助成金を受けずに利益を上げることができるということは多くのネグデルが実際に証明していました。

一般的にネグデルは国から助成金や融資を受けずに発展するはずでした。規則に定めたとおり，それが可能なはずでした。しかし，それができなくなったり，もともとできなかったネグデルが国に対して債務を負ったりするようになりました。そのようなネグデルもありました。

L：国から助成金なしで運営するために，ネグデルは自由に販売活動をしても良さそうなものです。しかし，当時販売を禁じていましたよね？

M：たくさんの禁止や規制がありました。販売は規制されていました。ネグデルが販売を自由におこなうには障害がたくさんありました。たとえば，あるネグデルが国に10トンの肉を納めるべきであればそれを納めます。そして，さらにある程度の量の肉の備蓄があればそれをネグデルの成員たちの労働日当として支給します。その残りを郡の中心地の労働者や公務員に売ります。さらに余剰の肉があっても，それを売る市場はほとんどありません。それを表だって売ることはせず，ネグデル長自身の判断でこっそり売ります。自分たちに課せられた肉や乳，毛の実行計画を達成できない場合には国は販売を許しません。国が課した肉，乳，毛の実行計画は達成するのがとても難しく，とてもきつい計画でした。かなりしっかり仕事をしないと実行計画が中断してしまいます。中断すると罰金が科されます。実行計画で納めたものを国はお金で購入します。皮革，毛，乳をすべてお金で買うのです。けれども，とても安い価格で購入します。このため，ネグデルを生産者として困難な状況に陥れていました。このような状況でネグデルはより多くの努力をして家畜を増やし，より多くの努力をして肉の備蓄を出し，より多くの努力をしてそれを販売していました。そうすることで経費を補填することができるのです。我がネグデルに関してはこのような方法で生き延びてきたのです。賢い者はこのように生き延び，そうでない者はこのようなことを考え

ることもせずに債務を抱えます。助成金を受けます。

さて，この近辺にある家庭はこの酪農場で働いていた家庭です。また，遠方のゴビアルタイから，オブスから，ホブドから，ザブハンから移住して来たとても多くの家庭があります。この国営酪農場が解散し，そのためにこの地は管理する者がいなくなりました。ここに収入を求めて遠方より来たたくさんの家庭がここに残されたものを運び出して塀や建物を建ててしまいました。とても様々な地方の家庭があります。昔ここはガチョールト国営農場の土地で，この国営農場の成員の家庭だけがありました。外部から関係のない家庭を宿営させることはありませんでした。この国営農場の夏営地はこの山の向こうにあります。その夏営地には家畜囲いや建物は何もありません。単にゲルを建てて宿営するだけの場所でした。乳牛や家畜は家畜囲いもなく，夏の牧草地で暮らしました。

5.4 環境破壊

さて，皆さん見ましたか？この近辺の樹木は少し黒みがかっています。これは樹木に寄生虫が増えたのに起因しています。とても長い緑色の幼虫がいます。イナゴという昆虫が今年とても繁殖しました。そのイナゴは西ヨーロッパから，他にどこからだったか忘れましたが，移動して我が国にやってきました。我が国を通過して他へ行きました。こうして移動する際に家畜の牧草地をたいへん破壊しました。イナゴはとても危険です。このような2つの危険がこの夏モンゴルを襲いました。もし，来年もこの昆虫が再び食べてしまうと，これらの樹木は生長しなくなります。立ち枯れしてしまいます。昔，時々このように緑色の幼虫増えることはありました。しかし今年は特に多いです。

L：今年ウブルハンガイ県でハタネズミ（*Microtus Brandti*）を駆除する目的で非常に大量の駆除剤を散布したそうです。しかし，ハタネズミと一緒に他の動物，植物が駆除されてしまったと言われています。これについてどのようにお考えですか？

M：ハタネズミの駆除の目的で駆除剤を散布すると，一時的に植物が生えなくなり，ハタネズミが駆除されてくれば植物は再び生えるのです。ハタネズミは駆除せねばなりません。この樹木の寄生虫もまた殺虫剤を散布して駆除するべきです。林業局が今年飛行機で森林寄生虫を駆除するためにかなりの殺虫剤を散布しました。散布しても散布しても追いつかず，樹木を食べられてしまいました。ハンガイでは草原を破壊するハタネズミはいません。ステップにだけいます。

5.5 流通の組織化

L：国がネグデルに課していた実行計画のノルマについて，この実行計画を達成するためにネグデル自身は何をしていましたか？ネグデルの成員たちにどのようなノルマ

を課していましたか？これについてイフ・タミルのゲレルト・ザム・ネグデルの実例をお話いただけますか。

M：国は牧畜業生産から肉，毛，皮革の加工をおこなっていました。このころモンゴル国内に工場が設立されました。皮革工場が設立され，皮革から靴や服を作るようになりました。様々な家畜のなめし革などモンゴルの牧民の生活に役立つものを作るようになりました。国営工場が設立され始めると同時にその原材料という重要な問題が出てきました。その原材料を牧畜業生産でまかないます。個人生産者はその原材料の品質に十分に配慮せず，期限内に依頼した数量を，国の需要を考えて納めようという気持ちがあまりありませんでした。そのような積極的な人がいても皆が皆安定して働いてはくれません。ですからネグデルを支援し，ネグデルで集中してネグデルの牧畜生産から原材料を国営工場が購入する体制になりました。

その際，国は2つのとても緻密な政策を実施しました。第1に新たに生まれたネグデルを支援するために肉や毛の実行計画で圧迫することなく，個人生産者を実行計画に組み入れ，より多くを徴収するのです。郡の役所がこの問題を所轄します。ネグデルを一時完全に実行計画から解放したこともありました。しかし，正式に実行計画が課されるようになりました。ネグデルが任意で納めるような制度になりました。後にかなり組織が強固になり，自立して運営することができるようになってきたとき実行計画を課しました。この政策はとても綿密に計算された政策でした。当初，個人生産者の力が強かったので，彼らに厳しい実行計画を与えて圧迫するとネグデルに加入することを考え始めます。そして後にネグデルの活動が安定してきたところで総合実行計画というものが出てきたのです。家畜頭数に合わせて実行計画を与えていました。今よく覚えていません。大型家畜から7～10キロの肉，小型家畜から4～5キロの肉と計算して納めていました。1頭のヒツジから1キロ200グラムの毛，ヤギから200グラムくらいのカシミア毛，ウシやウマから平均で450グラムの柔毛と計算していました。家畜の屠殺実行計画がありました。国内需要の家畜を屠殺する計画です。国内需要というのは学校，幼稚園，保育所の需要です。国家計画食肉と呼ばれていました。毛皮の実行計画は郡の屠殺した家畜の量によりかなり厳しく与えられました。それら計画を達成した後にネグデルは市場に出荷して販売することができるのです。計画を達成できなかった場合，ネグデルは市場にものを出荷して販売することが禁止されていました。個人生産の家畜は市場に出荷することが制限されていました。個人生産者で家畜頭数が少ない家庭は実行計画を免除されていました。ネグデルの成員には家畜頭数の少ない人のための実行計画をネグデルが与えます。彼らは自分の個人所有の家畜の生産物を市場で販売するなどの仕事だけをします。成員たちの生活を向上させるためにこのような措置を講じていました。

私たちが考えるに，近年少しまちがった措置を講じていたこととして，ネグデルを

実行計画で過度に圧迫していたことがあげられます。またあらゆるものをネグデルに負担させようとしていました。学校の日常的経費，保育所，幼稚園の経費，燃料や薪から始まってあらゆるものをネグデルに負担させようとするようになりました。国自身もまた責任を持つべきでした。工場に原材料が大量に必要になってくるとネグデルが納める原材料を増加するようになりました。個人生産者が納めるものをより多く圧迫して納めさせるようになりました。実行計画は，最初は軽微なものでした。先に述べた数字は実行計画が厳しくなった時期の国の平均的な数字です。ネグデルに最初赴任したときこのような決められた実行計画により圧迫することはありませんでした。個人生産者のところでは私が自著に書いたように「家畜の毛は黄金」といって厳しく圧迫していました。これは初期のころです。厳しく圧迫していた時で１キロの羊毛は１トゥグルグ数ムングだったと思います。毛皮はまあまあの値段で，牛皮は20～30トゥグルグ，ヒツジ皮は10数トゥグルグ，ヤギ皮は７～８トゥグルグだったと思います。肉は安かったです。国は１キロの肉を平均で生体の重さで４～５トゥグルグで買い取っていました。たとえば生体の重さが500キロのウシを納めて2000トゥグルグといった感じです。この価格はそれほど変わらなかったはずです。国は質のよい家畜を買い取ります。この家畜を消費者組合が買います。この消費者組合を「通商調達部隊」と呼びます。その消費者組合はすべての郡にありました。ここに家畜を売るのは少したいへんでした。家畜の重さ，太り具合をかなり調べてから買います。獣医学的検査をします。また品質検査をします。通商調達部隊を所轄する通商備蓄省というのがありました。

その省の代表が通商調達部隊に派遣され毎年５月15日から家畜を買い取ります。５月15日というのは理由があります。そのころ家畜はとても痩せています。体重が減っています。そのような体重が減っている時期に国が買い取り，そして太らせて体重が増えれば国に利益が出ます。体重が増えてくるとロシアに売ります。ネグデルの家畜から利益を得るのです。これ以外の時には家畜を買い取りません。５月15日にだけ家畜を買い取ります。その時期生体の家畜の重さは減っているのです。たとえばヒツジの生体体重は30キロ，ウシは120キロ以上でなければなりません。決められたこの体重基準に達していなければ買い取りません。ですからネグデルにとっては少したいへんだったのです。冬に痩せてしまうと基準に達せずたいへんでした。国はこのような面でネグデルと厳しく勘定するようになりました。最初は支持して大所帯にし，その長に給与を支給しておいて，後にネグデルが豊かになり大きくなり，国の総家畜頭数の80～90％がネグデルの家畜となり，個人所有の家畜がほとんどいなくなって10～20％になった時期に，国はネグデルとこのような細かな勘定をするようになったのでした。

1921年の人民革命後に「消費者組合」という組織が設立されました。これは個人生産者のところにある家畜起源の原材料を購入し，国民に小麦粉や日用品を供給する目

的を持った消費者組合でした。その消費者組合は後に通商調達部隊という名前になりました。通商調達部隊は通商備蓄省の付属機関であり，すべてのものをこれによって売買していました。ネグデルが市場に出荷するといって県やウランバートルの方に家畜を追っていくことはありません。ここにしか販売してはならないという規則がありました。そしてすべてはそのネグデルを管理しているネグデル長次第でした。家畜をよく増やし，よくオトルをして太らせて冬を越させる，それができれば少ない家畜を納めて計画を達成できます。ですからそれ以外に多くの家畜を残すことができるのです。残った多くの家畜を市場に販売したり，食べたりする機会が増えます。自分たちで肉を市場で売れば消費者組合に売る肉の価格よりも高い値段，利益で売ることができます。

たとえばネグデルの成員たちに1頭のヒツジを70トゥグルグで販売しているならば，他の人には100トゥグルグで販売します。ネグデルの市場はそれだけでした。ネグデルの成員以外の人に肉や乳製品をよりいい値段で売る。ネグデルの成員たちには安価に売る。この差額でネグデルは利益を得るのです。ネグデルの市場というのは県やウランバートルにものを出荷する必要はまったくありませんでした。そのようにできる可能性もまったくありませんでした。ですから教員たち，医師たち，県の中心地の公務員たちが私たちと取引をします。またネグデル相互間で取引をします。ネグデル長相互間で取引をします。私はゴビから頻繁にラクダを買っていました。買うときには100頭単位で買っていました。ラクダを買うために私たちは規格に合格した建物を建てます。ハンガイ地帯にある我がネグデルはそのような建物をたくさん建てていました。そのような建物をゴビの人びとに売って，そこから100頭単位でラクダを買ってきていました。そのラクダを買ってきて，自分たちの土地で放牧して太らせておいて秋に屠殺しその肉を学校，幼稚園，保育所に配分していました。また牧民たちに配分します。このような方法で自分たちの家畜を屠殺せずに残していき，それを一般の人びとに売るのです。そのようにネグデルの成員たちに配慮していました。ネグデルがかなり自立し，かなり発展してからは国がネグデルからかなりたくさんのものを安価に買い取っていました。こうしたことで国は発展し，工場が稼働を始めました。ネグデル長たちは国に納めるべきものの中から残していき，より高い値段で販売して，それを使って私がお話ししたような文化会館といったような施設を作る仕事をしていました。そのような関係で協力していたのです。

それらの中からネグデルの明暗が分かれてきます。悪化し債務を抱えると国はそのネグデルに融資，助成金を与えます。手当てを支給します。配慮します。国から援助を受けず自立してネグデルの成員たちの給与を毎月支給し，その郡とネグデルをかなり発展させると，たとえば私R.ミンジュールを褒賞したりします。我が国は社会主義時代とても賢明に正しい仕事をしてきました。私たちは1921年の人民革命の時，とて

も粗野で貧しく，文字を知らず，慢性病を持つ，このような国を引き継ぎました。恐ろしく少ない数の質の悪い家畜を引き継ぎました。70年間に政策をうまく実施してきたおかげで誰もが文字を理解し，誰もが健康になり，そして現在人口がとても増加し，人がたくさんになり，母子の健康も改善されました。多くの子が生まれ，多くの子を持つ母親たちを支援し素晴らしくよくなりました。このようにして発展し，この酪農場，国営農場の機械化酪農場は県，特にウランバートルに乳とパンの２つを供給するための大きな事業としておこなわれました。大きな措置が講じられました。

5.6 民主化革命

そうするうちに1990年に「民主化革命」が始まりました。これは本来革命とは言いません。「民主化運動」と言います。若者たちは「革命」といい，私たちは「運動」と言います。この革命は起こるべくして起こった革命であると私たち国民は理解しています。世界各国と比較してみると我が国にはまちがったことがたくさんありました。第１にネグデルに過重な計画を押しつけ，少し苦しめたこと，第２にネグデルの成員たちの個人所有家畜頭数を制限したこと。ゴビ地帯では100頭，ハンガイ地帯で75頭でした。これをさらに増やしておくべきでした。これは少し窮屈でした。第３に我が国の全国民が内外を自由に移動すること，商売することを禁止していました。我が国はソ連とだけ交流していました。それでもそんなに往来できません。その他の国を訪れ，旅行することはありません。その他の国と通商するということもありません。これをこのように厳しく維持するのはまちがっていたと思います。国民の生活を制限して型にはめていました。これはまちがいだったと思います。このようなことを改革しようと民主化革命が起こったのだと思います。民主化運動が起こったのは正しかったと誰もが言います。そしてあの人がさっき言っていましたよね。

「民主化革命をまちがった方法でおこない，私たちは『狂った家畜』のようになってしまいました」と，D.ソドノムが先ごろ言いました。狂ってしまい，今は少し物事がわかるようになってきたと国民は話しています。D.ビャンバスレン政権が最も大きなどんな過ちを犯したかというと，この私有化です。これを本当にまちがった方法でおこないました。これをまちがった方法で行ったためにさっき私たちが見たガチョールト国営農場の機械化酪農場の冬営地がどうなっているか，春営地がどうなっているか，すべてのものをこのようにしてしまいました。「家畜を牧民に」といってネグデルを解散しました。それにもかかわらずたくさんの立派な家畜囲い，たくさんの立派な井戸，たくさんの立派な飼料基地，そのすべてを私有化するといって解体してしまいました。家畜囲いなどはそのまま分割して持っていってしまいました。私有財産として受け取った人びとは，２人に１つの家畜囲いを与えられたためそれを分割して郡の中心地に持っていって，燃やすものは燃やしてしまったり，長いあいだに木造の建物を建てる

資材にしたりなどとして使ってしまいました。至る所でこのような動きが見られました。これはとてもまちがったことでした。

2つ目に民主化という名目で無秩序な状態，道徳的な過ちが生まれました。

「飲み食いは私の勝手です。私の自由です」というようになりました。このため酒をたくさん飲むようになりました。バーや盛り場を過度に増やしました。アルヒ工場がとてもたくさん，中央地方の区別なく設立されました。とてもたくさんの宴会，祭りが広まりました。積まれた石のすべてを「オボー」として祀り，宴会や祭りをおこなうようになりました。何度もナーダムをおこないました。冬もナーダムをし，夏もナーダムをするようになりました。それなのに他方生産がおこなわれません。彼らの1つ目の過ちは国内産業を衰退させたことです。2つ目に家畜を牧民たちに与えるといってネグデルを解散しました。国営農場，機械化酪農場，飼料農場を解散しました。そして民間に渡したと言いながら実は外国の中国人たちに主に渡しています。そして私たちのものはこのように無駄にされてしまいました。人びとはかなりの酒飲みとなり，仕事と生活が乱れました。そうこうしていると自然が試練を与えました。1999～2000年にかけての冬，少し寒害が起こるとすべての家畜を死なせてしまいました。1999年の冬は400万頭の家畜を死なせました。400万頭の家畜を死なせた状況はモンゴルでは2度目のことでした。1956～57年にかけての冬，申年の寒害が起こりました。当時私有財産の家畜が大半を占めていました。ネグデル化がおこなわれていませんでした。そのとき400万頭の家畜が死にました。1999年に400万頭の家畜が死にました。この2つの寒害の間に何回かの大きな寒害が起こっていましたが400万頭の家畜を死なせたことはありませんでした。280万頭の家畜を死なせたことはありました。

そのころネグデルは力をつけていました。イフ・タミルのゲレルト・ザム・ネグデルは寒害が起こったとき家畜を飼養する牧草，ふすま，混合飼料を有し，家畜を凍えさせない暖かい家畜囲いを有し，すべてのソーリに井戸を備えていました。オトルの移動をおこないます。トラクターや車で各家庭に牧草や飼料を届けたり，牧草状態のよい場所へ移動させたりします。ですから400万頭を死なせることはありませんでした。ある寒害で80万頭，ある寒害で180万～200万頭の家畜を死なせました。1956年の寒害，1999年の寒害の間に起こった寒害でそのようにたくさんの家畜を死なせたことはありませんでした。すると共同生産というのは本当に優れているということを6，7回の大きな寒害が示しているといえます。

現在，私たちはガチョールト国営農場にいます。この谷間にはたくさんの個人生産者がいます。彼らは国営農場の何頭かの家畜をもらった人びとです。昨年の寒害で彼らはウシを失いました。ウシは現在まったくいません。私有化でもらった家畜はいなくなりました。私たちは彼らに質問します。

「あなた方のウシは死んでしまいましたが，郡，バグから誰か来ましたか？国，県か

ら誰か来ましたか？」と聞くと，
「いいえ。私たちは家畜を私有しているということで見捨てられました。私たちの面倒を見てくれるところはなくなってしまいました」と話します。

ザブハン県から引っ越してきた1軒の家庭がこの近辺にありました。500頭ほどのヒツジを有し，ラクダが2頭，ウシが約10頭，ウマが3，4頭いたのを私はよく覚えています。しかし1999年の寒害で彼らの家はすべての家畜を死なせてしまいました。わずか20頭あまりのヒツジ，ヤギが生き残りました。ザブハンから引っ越してきたためここには彼らの世話をしてくれる自治体はありませんでした。ネグデルの牧畜単位ソーリでは1度の寒害でこのようにたくさんの家畜を死なせたことはありません。それはあり得ない問題でした。私は80年より前のことはわかりませんが，80年以内の農牧業関連の出来事はほとんど知っています。1999～2000年の寒害において民主化運動の行った活動の欠陥がとても危険な状態で露見しました。人民政府は仏教と闘争し，寺院やその遺産を破壊する過ちを犯しました。人民政府が設立されて以降，700余の寺院が破壊されたといわれています。それはまちがった活動でした。これをモンゴル人民革命党とKh.チョイバルサンが高圧的に行ったわけではありません。背後には外国の圧力があったのです。I.V.スターリンが命じてやらせた活動なのです。他方民主化革命のこの期間に2000もの村落が破壊されました。それを考えると短期間でとても大きな過ちを犯しています。

2000もの村落がなくなりました。さっきの機械化酪農場とガチョールト国営農場のようにこのような村落が合計2000あまり崩壊しました。この数字には255のネグデル，10数個の国営農場，10あまりの飼料農場が含まれます。このような活動をおこないました。国民は現在不快感を示しています。私有化のおかげで何人かの人が富裕になりました。その富者たち，R.ゴンチグドルジのような人びとは十数年間国を率いていました。彼らは富裕な側に過度に迎合し，祖国，国民が悪化している状況に留意しない過ちを犯しました。

2000年の国家大会議選挙，2001年の大統領選挙で国民は不快感を表明しました。
「こんなはずではなかった，もう1度革命党を選出しよう，革命党を選出してこの歪曲した過ちから抜け出さなければ，この民主化革命，民主化のこの波に私たちは溺れてしまう」ということを理解して選挙で投票しました。たとえばR.ゴンチグドルジが党首を務める社会民主党という大きな政党がありましたが，その党は国家大会議に1つの議席も獲得できませんでした。そしてモンゴル人民革命党から立候補した議員は76名中73名が選出されました。大統領にN.バガバンディが再選されました。R.ゴンチグドルジは民主党より大統領選挙に立候補し落選しました。この2人は投票で，N.バガバンディが70数パーセントを獲得し，R.ゴンチグドルジが20数パーセントの得票で負けました。今後どうなるかといえば，民主化路線を変えることなく民間企業を支

援します。外国と非常に高度な友好的関係を締結し，調和して協力します。過度に富裕になり権力を持つことを許さない方針をとります，つまり富裕になろうという運動を広めて一部の人だけが富裕となり他の人びとが貧しくなることを許しません。我が国の憲法に対する改正もそのようになっていますし，最近作られている法律もそのようになっています。

現在，ほとんどすべてのものを私有化し終わりました。住宅の建物を私有化し，家畜を私有化しました。現在たった1つのものが残っています。この土地が残っています。私たちは土地がどうなるのかと，とても懸念しています。土地法が作成され何度も何度も審議され，2000年丸1年間，土地法を審議しました。多くが追加され，削除されました。これから本会議に上程し採択します。土地を所有させないとその法律には言明されます。民主党は土地を所有させるといっています。そのような対立があります。民主化運動の立役者E.バトウールという人がいます。その人は先ごろテレビのインタビューに答えていました。

「私は今休息しています。休暇の期間中外国に行って戻ってきました。帰国後とても忙しいです。土地法の採択が近づいています。土地法に土地を所有するという考えを必ず入れさせます。必ず入れさせるために私たちはデモや集会をおこないます。そのために掲げる旗，スローガンを用意するのでとても忙しいのです」と話していました。この話からすると，土地を所有させないとする法律を国会は採択するのでしょう，その際には民主勢力の人びとはデモや集会をおこなうようです。モンゴル国政府は世界の政策と自国の政策を協調させており，過不足も対立もなく，良し悪しといった話も出ておらず，このレベルで安定した状態になったと私たちは考えています。そのように考えています。ですから諸外国，日本，中国，韓国，ロシア，アメリカ，皆が認めています。我が国の憲法が適切な憲法である，我が国の政策が適切に実施されていると認めています。このように私たちは理解しています。喜んでいます。心配することがなくなりました。心悩むことがほとんどなく暮らしています。モンゴルの高齢者たち，モンゴルの国民は皆心悩むことなく暮らしています。口論がほとんどありません。国会が開かれています。まちがったことや対立していることをしっかりと話し合った上で法規を採択しています。1つ前の国会議員たちの時には議事を進めることができなくなり，審議をおこなえば必ず口論して審議を放棄し議場を後にしていました。本当に見苦しいものでした。国会議員たちがどこに所在しているのか把握できなくなっていました。国会議員たちの中から収賄で2，3人の議員が有罪判決を受けました。国会議員の中の酒飲みや乱暴者が庁舎内で殴り合いをするなどみっともないことが起こっていました。そのような無秩序な状態が蔓延していました。このことを国民はきわめて不快に思っていました。現在はそのようなことはなくよくなりました。静かでおとなしくなりました。

しかし若干の悪いところはあります。注視しておくことが必要です。つい昨日，新聞に1つの懸念される記事が掲載されました。ほぼ1年前，ある会社で2人の警備員を殺害し，質店にあったものを強盗した大事件が起こりました。その事件の審理がおこなわれ，先日判決が下されることになりました。2人が死刑，2人が15〜20年の懲役刑を受けていたのに，最近の審理で無罪とし，事件を棄却してしまいました。こんな強盗殺人をしているにもかかわらず，法律は全然厳しくなく，緩くなっています。他方，露骨に個人的利益を追求し，ネグデルや社会の資産を横領してしまった何人かの富者たちが存在します。これらの人の名前を公表し，横領したものを請求するべきです。我が政府は何も言いません。国民は切望しています。

最近D.ドルリグジャブという人が出てきました。現在のところD.ドルリグジャブほど横領した人はいません。銀行を無一文にして破産させてしまった何人かの人がいます。国民は彼らの名前を挙げています。しかし法廷で話されることはありません。そのドルリグジャブのような10人ほどの人がいます。引っ張り出してきて表に出し，刑を科して資産を没収すべきなのです。

我が国の大統領であったP.オチルバトまでもが国費6000万トゥグルグで個人の冬用の建物を建てさせたことを国民は知っています。韓国から贈られた2台の車を私用で乗っています。政府の四輪駆動車を，です。国際ピオネール夏季避暑地に夏の別荘といって2，3階建ての建物を建てて暮らしています。このようなことをしている人びとが存在しているからには彼らから資産を強制的に接収する必要があります。P.オチルバトは言いました。

「6000万トゥグルグの建物を建てさせたのは事実です。私はそのお金を返します。私にはお金はあります」とラジオで話していました。それで返済したのかどうかを国民に言っても良さそうなものです。言わずに名誉を守りながら暮らしています。国民は不愉快に思っています。お互いなれ合いになっています。このようになっているのです。感情的には私たちは信じて暮らしています。施政方針はとてもよい方針が打ち出されました。4年間の方針です。これからそれを実現できれば十分です。多くを実現しつつあります。地方の義務教育課程の学校の寮の生徒たちに無料で食事を与えています。ですから就学年齢の子どもたちは全員学校に通うようになりました。

過去の10年間はそうせずに有料だったので貧しい人びとは子どもたちを学校に通わせることができなくなっていました。子どもを学校に通わせることができなかったため10年間の間にとてもたくさんの子どもたちが文字を読めなくなりました。100人ほどの兵士のうち20〜30人が文字を知りません。これは恐ろしい問題です。立派な18，19歳の若者がいる。そして文字を知らない。そのような人が10人，20人といるということはきわめてよくないことなのです。軍に文字を知らない青年たちが入隊してきて，隊長たちを大いに困らせているそうです。現在ではたとえば通信部隊では近代的な

様々の機器を操作しなければならず，彼らに授業を教えなければならないのですが，文字がわからず，教えたことを理解できません。現在我が党の樹立した政権は素晴らしい措置を講じました。小中学校の生徒たちを無料で寮に住まわせました。さらに大学や専門学校で学んでいる何千人もの学生の学費を免除する決定を出しました。昨日の新聞に載った記事によると公務員の子息が大学に入学した場合，そのうちの１人の学費を免除するのだそうです。さらに医療関係でもたくさんの措置を講じています。救急車，病院設備の整備などの仕事をしています。日本の援助で今年30数校の校舎の修繕，拡大，整備をしています。ウランバートル市内の20数校で施設の整備を行っているのです。日本の投資，日本の援助です。日本の建設作業員，技師，専門家たちがよく働いています。中国人もまた働いています。インド人も働いています。今後国が発展するための世界的レベルの問題を現政権は解決しました。

１つ目に長年話し合って実現しなかった区画問題を解決しました。モンゴル国を４つの区画に分割し，それぞれの区画で都市を整備することで地方住民を日用品の市場へ近づけます。たとえば西部山岳区画の諸県の中心地をハル・ホリンに建設するよう定めてあります。するとウランバートルに来て市場でものを販売するのではなく，ハル・ホリンで仕事をすればよいので非常に近くて済みます。学校，文化，市場，商業などがここに集中します。このような四つの大きな区画を設置する決定が出されました。

２つ目にモンゴルの国民生活に重要な問題である「千年紀道路（モンゴル国を東西に横断する道路）」の工事が開始されました。「千年紀道路」を世界各国がとても支持しています。世界各国が適切であると考えています。このように的を射，適切に解決しています。これを民主勢力は悪く言っており，「『千年紀道路』は『幻想の道路』と化す」というように我が党が樹立した政権の悪口を言っています。しかし，「幻想の道路」ではなく「千年紀道路」であることが証明されつつあります。道路工事作業が始まり，工事を行っています。このとても大きな問題を解決しました。さらに国内産業を復興させる大きな仕事があります。多くの工場は稼働を始めています。たとえばダルハン市の製鉄所があります。これは再び稼働しました。ダルハンの皮革・皮革衣料工場があります。これはとても重要な工場です。我が国のようにたくさんの家畜を有し，皮革がたくさんとれる国にはこのような工場がとても必要です。モンゴル国を唯一育てることのできる母乳のような工場はエルデネト鉱山選鉱工場です。この工場に特に留意し，たくさんの措置を講じました。債務や融資の問題にも留意しています。このような重要な活動を行っていることで，私たちの心は平穏なのです。うれしく思います。

5.7 ネグデル時代のノルマ

L：ネグデルの成員たちにどんな実行計画を与えていましたか。成員たちはそれを達成するためにどのように働いていましたか。これについてお話ください。

M：ネグデルの成員たちの家畜のソーリを組織する際に地域の状況にかなった量を決めていました。ノルマを決めます。１人の搾乳者に15頭の乳牛が割り当てられ，１つの酪農場は10人の搾乳者がおり，150頭の乳牛がいます。そしてその10人の搾乳者の家族に対する仕事を作ります。ウシ飼い，子ウシ飼いが別にいます。ウシを２人が放牧し，子ウシを２人が放牧します。ソーリは自身の力で家畜の冬の準備を整え，牧草を用意します。搾乳者は１頭のウシから年間平均約550リットルの牛乳を搾るノルマを有します。１リットルの牛乳を搾ると約2.5トゥグルグが得られ，年間で１万1000～2000トゥグルグの給与を得ます。これにさらに超過した分の牛乳の追加給を与えます。子家畜を育てた給与は別払いで，ウシ飼い，子ウシ飼い牧民も別途給与を受けます。ウシの頭数により給与を支給します。ウシ１頭当たり何トゥグルグと計算します。

１つのネグデルに15ほどの牧場があります。ヒツジ牧民のソーリは３つの家庭が１つのソーリをなします。500頭のヒツジで１つのソーリを組織します。ヒツジだけでなく一般的に家畜は年齢，性別によって類別します。たとえば子ヒツジを別のソーリに住まわせます。10月に子ヒツジだけを選別して350頭の子ヒツジで１つのソーリを作るという感じです。頭数ごとに賃金を支払います。平均で500頭のヒツジを放牧する牧民は年間約１万トゥグルグの給与を受けます。平均すると牧民の給与は年間約１万トゥグルグでした。給与を増額したり，減額したりすることもあります。家畜をたくさん死なせたり，オオカミや野犬に食べられたりして不適切に死なせた人の給与を減額します。上手に放牧し太らせれば追加給を受けます。実行計画を達成できなければ給与から天引きされます。家畜を損失すればやはり給与から天引きされます。一般的に何らかの支払が発生した人の金額を給与から天引きして支払わせていました。しかしそういう人は別の方法で支払うこともできます。ネグデルに対して家畜囲いを建てたり，より多くの牧草を刈ったりすれば，それをお金に換算することができます。

最初，人民生産ネグデルといわれていたころ，給与を金銭ではなく労働日当で換算していました。労働日当とは労働した日数を計算し，１日当たり100グラムの肉，200グラムの乳製品，200グラムの野菜を支給するといったように現物を配分することを言いました。ネグデル化運動が始まって以降，かなりの年月が経って後，人民生産ネグデルという名前を改名し農牧業生産ネグデルとなりました。農牧業ネグデルとなった時期に労働日当を現物で計算するのをやめさせ金銭で計算するようにしました。それは60年代のことでした。ネグデルの歴史にはこのような２つの時期があるのです。

L：イフ・タミルのゲレルト・ザム・ネグデルにはいくつのソーリがあったのですか。

M：ウマ，ウシ，ヒツジ，ヤギのソーリをあわせて100に達していたと思います。ソー

リを設立する家畜頭数は家畜の種類によって様々です。子ヒツジのソーリは250頭の子ヒツジを有します。雌ヒツジのソーリは500頭の雌ヒツジで設立します。ウマは100頭のウマで1つのソーリとなります。雄・未出産の雌ウシのソーリは150～200頭のウシを有します。家畜の種類によって様々なソーリがあるのです。すべての総計でゲレルト・ザム・ネグデルは，そうですね，約100のソーリがありました。

L：このように詳細に分類したソーリはいつから組織され始めたのですか。

M：そうですねぇ。最初のころはありませんでした。個人生産の時代のようにネグデルの100頭ほどのヒツジを連れて行って1つの家庭で移動して暮らしていました。当時は個々人の関心をよく考慮していました。

「私は他の家庭と一緒にはなりません。ネグデルのヒツジ100頭ほどを放牧して自分たちだけで暮らします」と言っていました。それを認めていました。その時期は個人の意志でネグデルに加入するという考えをあらゆるものによく適用していました。1960～70年代に法規通りにおこなうようになりました。イフ・タミルに来たころから詳細になり法規に従うようになりました。

酪農場の近辺に雄ウシと未出産の雌ウシのソーリを絶対に設置してはなりませんでした。雄ウシと未出産の雌ウシのソーリというのは2歳ウシ，3歳ウシ，出産していない雌ウシで構成されるソーリです。雄ウシは消費者組合に売ります。それらのウシは別にソーリを作ります。そのようなウシを250～300頭でソーリを作ります。2, 3人の牧民が担当します。1つのソーリには2, 3家庭，20人ほどの人員で組織されていました。20人ほどの人員というのは1つの家庭は平均4人家族です。3家庭で1つのソーリになるので12人になるという風な感じです。若干多くなったり，少なくなったりはあります。あるものは多いし，あるものは少ないです。ネグデルというのは仕事をこのように組織していました。

5.8 流通組織としてのネグデル

モンゴルでは遊牧経済は2000年にわたって続いてきました。そして人民革命の勝利以降，私有財産制をそのままで発展させ，1930年代から共同社会コミューンが出てきました。共同社会コミューンは偏向してしまいました。それは個人の意志の上に組織されたものではありませんでした。強制的に共同社会コミューンに加入させ，家畜や財産を接収していたのです。ですから「偏向」とみなし，党・政府が共同社会コミューンを廃し解散しました。しかし，共同して生活しようという関心は国民の中にそのまま残りました。そして1935～36年ころから人民生産ネグデルというものが設立され始めました。たとえば最初に「隊商ネグデル」というものが設立されました。この隊商ネグデルというのは何かというと国民は牛車や去勢ウシを出し合ってネグデルを設立しました。そしてネグデルに多くの牛車や去勢ウシを集めました。このようにまと

まった人びとは牛車で個人生産者から消費者組合まで，集めた皮革を積んで運搬していました。このような隊商ネグデルは消費者組合と契約を交わしていました。
「アルタンボラグまでお宅の消費者組合の皮革を運びましょう」と合意してからたくさんの牛車で運搬していました。1頭の牛車に200キロの荷物を積みます。80台の牛車で1万6000キロを積むといった感じです。このように皮革を運搬する契約を交わして経費を算出し，そして隊商ネグデルの成員たちはセレンゲ県のアルタンボラグに向かいます。当時3カ所で原材料を回収していました。庫倫，アルタンボラグ，ツァガーン・エレグ中継基地で回収していました。北部の諸県の隊商ネグデルはツァガーン・エレグ中継基地へ，アルハンガイ，ボルガン，バヤンホンゴルなど中央部の諸県は庫倫か，セレンゲ県のアルタンボラグへ届けていました。そこで皮革を引き渡し，そこから小麦粉や米を積んでくるのです。ロシア製品，布，お茶，タバコを積んで契約を交わした消費者組合に引き渡して，消費者組合からお金をもらっていました。隊商ネグデルはこのようにお金を得ていました。1927～30年ころ，隊商ネグデルがたくさん設立されていました。隊商ネグデルはまた公的機関に薪を供給していました。
L：通商調達部隊はいつ廃止されたのですか？
M：民主化が起こったころに通商調達部隊はなくなりました。2000～2001年ころ完全になくなりました。
L：ネグデル体制のころ，通商調達部隊とネグデルはどのような関係であったかについてお話ください。
M：通商調達部隊というのは国の市場，市場を管轄する大きな組織でした。私はネグデル長として牧畜により得られた製品を通商調達部隊に販売します。ですから部隊長とネグデル長はよい友人でなければなりません。非常に親密で，お互いに助け合わなければなりませんでした。ですから私たちは協議をおこない，少しでも高い値段で買ってもらうことを考えていました。
「さぁ，君に700頭分の牛皮を売りましょう。牛皮1枚当たり12トゥグルグで売りましょう」といって最初に値段を決めておきます。その後，牛皮を引き渡します。700頭分の牛皮を調たちするために1歳ウシ，2歳ウシの皮，またあちこちから取引を行って入手した皮を修繕し，乾燥させ，手入れしてきれいにします。国の市場ですからよくないものは買い取ってくれず，ネグデルのものに苦情を言い，文句をつけ，値段を下げようとします。ネグデル長はその通商調達部隊長にお願いをするのです。この人の前ではネグデル長は何度も頭を下げていました。そのような関係でした。国の市場ですからこのように接しました。合意に達し，ものを引き渡した場合は，彼らはお金を問題なく支払います。一方の手で渡すと同時に他方の手で受け取ります。私たち2人のあいだに債務が生まれることはまったくありません。ものを引き渡せばお金が現金で支払われるのです。昔の1つのよいことは国の機関，消費者組合機関とこの生産者

機関とのあいだに債務・債権はまったくありませんでした。受け取って直接引き渡します。個人間でもそのようなものはありませんでした。モンゴル人の昔からの素晴らしい気質は，たとえば私がラグバスレンに100トゥグルグの借金があるならばすぐに返そうと考えるのです。自分で走っていって返済します。人のものを借りて長期間返さないということはモンゴル人の習慣にはありません。民主化の時期，この素晴らしい気質はどうなってしまったのでしょうか。理解できません。

我がネグデルは大きなネグデルでした。我がネグデルには10万頭あまりの家畜がいました。そして消費者組合に債務はなく，何の債権もありません。そのように素晴らしい規律を持っていました。金銭上の厳しい規律を持っていました。私，ネグデル長はたとえば秋に家畜生産ソーリで動物学者に検査をさせ，年をとり越冬できそうにない家畜を選別して1つのソーリにします。それを不合格ソーリと呼んでいました。その中から自分たちの食事の需要に使用します。ネグデル長がヒツジを食べるならばその不合格ソーリから食べるのです。商品のソーリには手をつけません。そのような細かい規則がありました。L.ジャグバラルさんが政治局委員であったとき，我がネグデルに来て魚を釣ったりして2日間滞在しました。そして自宅に電報を打ちました。私が行って電報を打ってきました。L.ジャグバラルさんの電報は20〜30語の電報でした。安かったです。3〜4トゥグルグだったと思います。私は支払って戻りました。

「電報を送った領収書を持ってきなさい，ミンジュール」と言います。私は取り出して渡しました。L.ジャグバラルさんはそのお金を払ってくれました。このように細かく精算をしていました。現在100万単位で債権，債務が山積みになっています。

L：ネグデルの成員の生活必需品すべてをこの通商調達部隊が担当していたのですか？

M：そうです。それが担当していました。学校の生徒たちの本，ノートを始め，小麦粉，米，お茶，タバコ，すべてのものをそれが担当していました。これらのものが品切れになれば部隊長が責任をとります。このすべてを担当します。現在はこの通商調達部隊がなくなったためお茶やタバコを市場から買っています。商人から買っています。この消費者組合はまさにネグデルと国を結びつける仕事です。現在モンゴルで地方の家庭を訪れると1つたいへんなことがあります。ヒツジの毛を買ってくれるところがないのです。各家庭では羊毛というのは迷惑なゴミとなっています。それで雨に濡れて，屋外に放置されています。羊毛1キロが100トゥグルグになりました。それを買いとる場所がありません。中国に少し輸出していましたが中止されました。モンゴルの絨毯工場が買い，それ以上の余分な羊毛は買ってくれるところはありません。昔この羊毛は実行計画で調整していました。我がネグデルは10万頭の家畜がおり，その内の6万頭がヒツジでした。この1頭のヒツジから1キロ200グラムの毛を刈る必要がありました。必ず達成させます。あちこちで羊毛が固まりで転がっていれば私はそれを拾

ってポケットに入れて家に帰ったものでした。そのように羊毛実行計画を達成するために働いていました。「家畜の毛は黄金」と考えていました。羊毛実行計画を達成しなさいと牧民を圧迫していました。

現在は家畜の毛を管理する主がいません。各家庭で眠っています。通商調達部隊に納めた毛，皮革を車で運搬してウランバートル市に運び，そこから小麦粉，米，お茶，タバコを積んで戻ります。ネグデル長は通商調達部隊に納めてしまえば後は関係ありません。彼らが自分たちでやってしまいます。ネグデルには小麦粉，米は常に用意されていました。現在は商人を経由して供給されています。1キロの小麦粉を商人は市場から240トゥグルグで購入して，イフ・タミルでは340トゥグルグで売っています。

昔は通商調達部隊では価格に違いはまったくありませんでした。この価格を値上げしたならば直接起訴されるのです。直接刑務所に入れます。パンは1キロでなければなりません。検事が調べたときに800グラムで，200グラム不足していたとします。するとそのパンを作った人を逮捕し刑務所に入れてしまいます。そのような厳しい法律を持っていました。現在パンは何グラムなのでしょう？おそらく500グラムでしょうか，関係なくなりました。その価格も値上がりしています。現在パンは250～300トゥグルグです。国は通商調達部隊を通じて牧民に必需品をきわめて安価に供給し，牧民から家畜起源の原材料をきわめて安価に買い取っていました。国が少し赤字だったかもしれませんが，他の方法で損失を補填することができました。現在ウランバートルにある小さな企業は牧民から家畜起源の原材料を買うことができず，牧民も自分たちでウランバートルに行って原材料を売ることができません。牧民を市場と結ぶ接続が切れてしまいました。

こうして家畜起源の原材料を使って製造をおこなっていた国営工場が停止しました。原材料を購入することができなくなりました。通商調達部隊は家畜の皮革を買い取るための国が決めた規格があります。現在その規格はなくなりました。すべて商人の手にゆだねられました。現在この「ツァイズ」市場でヒツジの毛皮は5000トゥグルグです。現在8月のヒツジの毛皮というのは冬毛が落ちて生え替わりの毛が伸びたとてもよい毛皮なのです。このようなヒツジの毛皮を持って行って売っても2000トゥグルグにしかならない。「サルマイ皮」と呼ばれているそうです。本来今ごろの毛皮はよい毛皮なのです。これを人は2000トゥグルグで買います。その向こうには中国人がいます。中国の資本で商売を行っています。中国に5000トゥグルグで売るのでしょう。通商調達部隊の代わりにこのような商売が生まれました。

5.9 人材の育成

M：どうもありがとうございました。私の話があなたがたのお役に立つのでしょうか，どうでしょうか，わかりません。

20世紀初頭，モンゴルは未発展で世界各国から取り残されていました。スターリンの命令により寺院を破壊しました。僧侶たちを粛清しました。「いやだ」という力はありませんでした。その悪弊により現在粛清被害者に年間100万トゥグルグの保証金を支払っているのです。たいへんな仕事になっています。モンゴルは，アジアの最もいい部分に位置する国です。満州人たちはモンゴル人を狂った家畜のようにしてしまいました。人民革命の勝利により私たちは向上への道を進み始めました。ロシアで十月革命が起こり，ロシアの援助を受けモンゴル国は70年間向上を続けました。国連に加入しました。モンゴル国は世界に認識されるようになりました。しかしこの民主化，改革が起こり危機に陥りました。中国と友好関係を深め，たくさんの建物，平和橋などを建ててもらいました。しかし相互間で対立し物別れに終わりました。ロシアと70年間友好的に交流し，近年になってロシア人を追放しました。私たちは混乱しながら進んできたのです。私たちは本当に様々の苦労を経験している同情すべき人びとなのです。現在，国・政府は正しく自覚し，国際社会も大いに配慮してくれています。よくなるでしょう。現在は社会が若返っています。今若者，子どもたちだけが仕事をしています。

人民政府のころは芸能，文化，体育，スポーツが常に党・政府の注目の中心にありました。非常に注目する項目の１つでした。ですからネグデルの重要な役割はネグデルの成員たちの啓蒙，芸能，スポーツを発展させることでした。いかなるものも根がよくなければなりません。この花，野菜は根がよければよく育ちます。根が悪ければ育ちません。それと同様にネグデルのいかなるものもソーリの中から発展させる必要がありました。党・政府が注目したことは牧民の文化と芸能でした。ネグデルはこの方面においてソーリ単位でたくさんの活動を企画していました。ソーリ，牧場のコンサート，運動会をたくさん企画しました。党大会，総会で決定を出します。県の党委員会も決定を出していました。

アルハンガイには20ほどのネグデルがありました。その芸能・文化に関してアルハンガイ県のチョロート郡のネグデルが常に優勝していました。そのネグデル長はP.ドルジパラムという人でした。その人は党の呼びかけで私と一緒にネグデル長として赴任した人です。彼は芸能文化活動を自分のネグデルに於いてとても発展させたことで労働英雄になった人です。他のネグデルもこのようになろうと活動します。わがネグデルのソーリ，ブリガードに娯楽施設ができました。ブリガード，ソーリでコンサートがおこなわれます。何らかの記念行事がおこなわれると，ブリガードのコンサート，ソーリのコンサートをおこないます。このおかげで素晴らしい歌手，運動選手，有名な人びとがたくさん生まれました。たとえば，バルドルジという素晴らしい歌手がいます。アルハンガイ県の劇場で歌っています。彼は，我がネグデルのボガト・ブリガードのヒツジ飼いでした。ネグデルは文化芸能活動を県や国レベルで開催してい

ました。県で開催した活動でバルドルジは見いだされ，県文化会館の歌手となりました。県文化会館で歌い続け，文化優秀活動家として表彰されました。我がネグデルの10年制学校は国で最優秀になったことのあるほど素晴らしい学校でした。物的基盤についても我がネグデルが特に配慮していました。そこで働いていた教職員は一生懸命努力して働きます。その校長にS.ニャムドルジという人がいました。彼は素晴らしい校長でした。とてもよく働き，勤勉な人でした。後にモンゴル国功労教員となりました。有名な素晴らしい人がたくさんいました。ネグデルの最も大きな賞といえば「国家最優秀牧民」の称号でした。牧民は国家最優秀牧民，県最優秀牧民となるチャンスに恵まれていました。

我がネグデルから国家最優秀牧民が4人生まれました。その中の1人を特に紹介すると，中細羊毛のヒツジを放牧していたセルダンバという牧民がいます。その人は「国家最優秀牧民」に選ばれました。D.セルダンバは混血種の子ヒツジを減らすことなく放牧し，その子ヒツジをよく育て上げて有名になった人です。秋に雄の1歳ヒツジだけを選別して，それを2歳ヒツジに育てて国に納めます。その人はある年に500頭の1歳ヒツジを引き受け，1年間育てて翌年5月15日に引き渡す際，1頭が40キロ程になっていました。その人は子ヒツジを冬に痩せさせることなくどうやって放牧したかというと，冬には森林の中で放牧していたのです。冬季，森林の中では雪が固まることがありません。柔らかいままです。ですから森林の中には草がたくさんあります。雪の下の草は緑のままです。柔らかい雪の下からヒツジは緑の草を何の障害もなく見つけて食べます。冬季にその人のヒツジはまったく痩せなかったのです。その子ヒツジは秋の太り具合のままを維持することができ，生体の重さで40キロにもなりました。ほとんど成体のヒツジと同じということです。その人は当時の金額で約10万トゥグルグ褒賞されました。私たちはセルダンバを迎えて賞金を手渡し，たくさんの牧民たちに模範を示す素晴らしい仕事となりました。そのような有名な人びとがたくさん生まれていました。

5.10 イフ・タミルの駿馬

競走馬に関しては我がネグデルはとても有名でした。県の優勝馬は主にイフ・タミルから出ていました。ここに考えるべき1つの問題がありました。一時期競走馬といえば個人所有のものでした。ネグデルや共有の競走馬はいませんでした。すなわちすべての通常のウマはネグデルの所有で，すべての競走馬は個人所有だったのです。

「ネグデル所有の競走馬を持とう！」と話しました。そして我がボガト・ブリガードのYa.ルンデブダワーの酪農場でウシ飼いしていたKh.チョローンプレブという人がいました。少し貧しい生活をしていた人です。チョローンプレブは割り当てられたウマでウシや子ウシを放牧していました。ウシ飼い牧民は2，3頭のウマが割り当てられ

ます。チョローンプレブは自分の割当のウマを自分で選んでいました。そして1頭の3歳の雄ウマを選びました。彼はウマがとても好きで，ウマに関心を持つ人でした。いつも競争馬について話す人でした。そして彼は割り当てられた雄ウマを調教して競争に出しました。するとその雄ウマは優勝しました。初めてゲレルト・ザム・ネグデルのウマがナーダムに優勝したのです。私たちは彼を褒賞しました。調教されたウマはネグデルのものです。私たちは自分たち自身も褒賞しました。賞品として雄の2歳馬を贈りました。

その雄ウマは何年も優勝し続けました。県で優勝し，郡で優勝しました。賞は常にチョローンプレブ個人に贈りました。優勝したウマはゲレルト・ザム・ネグデルのウマであると勝ち名乗りをさせていました。こうしてゲレルト・ザム・ネグデルは県や郡で優勝できる競走馬を持ち，それをウマ飼い牧民のチョローンプレブが調教するようになりました。彼は調教の途中で徴兵されました。私は手を尽くして兵役期間の3年を1年に短縮させて戻らせました。軍にいるとき私に手紙が来ました。彼は手紙に妻子のことは書かず，まずあの雄ウマのことを書いていました。

「あの雄ウマは元気ですか，あなたがたは勝手に乗ったり使役したりしないでくださいね。私から取り戻したりしていないでしょうね！」と書いていました。そして私たちは手を尽くして1年で兵役から彼を連れ戻しました。最もうまく仕事を運営するには，実際にそれをしている人と仕事をしっかりと結びつける必要があるのです。

「我がネグデルの雄ウマが優勝した！」といってそれを調教した人を放っておいては絶対にいけません。調教した主を激励すれば，その雄ウマは何度も何度も優勝するのです。そのようにネグデルから競走馬が生まれました。

競走馬はとてもたくさんいたのです。ネグデルが自分たちで調教しなかっただけで，競走馬は非常にたくさんいたのです。ネグデル長自らが調教するということは絶対にありません。競走馬を調教しようとすれば，40日間まったくゲルの姿を見ることはありません。原野でおこなうのです。

こんな感じで有名な人びとがたくさんいました。我が10年制学校を卒業した卒業生が2人，現在の政府閣僚，大臣となって入閣しました。通商産業省大臣 Ch.ガンゾリグ，価格度量衡局長 S.フレルスフの2人は我がイフ・タミルの10年制学校の卒業生です。S.フレルスフは我がボガド・ブリガード出身です。たくさんの優秀な医者が生まれました。Kh.トヤーバヤルという医者がいます。ドイツとよく協力しています。大腸の専門医です。イフ・タミル出身の人です。父親は我が郡の党細胞の書記でした。母は N.ドルゴルという産婦人科医でした。彼はタミルから生まれた優秀で高名な医師であり，ドイツの専門家たちと協力しています。

仕事が順調にうまくいくための根源は若者の活動が順調でなければなりません。芸能活動，スポーツ活動が順調でなければなりません。ですから私はイフ・タミル郡に

「牧民文化会館」を建てたのです。電子楽器というのはどこにでもあるものではありません。私たちは電子楽器を買いました。県に体育委員会というのがありました。そこがネグデル間の試合を開催します。それに我がネグデルはよい成績をもって参加します。私の長男はスポーツ・マスターになりました。ブルド郡にいたころに生まれた息子です。バスケットボールでスポーツ・マスターになりました。現在60歳です。私より老いていて足がよくありません。生涯バスケットボールをプレイしました。現在はイフ・タミル郡にいます。イフ・タミル郡の学校の教員たちと会うと，
「ミンジュール・ネグデル長，お宅のおじいさんは元気ですよ」と言われます。
私よりもひどいです。私は立って歩くことができます。私の息子はできません。杖をつきます。私は杖を買ってあげました。杖をついて歩きます。それなのにスポーツ・マスター。アルダル協会（軍のスポーツ選手養成機関）に所属していました。ナショナルチームに所属していました。海外によく行って試合をしていました。中国との関係が悪いときに北京へ行って試合をしました。当時中国人たちは食事によって苦しめたそうです。石や木を投げられたそうです。今うちのおじいさんはそこにいます。

5.11 家族

K：では，そうしたあなたのお子さんについてまとめてお話ください。
M：私には９人の子どもがいます。ブルド郡で最初の子が生まれました。ムルン郡で２人の子ども，息子と娘が生まれました。娘は第33学校の教員で，よい教員といわれています。とてもおしゃべりです。先日つらいことがありました。夫が亡くなったのです。たいへんでした。血圧が高かったのです。とても強い日差しの中，脳溢血を起こしました。先妻，後妻合わせて子どもは９人兄弟です。現在我が家に３人の子どもがいます。外に６人います。１人がさっきの教員の娘です。１人はS.O.T－３というロシアの建築部隊で建築工事をしていました。最初はウランウデの建築専門学校に留学しました。そして戻ってきて生涯建築の仕事に従事し，退職しました。もう１人の娘は幼稚園の先生です。３人の娘はこんな状態です。ムルンのヤラルト・ネグデルにいるときに生まれた息子は現在ハンガリーにいます。ハンガリーで息子と２人で暮らしています。その下の息子はアルタンゲレルと言います。彼はとてもけんかっ早いです。２人の人が殴り合いをしていれば，行って３人で殴り合いをするような子です。けんかをしていて刑務所に入れられたこともあります。妻子とともにダンバダルジャーの木造家屋で暮らしています。この３人の子どもの１人が医科大学の６年生になります。医者になろうと考えています。ダルハンの医科中学校を卒業して産婦人科病院で５年働き，そして医科大学に入学して今年卒業です。その下の息子は運転手です。UAZ 469という車を運転することができます。彼を韓国に行かせようと思っていますが，行くときには不法な方法では行かせません。

新しい法規が出されました。この法律に基づいて労働調整局のルートで行かせます。それは実現できるでしょう。私には3人の息子がいますが，3人ともお酒は飲みません。3人の婿がいます。3人とも飲みます。おもしろいでしょう？私はあまりよくありません。現在は飲めません。元々若かったころはよく飲んだものでした。それでもひどいことにはなりませんでした。酒をたくさん飲んで解任されたネグデル長もいます。私はお酒をよく飲むということで有名にはなりませんでした。当局に呼び出されて処分を受けるようなことは体験しませんでした。お酒を飲むときにはうわさ話をしません。歌を歌います。笑い話をよく話します。私に関する歌があるのです。タミルを旅しているときに私についての歌を聴きませんでしたか？

タイヒル岩の上を
優しい目で見守る
太ったミンジュールの
2つの緑の目よ

という歌があります。

一緒にふざけあうネグデル長たちはお互いによくあだ名を付けあいます。このような歌が作られました。私は生涯，同年代であれ，同年代でなしであれ，あら探しをしたりけんかやいざこざを起こしたりしたことはありません。常に友好的で，人を笑わせ，吹き出させる，そのような性格で生きてきました。幼少のころは苦労し貧しかったです。今はとても長生きしています。健康で幸せです。そのような人間です。飲食物は何でも食べます。タルバガの肉をかなりたくさん食べます。最近それを時々思い出します。地方に行くことを考えます。

5.12 酪農場の未来

M：さてこの日本の学者の方がたはモンゴルの農牧業を調査し，広め，本を書くためにやってきた人びとです。私は我が国の地方の生活はこうだった，ガチョールト国営農場はこのようであった，機械化酪農場はこうであった。今は民主化運動の時期でこのようになっているということを昔語りに話しています。さて素晴らしい夏をお過ごしですか？

住人：はい，素晴らしい夏を過ごしています。素晴らしい夏をお過ごしですか？

M：今後この国営農場の機械化酪農場はどんな形で発展していくと考えていますか？どのようであったものをどのようにしてしまいましたか？

住人：そうですねぇ。かつては素晴らしい機械化酪農場がありました。ウランバートル市に，国民に牛乳を供給する酪農場でした。そして民主化が始まり，民間のものになりました。酪農場は家畜を売り払い，町の近くへと出て行ってしまいました。ここには現在，主がいません。所有している主はウランバートルにいます。こんな酪農場

になってしまいました。現在酪農場といっているものには大規模の酪農場はなく，小規模酪農場です。現在は例の国営農場から私有化でもらったのか，購入したのか，少なくて10頭のウシ，多くても15～20頭の小規模酪農場という形で経営されています。ここで昔働いていた，あるいは今働いている人びとはこの土地を離れなかった人びとです。3～5頭分の牛乳をウランバートルへ持っていき販売してそれで暮らしている人びとです。こんな感じです。今後小規模酪農場は協同組合的なものが大勢を占めるようになるのではないかと考えています。あちらでもおおよそそのような方針のようです。我がガチョールト国営農場が設立されて40年になりました。40年の間に何を行ってきたかが書かれた略史がこれです。これに労働に関して有名な年配者たちの紹介が書かれています。この本を皆さんに謹呈しましょう。この本にとても具体的に書いてあります。

K：あなたはガチョールト出身の方ですか？

住人：私はもともとガチョールトの人間ではありません。私はウランバートルの自然エコロジー監査局の自然保護官・国家捜査官を務める者です。この谷を担当する自然保護官なのです。L.グルバザルの言うところのこの地域の「地神」です。ガチョールトはバヤンズルフ区第20ホローに含まれます。第20ホローの「シャル・ホーロイ」区画というところに配属されています。私はこの区画を管理しています。ですからまぁここに暮らす住民の生活を観察しているのです。

K：こちらには電気がありますか？

住人：はい，ここでは自分たちで発動機を稼働させています。私たちのところには組織の関係で通信用の発動機や太陽電池といった電源があります。

K：この機械化酪農場は何年に私有化されましたか？

住人：1995年に私有化されました。

L：1995年というとP.ジャスライ率いるモンゴル人民革命党政権の時ですね。最初にどんな人びとがこれを買い取ったのですか？

住人：４つの機械化酪農場があり，それをそれぞれの工場長だった人が買い取りました。

M：こんな風になってしまいました，あなた方の酪農場は。損をしましたか，得をしましたか？

住人：これは損をしたといえます。なぜかといえば単に経営や組織に関して改革し，民間に移行させるのが正しかったと思うからです。公平に上手に分割して，公正に私有化を行っていればまちがいは起こらず，適切な人に渡るはずでした。狡猾な人びとが分割して自分のものとしてしまったことを私はまちがいだと考えています。私有化の過程がまちがっていました。民営化されて昔よりよくなったこともありません。ここには優良品種の家畜だけがいました。かつてのような供給がなくなってしまいまし

た。個人というのは自らの考えで判断するのです。専門家ではありません。現場で学んだ人間です。生活上の経験から育てているだけで，これを本当の理論通りに行っている人間ではありません。私有化がおこなわれたときには私は関与していません。私は1995年に着任しました。私は他の方面で働いていたため私有化の細かいことはわかりません。

M：どうやってこれを復興させますか？

住人：これから復興させようにもたいへんですよ。すでに与えてしまったものを返してもらうということはありません。新たに建物を利用しようにも資金面で引っかかってしまうでしょう。再び優良品種を作り出し，数が少なくてもいいからそれによって前進することはできます。作り出すことができるかどうかという問題が出てきます。簡単には復興しないでしょう。

M：私たちは酪農場を見てきました。1人の若者が小さな養鶏場を設立しようと，1つの古い建物を利用して活動していました。

住人：中央にある建物を人びとが少しずつ買って，解体してなくしてしまっています。

M：その建物を利用して何かをおこなう勇敢で有能な人がいれば政府は資金を支援し，たとえばその養鶏場を設立しようとしている若者に援助をおこない措置を講じ，祖国のために国民や青年たち，失業者に仕事を与えるそのような人を支援するのが正しいのではないでしょうか？

住人：本当にその通りです。かつて事業していた例もあります。中国の投資による合弁の養鶏場が設立され，たくさんの卵，肉を販売していました。次第に鶏の能力が衰えるようです。一斉に衰えてしまうと廃棄し，再びそれをやろうとしているのでしょう。私たちのところにもそのような若者はいます。

M：この酪農場を自分たちで復興させる方法はありますか？

住人：「融資や援助を受けて，この大きな建物を，刈り取った牧草を保管する貯蔵庫のように利用しよう，少なくとも区のレベルで牧草を集め，牧草が必要になったときに提供しよう。それほど高い値段ではなく，かかった経費を計算して赤字ではなく黒字で運営しよう」と考えている人びとがいます。酪農場の所有者と話し合った人たちもいます。ここには小学校があります。小学校は小さな校舎を持っています。また医師がいます。その人にも診療室がありません。各家庭に往診しています。あそこには酪農場の労働者のための4棟の建物があります。8家庭が暮らしています。そのうちの1棟の建物を有料，あるいは援助という形で手に入れるために奔走しているというようなことがあります。時には実現しそうであり，時には実現しないかのようです。ガチョールトは人口が多いです。不良の子どもたちをゲルに連れて行って閉じこめるわけにはいきません。公的機関と話し合うことのできる警察のような組織を作ろうということを私たちは話し合っています。でもそう簡単には実現してくれません。ここ

でも井戸を稼働させたいと思っています。冬季は泉が凍って水がなくなってしまいます。深井戸を稼働させれば家畜に水をやり，人の飲料水をとることができるのにと話し合っています。これもまた簡単には実現してくれません。このようにお互いに叩き合っていてはなりません。

このような自発的な若者たちがいます。ここに何でもいいから仕事を作りましょう。建物があれば素晴らしい彫刻をする器用な若者たちはいるのです。それほど大きくなくても地方の人びとの使っている机や椅子を作ることのできる能力がある人びとがいます。そのような若者たちがいます。支援しようにもあまりうまくいきません。役所はおおよそ把握しています。郡長は今年新しい人が就任しました。

M：貴重な話を聞かせてもらいありがとうございました。あなたの名前は何と言いますか？

住人：私の名前はバザルサドです。私は直接会ったことはありませんでしたが噂であなたのことを知っていますよ。